

日本の多くの学校に存在する「吹奏楽部」なるもの。ウインド・オーケストラなどと名乗ったりするバンドも多い。今日も日本中の小学校、中学校、高等学校、はては大学まで、多くの学舎の吹奏楽部でその名の通り様々な音が吹き奏でられる。彼らウインド・オーケストラの部員はただ楽器を吹いたり叩いたりしているだけではない。そこにはそれぞれにドラマがあり、その様は風にも似ている。

昨年、たった数か月で東京都立けやき坂^{ざか}高等学校吹奏楽部を去った女子生徒から、新しく同部の部長になった二年生の男子生徒の下へ手紙が来たのは、春風が心地よい一九九六年の四月のことであった。

こんにちは新部長さん。お元気ですか？

いきなりですが、今回は宣戦布告（？）のためにこの手紙を書いています。吹奏楽部の皆に読んであげてね。

実は私、なんと瀬野川^{せのがわ}高校に編入したのである。驚いた？田口先生の転任先つきとめるの結構大変だったんだから、まあ許してよね。

それでまあ当然のごとく吹奏楽部に入ることになっています。こっちは三年の夏までは部活動できるから、そっちの皆よりも長く吹奏楽を続けると思うけど、この一年で勝負しましょう。

私は田口先生と一緒に最高の音楽を作る。あの七尾^{ななお}高校よりも上の音楽を作る。けやき坂高にいた半年は凄く楽しかったし皆には感謝してるけど、容赦しないからね。そっちも全力で向かってきてください。

コンクールはもちろんだけど、地区音も定演も、全部で圧倒しちゃうつもりだから、よろしくね。

今日の定期演奏会、実はこっそり瀬野川の先輩と一緒に聴きに行きました。噂ではササノさんというOBの人が本番までの指揮をしてたんだってね。今年はササノさんの指揮で一年間を過ごすのでしょうか？正直、強敵だと思っています！でも田口先生と私のコンビなら負けないから。ササノさん（今さらですが名前あってますか？）にもよろしくお伝えください。

ま、そんなところです。

それじゃあ会場で。チャオ☆

宮内篤子みやうちあつこでした。

桜の季節が早くも終わりを告げようとし、道には沢山の花びらが舞い落ちている。ああもう桜が終わっちゃうのか、と思いつながら宮内篤子は軽快に自転車走らせた。始業式が昨日終わり、ようやく今日から瀬野川高校吹奏楽部の正式な一員となることができるのである。桜が散っても、まだ頬をなでる風は春の香りがする。

宮内篤子は今年二年生になる。昨年までは瀬野駅を挟んでお隣さんとなるけやき坂高校吹奏楽部の一員であったが、秋に退部し、今年度から瀬野川高校への編入を選んだ。なにもしゃやき坂高校が嫌いだったわけではない。むしろ吹奏楽部ではダントツの腕前で将来を嘱望された身である。前途洋洋といったところだったが、一人の男が篤子の人生を変えたのだ。

昨日新しく与えられたロッカーから今日使う分の教科書を取り出して左脇に抱え、右肩には愛器のトロンボーンを架け、職員室へ真っ先に向かう。勢いよく職員室のドアを開けると、何事かというように多くの教員の目が篤子に注がれたが、その他大勢の教員などどうでもいい。あの人はどこ？

「あの人」は入り口から遠く離れた席に腰掛け、のんびりとコーヒーなどすりながら篤子に微笑みかけた。篤子は大股で彼の前まで行くと、深々とお辞儀をした。

「田口先生、今日からまた宜しくお願いします」

田口はコーヒーカップをデスクに置き、お辞儀をしている篤子の後頭部に話しかけた。

「昨日も信じられなかったけど、今日になってもまだ信じられないなあ。おまえ本当に追っかけてきちゃったんだなあ」

「一生付いていきます！」

顔を上げた篤子が急に大きな声を出したので、他の教員が怪訝な目で二人を見る。

「宮内、ここ職員室だし。俺結婚してるし。そもそも俺だって新参者なんだよ？ 妙な疑いかけられるからやめてくれ」

「へっへー」

「へっへーじゃねえよ」

宮内篤子は小学校の時に出会ったこの田口浩之たぐちひろゆきという男の「音楽に」恋をし、彼を追って彼が吹奏楽部の顧問を務めていたけやき坂高校に入学した。そしてその田口が転任するというので吹奏楽部を退部し、あの手この手を使って田口の転任先を突き止め、そして再

び彼を追ってけやき坂高校とは川を挟んでお隣さんとなる瀬野川高校に編入した、という顛末である。

昨日は朝一番にクラスで簡単な自己紹介をした後、体育館で行われた始業式に参加した。なぜわざわざ隣のけやき坂から編入してきたのかと尋ねてくる女子も多かったが、「まあ色々あって」と答えた。まさか「田口先生を追ってきた」などとは口が裂けても言えない。我ながら異常な愛情だ。

始業式が終わり教室に戻った後は、今年からクラス替えがあったこともあり再度クラスメイトそれぞれの簡単な自己紹介の時間があったものの、その他連絡事項などのホームルームを行ってあっさり解散となったので、篤子はすぐに職員室に向かい、田口との面会を要求した。驚いたのは田口である。篤子が転校するのは聞いていたが、まさか自分を追っかけて瀬野川にやってくるとは。女の執念恐るべし、と思わず腰が抜けそうになったのは致し方あるまい。

その日は久々の再会に、ところどころ説教まじりながらも沢山のことを語り合い、けやき坂にいた時と比べて二人の間柄は少し砕けたものになっていた。もちろん篤子だけを特別扱いするわけには行かないから、他の生徒とも前任校よりはフランクな感じで行こうかな、と田口は考えている。それがなんとなく瀬野川の校風にも合っているような気がした。

「先生、それでどうなったんですか顧問の件。指揮者やらせてもらえるんですか？」

指揮者田口を追いかけてきた篤子にとって、これは何よりも重要なポイントだった。

「昨日、あの後に山之内先生やまのうちのとも話したんだけど」

山之内はこれまで瀬野川高校吹奏楽部の顧問を務めていた人物で、今年も引き続き瀬野川高校の教員である。

「なんか山之内先生にもだいぶ買ってもらってるみたいで、俺が音楽面、山之内先生が運営面を見るっていう体制で行くことになったよ」

はたして転任先でまた吹奏楽部の顧問になれるか不安もあった田口だが、以前から交流のあった山之内が「是非吹奏楽の顧問に」と推薦してくれたおかげで、無事に吹奏楽部の顧問の座に納まっていた。

「ああ良かった！山之内先生っていいところあるんですねえ」

「おいおい」

などと話していると、篤子の背後から「ソフフン」とわざとらしい咳払いが聞こえて

きた。振り返ると、まだ若い顔立ちながら綺麗におでこが禿げあがっている男が立っていた。

「ああ山之内先生、こいつが例の宮内篤子です」

と田口が山之内に篤子を紹介する。

「ええっ山之内先生！し、失礼しましたー！」

思いつきり深々とお辞儀をする篤子を見て、

「なかなか元気で面白い子ですね」

と山之内は田口に語りかけた。次に篤子に向かって、

「田口先生と一緒に居たいのは分かるけど朝一の職員室に長居するもんじゃないよ、ほらあと十分で一時間目の授業が始まっちゃうよ」と優しく促した。

「ゲツ、もうこんな時間！やっべ、じゃ先生またね〜」

そう言うのと篤子は駆け出した。職員室で走らないで！と誰か女教師のヒステリックな声が聞こえてきたが構わず駆けた。初日から授業に遅刻したらさすがに心象が悪い。

二年生ということもあり授業の内容も昨年よりさらに難しくなることが予想されたが、蓋を開けばなんてことはなかった。けやき坂高校の一年次のほうがよっぽどキツかった。良くも悪くも、瀬野川高校は進学校のけやき坂高校に比べてのんびりしている。

授業が終わるとすぐに、篤子は吹奏楽部の練習場へと向かった。けやき坂高校とは違い、瀬野川高校には吹奏楽部専用の練習場兼部室があり、そこでは合奏するのに十分な広いスペースが確保されている。なんでも昔に吹奏楽コンクールで東京都大会の予選を勝ち抜き本選まで進んだことが評価され、作られたんだそうだ。まあそんな瀬野川高校吹奏楽部の歴史に篤子はあまり興味がないのであるが。

練習場に入ると、すでに大勢の部員が慌ただしく動いていた。最初にここを訪れたときにも感じたが、お隣さんの学校とはいえ同じ吹奏楽部でもけやき坂とは空気がだいぶ違う。この空気に馴染むのにはもう少し時間がかかりそうだ。ぐるっと練習場を見渡して、唯一会話の出来るトロンボーン・パートのパート・リーダー、三年生の植田うえだかすみを見つけると、篤子は他の部員の邪魔にならないように駆け寄った。正式な編入前の三月に瀬野川の吹奏楽部に顔を出した際、面倒を見てくれた部員だ。四月頭の定期演奏会で新三年生が引退するけやき坂とは違い、瀬野川の三年生は夏のコンクール終了をもって引退となるので、まだこの時期は三年生が部を仕切っている。

「かすみ先輩」

「ああ宮内さん」

植田かすみはその名の通り霞のような雰囲気の生徒だ。ふんわりと振り返り篤子に微笑みかけた。

「なんか皆凄く忙しいんですけど、これから何かあるんですか」

「ああ、今日から新入生の勧誘が解禁なの。で今から新入生が帰っちゃう前に校内に散らばってゲリラ作戦。あ、でも宮内さんもこのあいだ皆には紹介してるからこっちは顔は知ってるけど、本格的な入部は今日からのよね」

そう言うのと植田は、練習場の指揮者台の上から矢継ぎ早に指示を出している、恰幅の良い女性部員に声をかけた。

「かえで、今日から宮内さん一緒にやるんだけどどうする」

その声をかけられた「かえで」という女子生徒は、少し離れたところで不安そうに彼女を見つめる篤子を一瞥し「よいしょっ」と指揮者台から降りると、

「そうねえ、ついこの前皆には紹介したけど逆に皆のことはまだ覚えてないだろうしねえ」などと呟きながら篤子に向かって歩み寄り、ニカッと笑って「私のこと覚えてる？」と問いかけた。屈託のない笑みってこういう表情のことを言うのだろうか。やや戸惑いながら篤子が答える。

「ええ、部長さんですよ、チューバの」

「名前は？」

「ええと、すみません」

「いいのいいの気にしない、あたしは滝本かえでっの。改めてよろしく」

そういって、滝本かえでは篤子の左肩をポン、と叩いた。重量級だ。

「滝本先輩ですね。すみませんでした」

左肩のずれたブレザーを直しながら、何かが心に引っ掛かった。なんかつい最近滝本って名前を他のところで聞いた記憶がなきにしもあらず。

何かを思い出そうとしている篤子の顔を見て、かえでが楽しそうに告げた。

「ちなみに兄貴の名前は有理^{ゆうり}。けやき坂のOBだよ」

一瞬の後に「あーっ！」と叫んで篤子は思い出した。先日のけやき坂高校吹奏楽部の定期演奏会、ポップス・ステージで妙な指揮をしていたラメ色の服を着た派手な男のことを。

「うちの親も大変よねー兄貴はサイケ狂いだしアタシは『かえで』なんて名前の割に楓っ

ぼいのはほっぺたが赤いところぐらいでこんなに太っちゃってさあ、アッハッハ」

なんとも豪気な女性だなあと篤子が圧倒されていると、

「まあ皆の名前も顔もよく分かんないだろうし、今日のはかすみと一緒に勧誘やってみなよ」と滝本かえでは告げた。

そしてチラリと腕時計を見ると、

「おうやべえ、皆そろそろ一年生が出てくる時間だよ！配置につけえくほらゴーゴー！」

と手を打ち鳴らしながら他の部員を校内各地に散らばらせるのであった。

「アタシは部長だからここにいなきやいけないのよ。宮内さんみたいに吹奏楽部に入部希望して直接ここに来る子もいるからね。まあとりあえず今日はかすみのチームと一緒にやってくればいいから」

そう言うのと滝本かえでは練習室の掃除を始めたのであった。

「じゃあ行こうか」

植田かすみの声に篤子が振り向くと、植田のほかにもう一人、さほど背の大きくない、

おさげ髪の子女生徒が大量のチラシを持って立っていた。

「トロンボーン・パート二年の大城咲子おおしろさきこです。よろしく」

「あ、よろしく」

大城はどちらかというと大人しそうなタイプで、植田かすみに似た雰囲気の子だったが、けやき坂高校よりも可愛らしい瀬野川のブレザーが妙に似合っている。まあ制服がセーラー服であれば昭和このうえない感じなのであるが。この二人に任せていいのだろうか、と思いつつも篤子は二人の後に付いて校舎の一階、文化系の部室が並ぶあたりへと急いだ。

*

宮内篤子様

よう。伊野いのだ。山上やまがみが宮内からの手紙を読んでくれた。まさか瀬野川に行ってるとは思わなかった。田口は結婚してるからな、変な気起こすなよ。

あとかなりうちを買ってくれてライバル視してくれてるようだけどご安心を。こっちは相当ヤバイ。今年はポロポロになりそうだ。新入生歓迎会（覚えてるか？一年のとき、体育館で先輩たちが演奏してたやつだ）もかなりしくじった。上条かみじょうがソロ失敗したり。途

中で止まった曲もあった。

まあでもなんだかんだで先輩がいないからのびのびやってる。中本なかもとが金髪になったし彼女が出来たらしい。しかも他校だ。どこの誰かは教えてくれないんだけど。

うちのパートには変なキャラの一年が入った。むさい男だ。俺は断ったんだが押し付けられた。腹式呼吸を理解してくれないんで早くも俺は困ってる。

あと宮内みやうちが抜けたトロンボーンは、二年生不在だ。でも経験者の一年生が三人も入った。だから心配ない。

心配なのは山上のカリスマ性の無さ。俺たちはいいんだけど後輩からどう思われてるか不安だ。またあいつのパートのどきに野崎のどきっていう男が入ったんだけど乙女チックでどう扱っていいかわからない。そっちに同じ中学だったやつとかいないか？

まあそんなわけでたまに手紙書くよ。親がまだPHS持たせてくれないんで。

じゃあまた。

伊野拓也たくやより

けやき坂高校吹奏楽部は始業式の翌日、体育館に新生を集め各部活動が活動内容をPRをする、「新入生歓迎会」のステージに臨んだ。新生一同はこのステージを見てから、各部活動に見学に行ったり体験入部をしたりするのである。

吹奏楽部は先日の定期演奏会から日にちも経っていないので、定期演奏会で演奏した曲目から数曲をピックアップするしかなかった。しかも新三年生が引退し、新二年生十数名だけのステージになるので、特にパーカッションが不足し、ドラムセットで対応できる曲しか選ぶことが出来なかった。

そんなわけでポップス・ステージで演奏した「ハリウッド万歳」「ホール・ニュー・ワールド」「宝島」をチョイスしたのだが、さすがにサンバ系の楽器を多用する「宝島」をドラムセットだけで対応するとかかなり情けない演奏になった。

特に大きな失敗があったのは、定期演奏会で大成功したその「宝島」で、メインの上条のサクソ・ソロは音もテンポも外れに外れ、素人でも「下手くそだな」と分かってしまうような演奏なのであった。ステージ上にも澱んだ空気が流れたのは気のせいではあるまい。

あれだけ練習を重ねたソロをしくじった理由の一つが、三年の緒川おがわさゆり小百合こさゆりの存在である。つい先日の定期演奏会後に上条をフツたばかりの彼女だが、宮内篤子みやうちあつこが抜けたせいで二年

生にはトロンボーン奏者がいなかった。そこで急遽、彼女がヘルプ要因として加わったのだ。純情少年上条の動揺はいかばかりか、計り知れない。

演奏終了後に全員音楽室へ集まると、新しく部長になった山上剛つよしの号令で、二年生全員が「ありがとうございます」と緒川に一礼した。緒川は

「たくさん新入生が入るといいね、頑張ってるね！」と皆に声をかけつつ、上条に向かって「上条君、元気出して！」と彼女らしく優しい気遣いを見せたのだが、それがまた上条の心に傷を負わせたものだから青春とは時に残酷である。

緒川が音楽室を去り、一年生が新入生歓迎会から解放されるまでの間の時間を使って、昨日ポストに入っていた宮内篤子からの手紙を、山上が皆の前で読み上げた。

「うっそー瀬野川？」

「マジで？」

「っーか田口」

「さすがに七尾は超えられないでしょう」

「挑戦的だな」

「やっつてやろうじゃん」

などと、川を挟んでお隣となるライバル校、瀬野川への宮内篤子の編入は衝撃を持って迎え入れられ、音楽室内は相当なざわめきに包まれた。

「打倒宮内、打倒瀬野川！」などと叫ぶ者もあったが、チューバの伊野拓也は相変わらずのマイペースで、懐かしいなあ宮内、などと考えながらピアノに寄りかかり、山上の読む手紙をなんとなしに聞いていた。

そんな調子でざわつきながらも、村田麻紀むらた まきらを中心とした女子が新入生勧誘のチラシを手にも、部員をいくつかのグループに分けて指示を出している。瀬野川と同じく、こちらも校内各地に散らばる作戦だ。瀬野川と違うのは、部長の山上が他の男子諸君と陽だまりで会話を興じているところだろう。

「いやあ宮内懐かしいなあ、おまえ最初ポスト見たときブレターと勘違いしただろ」

今年の部長とトランペット・パート・リーダー、さらにトランペットやトロンボーンなど金管楽器セクションのリーダーを兼務している山上剛をいじっているのは、彼と同じ中学校出身の、元ヤンキー、現在は吹奏楽部の副部長とホルン・パートのパート・リーダー

を務める中本淳^{あつし}だ。

「まあちよつとは期待したけどな、ってその前に淳、おまえのその金髪たる」

山上もすぐに反撃の糸口を見つける。昨年は茶色かっただけの中本の髪も、数日前の定期演奏会が終わって上級生が引退してからは、元ヤンらしく金髪になっている。そこだけは中学生の頃に戻ったらしい。

「別に何だっていいじゃねえかよ」

「いいけど色、明るすぎじゃね」

金髪といっても茶金のような色が多い中、中本淳のそれは見事なパツキンであった。

「こっちのが女の評判いいんだよ」

「どこの女だよ」

「俺の」

中本淳の得意気な回答に即座に反応したのは先ほどサックス・ソロを見事に外し少々機嫌の悪い上条英雄^{ひでお}である。

「あくんでめえに女なんていねえだろうが」

上条の反撃にしばし黙考した後、中本はその場にいる同学年男子メンバー三人に、もつとそばに寄るように手招きし、小声で話し始めた。

「部内はもちろん、部活以外のやつにも言うなよおまえら」

「何だか知らねえけど言わねえよ」

上条が答える。

「おまえが一番口軽そうなんだよ」

「言わねえから。誓う誓う」

なんか軽いんだよなあ、と思いつつも中本は秘密を明かした。

「実はな…彼女が出来た」

「はああああん!!」

叫んだのは拓也である。

「おい伊野おまえうるせえって！バレんだろうが！」

あわてて中本が拓也を諫める。しかし拓也には聞こえていない。

「だれだれだれだれいつから何年何組何番？」

「そこ番号いらねえだろ」

山上が冷静に突っ込む。

「いやうちの学校じゃねえんだわ、だから名前言ってもわかんねえし」

「他校オ〜！」

山上と拓也が同時に叫ぶ。

「あ〜マジでかくそれすげえ〜俺にはできねえ〜」

と上条がうなだれる。

「ちなみにどこ校？」

と再び質問攻めにしようとした山上であったが、うしろからスッパーンとスリッパで頭を叩き抜かれた。あまりの響きの良さに部員の視線が集まる。

「痛っ！村田さん…」

「部長！チャイム聞こえたでしょ！はい皆さん勧誘開始ですよ〜！」

パンパンと手を打ちながら周りに声をかける姿はまるで部長のようであったが、残念ながら本場の部長はたったいま女子部員のリーダー格である村田に殴打された山上である。

中本淳の彼女問題についてはそのままやむやみになり、各自新入生の勧誘へと急ぐ。とは言っても人数が少ないので各パート一人は音楽室で訪問者の対応をすることになると、結局校内に散って行ったのは十名ほどであった。ただ運の良いことに、けやき坂高校の校舎は、一年生の教室と音楽室が同じ四階にあり、なおかつ一年生が帰るための道筋に音楽室があるという設計である。部長山上以下、パート・リーダーなど主だったメンツは音楽室の前でビラを配ったり楽器を吹いたり様々なことを行った。そのとき拓也は、音楽室の入り口と正反対にある窓際の陽だまりを動かずに、ウトウトしていた。

「どうせテューバ志望なんて現れないから」

というのが本人の弁である。誰が聞いたかは、知らない。

勧誘は初日が勝負だ。他の部に入部してしまう前に、新入生を囲い込まなければならぬ。そういう意味ではけやき坂高校吹奏楽部の出だしは順調であった。当初の予想をはるかに超える体験入部希望者が集まったのである。新入生歓迎ステージでのボロボロっぷりから考えると、予想外の出来事であった。

ただ一週間もすると残ったのは結局二十人ほどであり、当初集まった数の半分ほどまで落ち込んでいた。それでも特に上条を喜ばせたのは、美人が多く残ったことである。先輩がダメなら後輩、と次なる恋に野心を燃やすあたり、上条の恋愛生命力は尋常ではない。

部として喜ばしかったことと言えば、奏者不在のトロンボーンに三名もの経験者が入部

したことである。しかも三名ともそこに吹ける。宮内の抜けた穴は、これで埋められることとなった。

と同時に、やはり変なキャラも数名混じってくる。二年生には気の抜けた風船部長の山上、突如パツキンになった（正確には中学校時代に戻った）元ヤンの中本、いまだ恋に恋する上条、もはや何故部活に顔を出しているのか誰にも真意がつかめない拓也といったダメ男子四名がいて、女子にも村田のほかに、これまた元ヤンと思われる小島^{こしま}、言葉づかいの激しい光田^{みつた}といった強烈なキャラもいる。しかし今年入部した彼らは、少しタイプが違う。

まずはトランペット。山上の後輩の中には野崎一郎^{いちろう}という男子が一名入ったのだが、これが厄介であった。乙女男子とでも言おうか。男子とはほとんど関わらず、女子に友達が多い。話し方も、歩き方も、何もかもが女子以上に女子のようであった。

初めのうちは山上も彼を男だと思っていたから（まあ男なのであるが）、それなりに厳しく当たった。

「野崎、もつと息入れてパーンって鳴らせよオメエぶつ飛ばすぞ」

というような具合だったのだが、すると野崎君、泣き出してしまったのである。これには山上も狼狽したが、しばらく接するうちに「あいつは乙女だな」ということで落ち着き、今では女子以上に優しく取り扱わなければいけない地雷のような存在になっていた。

そして次にサククス。入部者は二名。女子男子各一名であったが、後者の名を岸信弘^{きしのぶひろ}と言った。これが上条にも勝るお調子者で、長身の上条と比べかなり背が小さいのでただのおべっか使いに見えてしまうのだが、とにかく片っ端から「かわいいね〜」などと同年代の女子に声をかけては煙たがられている、という存在だ。

上条の本能を実体化させたらこうなるのではないか、とも言われ、すでに「上条ジュニア」というあだ名まで付いていた。このあだ名について上条は「あんなやつのが俺のジュニアなんだ」と迷惑至極であり、岸もまた「上条さんほどヘタレじゃないっす」と不本意そうなのが、周りからすると滑稽で仕方がない。

最後に最終兵器がチューバに入った。権田尚人^{ごんだなおと}という。彼は初登場時から衝撃的であった。勧誘初日、音楽室前での勧誘が一段落し、二年生各自が体験入部者の希望を聞きながら各パートのパート・リーダーに新入生をあてがったりしていたとき、音楽室の入り口に一人ぼつねんと佇むガタイのいい男子がいた。彼はなぜかサングラスをかけていた。

最初に気づいて声をかけたのは、頼りない山上の代わりに勧誘活動を仕切っていた村田

麻紀だ。おそるおそる近づき、村田はサングラスに声をかけた。

「えーっと、入部希望かな？」

「あ、そうッスね」

「希望の楽器は？」

「あ、やったことないんでよくわからないッス」

これは手強いのが来たな、と思い周りを見渡すと、いまだ入部希望者のいないテューバ・パートのパート・リーダー、伊野拓也がピアノを机がわりにして寝ているのが目に入った。

「ちよっと伊野君、起きて」

まだ手に持っていたスリッパでスパーンと拓也の頭を叩き抜くと、完全に寝ていたらしく寝ぼけながらに拓也が目を覚ました。どうやら夢を見ている最中だったらしい。

「おお宮内か」

「あっちゃんは瀬野川行っちゃったでしょ！違うのまた新しく新入生が来たの」

「おう良かったじゃん」

どこまでも新入生の勧誘を他人事だと思っている拓也に対して村田もさすがにイラッとするが、あのよく分からない人物を引き取ってもらわなければならないため、ここは抑える。

「じゃなくて、他のパートは一通り希望者いるけどアンタのところだけなの、希望者いないのが」

「ああそれで新入生か。美人か」

「自分で見なさいよ、あの子」

拓也が眠い目をこすりながら室内を見渡すも、特にこちらを見ている様子の美女はいない。

「どの美人だよ」

「美人じゃねえよ、あそこのサングラス！」

村田が未だ音楽室の入り口に突っ立っている男子を指差す。

「はあ？サングラスって何が…うわおマジか！」

「いい？楽器なんでも良いっていうからあの子引き取ってね」

一方的に告げてサングラスの方へと向かう村田の背中に拓也が呼びかける。

「ちよっと待て村田マジか、マジで言ってるのか、おっくい」

そして村田がサングラスのマツチョをピアノの前まで引っ張って来て拓也に紹介した。

「チューバって楽器をやってみようか。これが先輩の伊野君」

「あ、権田尚人です」

そこにサックスの世話を他のメンバーに任せた小島美紀みきが遊びにやってきた。

「やつほー、伊野君やったね後輩できたじゃん、ってうわお、君なんでグラサンかけてんの」

「あ、すいません」

小島に指摘されてようやく権田はサングラスを外した。サングラスの奥にあった目を見た瞬間、

「どんだけ目キラキラしてんねん！」

と思わず突っ込む拓也。村田と小島はドン引きだ。そこには少女漫画のような長い睫と大きな目があった。サングラスの理由もなんとなくわかるような。そのガタイと目のアンバランスさたるや、なんとも形容しがたいものがあった。まあ俺の人生こんなもんだよな、と美人の後輩を手に入れた山上、中本、上条をうらやむようにして、拓也は権田にチューバを吹かせてみることにした。

それから一週間。権田は残り、正式に部員となった。拓也が最も手こずったのが腹式呼吸を教える作業だ。けやき坂高校での練習に腹式呼吸は欠かせない。何故かと言われても拓也にも分からないのだが。

この腹式呼吸の仕組みが、権田には理解できなかった。拓也も黒板で図解して説明したもののだが、それでもわからない。

「権田、おまえ中学の国語の成績は」

「一です」

「そうか。おまえに国語は無理か。じゃあ何語で説明すればええねんボケ！」

とにかく一週間教えても腹式呼吸がわからないので、音が出ればいいや、ということにして拓也も彼を育てることを放棄した。そこでユーフォニアムの二年生、小野田由里おのだゆりに相談してみることにした。

「小野田さん、グラサンなんかならねえか」

「ええ、あたしユーフォじゃん」

昨年から同期の小野田に拓也は色々相談してきたし、小野田も相談に乗ってきたが、今回ばかりはご免こうむりたい。

「楽器の構造おなじだろう多分。頼むよ」

拓也の顔には悲壮感すら漂っている。

「ええ：いやあ：何教えればいいのさ」

嫌々ながらも断れないのが小野田の性格だ。部内に敵を作らないで済んでいる彼女の長所でもあるのだが。

「腹式」

「まだ腹式？」序中の序ではないか。

「腹式の壁壊してやってよ」

「伊野君教えるの超うまかったじゃん、あれで無理ならあたしも無理だよ」

拓也が図解で腹式呼吸を教えるところは、小野田も見ている。小野田の後輩として入部したユーフォニアムの一年生にもその図解レッスンは参加させていたからだ。

「ものは試しとか言うじゃんよ。とりあえず一回でいいから」

「しようがないなあ」

それでも結局引き受ける小野田であった。もちろん拓也もそれを分かって頼んでいる。

そして一度だけ、小野田による腹式呼吸のレッスンを受けた権田は、見事に腹式呼吸をマスターしたのであった。

「結局女か」

そういつて拓也がボヤいたのも無理はない。

とにもかくにもこうしてけやき坂高校吹奏楽部の新しい一年が始まった。

*

瀬野川高校に転校した宮内篤子から伊野拓也に手紙の返事があったのは、少し時間が空いて、六月に差し掛かる頃だった。

ハロー伊野。

返事遅くなつてゴメン。って別にうちら手紙じゃなくて電話でもいいんだけど。山上君から返信くると思ったらアンタから来たからちよつとビビったじゃないか。

まあ何はともあれ初めはゴタゴタするもんだと思うから、愚痴つてないで気合入れなおしてちゃんと練習しなさいよ。ってもうしてるか。もう六月だもんね。

とりあえずトロンボーンに三人も入ってくれて、ホッとした。たぶんアタシなんかよりずっと活躍してくれることでしょう。負けないけどね。後輩大事にね。野崎って子のことだけど、うちに同じ中学の吹奏楽部の子がいたから軽く聞いてみたんだけど、まあむかしから乙女チックみたいよ。優しくしてれば大丈夫だったさ。

さてこつちも結構人数が入って、いい感じ。同じパートの子とも仲良くなったしね。まあそんなに仲良くないけど。まあ普通だけど。仲悪くはないよ。

問題は、トランペットに同学年で唯一の男子がいてさ、普通に考えたらハーレムじゃん、それかうちらの奴隷？なのにすげーキングなのよ。キング。もうプライド高い友達いないわ別に言うほど上手くないわでチョー迷惑。顔はまあ結構普通にいいんだけど、女子から全然人気ないわけよ。一年の女子は早くもファンクラブ作ったらしいけどね。本性知ったら引くって。

まあとにかくそいつが生意気で、アタシはともかく田口先生のことまで悪く言うわけよ。信じられる？田口先生にも抗議したんだけど、なんか考えがあるとか言ってはぐらかされちゃった。切ない…。

って愚痴書いてると手紙長くなるね。今度どつかで会おうか？電話でもいいから連絡して。

で、淳の彼女ってまさか瀬野川じゃないよね。ああこわ。こつちでも調査してみるけど、続報求ム。

瀬野川高校吹奏楽部の部室は新入生で賑わっていた。校内各地で行ったゲリラ勧誘が奏功したと言えるだろう。特にトランペットとサクスは初心者に大人気でそれぞれ十名近くも希望者がいた。そのうち半数がホルンやクラリネットに異動させられるのだろう。

宮内篤子は、先輩の植田かすみ、同学年の大城咲子とともに一年生の相手をしていた。トロンボーン希望者は四人だ。上級生は植田、宮内、大城の三人しかいない。なんとか一年生も三人は確保しておきたいところだ。一年生は四人中三人が経験者だった。もちろん篤子が楽器を吹けばその凄さは分かる。結局、経験者の三人が残った。理由は「宮内先輩に憧れて」だ。

植田も大城もそれなりに楽器は吹けたが、やはり篤子には敵わなかった。トロンボーンに関しては、今年の問題ないと植田も読んでいた。

そして新学期も一週間が過ぎた。前々から不思議に思っていたこともあったので、一年

生がぼちぼちと帰り始める頃、篤子は同期の大城咲子に聞いてみた。

「まだ全員の名前とか把握してないんだけどさ」

「結構人数多いからね、仕方ないんじゃない？」

新学期に初めて顔合わせをした大城とも、篤子はすでにある程度打ち解けた中になっている。

「まあそれは徐々に覚えていくとしてさ、トランペットに一人だけ浮いてる男いない」

「ああ郡しほりね。うちの学年で唯一の男子。男子の先輩とも別に仲良くないし、かといってうちらとも仲良くないしね」

大城があからさまに嫌そうな顔をする。

「え、同じ学年なの!!すっげー態度でかいから三年だと思ってた」

「入ったときはあんな感じじゃなかったんだけどね。去年の地区音くらいからおかしくなっちゃった」

「たとえばどんな風に」

「態度がでかそうなのはさつき篤子が言った通り。三年にもタメ語だし。練習熱心ってわけでもないし。個人練習中は寝てるし。でもなんか山之内先生の指揮にダメ出ししたり、合奏中に他の部員にダメ出ししたり、まあ確かに上級生と同じくらい吹けることは吹けるんだけど色々問題になって」

先生の指揮にダメ出しするなんて今までの篤子の経験上、考えられない。思っているも言っちゃダメな領域ってあるんじゃないのかい。

「山之内先生って吹奏楽めっちゃ詳しいっていうかオタクなんですよ。それでもダメ出しされるってよっぽど何かあったの」

「まあ詳しいのと指導するのはまた別問題ってところもあるんじゃない?私は山之内先生嫌いじゃないけど」

「へえ。話聞いた感じ、何だか潰し甲斐があるね」

「潰す!!」

大城が驚いて篤子の顔をまじまじと見る。可愛い顔して怖いこと言うのねこの子。

「見てなさいよアタシと田口先生のラブアタックでボコボコにしてやるから」

「なんだかよくわからないけど、まあ彼には近寄らないほうがいいよ…めんどいから」

などと話していると、後ろからキャーッと喚声が起こった。何事かと見てみると、噂をすれば何とやら、郡大二郎だいちろうが「帰る」と言ってトランペットケースを手にした所作で、一

年生女子が大興奮だったようだ。

「わかってないね」と溜息混じりに大城が嘆く。

「何アレ」

「なんか一年の女子の間で早くも郡ファンクラブが出来たらしいよ」

「へえ」

篤子には正直、わからなくもない。顔は悪くないし長身だ。声も良い。あんな先輩がいたら篤子も入会してしまうかもしれない。もっともこの一週間で素行の悪さはチェック済みなので、あくまでも自分が下級生だったらと仮定したらの話だ。

「まだ合奏も始まってないからねえ。なんか一年生から見たらすべてがカッコいいみたいよ」

「確かに見た目は悪くない」

「まそうだけどさあ、あれじゃ彼女も出来ないと思うよ」

大城は終始批判的だ。

「咲子もおとなしそうなのに言うねえ。そして郡に関して情報通」

「情報収集が趣味なのよ。それだけ」

篤子は本当にそれだけかな、とも思ったが、何ととっても彼らが一緒に過ごした昨年一年間を知らないだけに、判断材料が少ない。

「ほほう。頼りにしてますよ情報屋さん」

「いやほんと何でもないからね」

「分かった分かった、でも部活の情報は頂戴ね」

「任せといて。人畜無害はこういうときに力を発揮するから」

そこまで自虐的にならなくても、と思いながら、篤子は大城との会話をそこで切り上げた。

やがて五月。新生も一通り簡単な譜面は吹けるようになってきた頃（このあたりがけやき坂との差でもある）、田口による初めての合奏が始まった。もちろん赴任時に吹奏楽部にも挨拶は済んでいるし、山之内による基礎合奏なども毎回見学をしている。今年の瀬野川高校のコンクールメンバの音もだいたい把握し、田口がコンクールの自由曲に選んだのはベルリオーズの「幻想交響曲」だった。最終楽章「ワルプルギスの夜の夢」のみで、吹奏楽への編曲は田口自身の手による。けやき坂高校勤務時代に密かに編曲をしていた作

品だ。吹かせてみないとどうなるかわからないこともあり、早めの合奏開始となったのである。

「昨日皆でこの曲は聴いたね。だいたい覚えてるだろうから、まあひとまず吹いてみようか」

そういつて田口が指揮棒を構える。篤子は興奮してきた。なんていい選曲だろう。田口先生の色彩の魔術。ああ、いよいよ始まるアタシと田口先生のマジックアワー。思わず鼻血が出そうになる。

曲の冒頭はチューバ、コントラバスといった低音楽器から始まる。けやき坂高校と違い、同じ都立高校のくせに楽器は一通り揃っている瀬野川のサウンドは、分厚かった。これがコンクールまでの間にどう変化していくのだろうと考えるとゾクゾクする。するとすぐに田口は合奏を止めた。

「低音、もっと静かに。曲の最後をイメージして曲を始めよう。曲の解説は昨日、山之内先生がおっしゃった通りだから良く思い出して。音が上がっていくよね。意識していないと音が大きくなりすぎちゃうから、逆に上がりながら音を小さくするつもりで」

「音色を揃えて。音の色だよ。音には色がある。もう一度」
冒頭数小節だけで三十分。けやき坂の時に比べ口調は穏やかになったが、要求レベルは上がっている。結局この日の合奏は曲の半分も進まなかった。

「おい宮内」

田口の気合の入りっぷりに満足しながら篤子がさて帰ろうかと右肩に楽器をかつぐと、後ろから威圧的な男の声が聞こえた。三年生か、と思い

「はい！」と素早く声の主に対面すると、それは郡大二郎であった。

「なんだ郡君か」緊張して損した。

「なんだはないだろ。じゃなくてなんだあの合奏は」

「は？」

言ってることが分からないんですけど。

「けやき坂のときもあんなだったのか」

「あんなんって何よ」

とりあえずアタシの田口先生にケンカ売りたいのは分かったぞ。

「ネチネチ、とろとろ、チマチマ」

「ネチネチじゃなくて丁寧なの。ちなみにけやき坂の時はもっと粗かった」

「ふうん」

「何よ」

上から目線で宮内を服従させようとしていた郡だが、踏んではいけない地雷があるということを彼は知らない。

「イマイチだな、あいつ」

そして、踏んだ。

「ちよつと何なのよアンタ何様よ！」

篤子が練習場に響き渡るほどの大声で叫ぶ。何人かの部員が振り返る。

「あれじゃコンクール勝てねえ」

やや驚きつつも、何とかイニシアチブを取ろうと郡も冷静を装う。

「はあ？じゃあアンタ何か対策練ってんのかよ？」

篤子の声量は大きいまままだ。部長の滝本も気づいたが、逆にここは様子を見ようと、二人の会話を聞いている。

「もつとデカイ音で吹くとかさ」

「それだけ？」

「その方が審査員に受けるんだよ」

「バカかあ！」

正直、拍子抜けだ。全然音楽的な話じゃないじゃないか。

「誰がバカだ、おまえらこそバカだろうが。あんなペースでやってコンクール間に合うかよ。課題曲もあるんだぞ」

「んなこたあアンタに言われなくても分かってるよ。でコンクールで勝つって何よ」

あまりにも価値観が合わない過ぎて篤子もイライラのピークに達している。

「コンクール用の演奏つてもんがあんだらうが」

「具体的に説明できるんのかよそれよお」

「んなもんねえよ」

「だったら偉そうな言うな、バカ！」

「あんなん審査員に受けねえんだよ！」

「てめえ審査員したことあんのか！」

「ねえよ！」

「さつきから何なのよアンタ、ただの妄想じゃん？嫌ならコンクールメンバーから外れたらどうなの」

そこまで言うかこの女。郡もつい篤子のペースに乗ってしまった。

「おまえ、ふざけんなよ」

「ふざけてんのはテメエだーッ！」

気が付くと篤子は郡に激しいローキックをお見舞いしていた。

「ぬあっ」

あまりの痛みに思わずかがみこむ郡を置いて、篤子は駆け出した。ああ何なのアイツ。バカだ。バカすぎる。何も音楽を分かってない。悔しくて涙が出てきた。何であんなやつが部活にいるの。

そのままの勢いで、篤子は職員室に駆け込んだ。

「先生ッ」

職員室の奥では、またもや田口と山之内がのんびりとコーヒーをすすりながら何やら会話をしていた。

「田口先生！」

驚いて二人の教諭が篤子の顔を見る。

「おお宮内どうした、とりあえず涙と鼻水を」

「ほれティッシュ」すかさず山之内が篤子にティッシュを渡す。

涙を拭いて鼻水をチーンとやって、篤子は田口に郡から言われたことを伝えた。思い出してまた涙が出た。一通り話を聞くと、困ったような顔を浮かべた山之内が田口に向かって「ほら」とだけ言った。

「なるほど手強いですね」

田口が微笑む。

「先生、なんでニヤついてられんですか」

篤子の目が怖い。

「いや実はちようど今、二人で郡君の話をしてさ。こっちは大丈夫だよ。考えがある。彼のことは大丈夫だから。それよりおまえが心配だよ」

「どういう意味ですか」

「まだ馴染んでないんだし、喧嘩はやめなさいって」

「だって」

大人の余裕がたまらなく憎らしい。

「郡君を子供っぽいと思うか」

「思います。バカガキです」

「じゃあおまえまでバカガキになるなよってことだ」

「うう…」

なんでアタシが説教されるハメに。

「まあ焦らずゆっくりやろうじゃないか」

「郡君については他の部員からも苦情が来てるんだけどね。根はいい子だから。きっと分かる日が来るよ、宮内さんも皆も」山之内がまともに入り、篤子は職員室から追い出された。

合奏初日からこんなメゲることが起きるとは思わなかった。郡大二郎、許すまじ。とぼとぼとロッカーに向かい、靴を履きかえた。けやき坂の一年生の時に買った靴はもう結構汚れている。駐輪場で力なく自転車の鍵を開けた。ちくしょう。伊野のお気楽さとは違う苛立ちだ。方向性は違うがバカには違いない。バカの伊野に手紙を書いてみよう。気が晴れるかもしれない。電話したら、また泣いてしまいそうだから、それはやめておこう。結局、伊野に手紙を書くまでにはこの後一か月かかった。手紙を書くたびに怒りが込み上げてきて、遅々として筆が進まなかったのだ。

*

けやき坂高校吹奏楽部一年の野崎一郎の自宅に、瀬野川高校一年の佐藤直弘さとうなおひろから手紙が届いたのは、篤子が拓也に手紙を出してからおよそ一ヶ月経った六月の後半だった。

野崎一郎様

久しぶり。瀬野川に行った佐藤直弘です。元気してますか？なんかそつちからうちに来た宮内先輩が文通してるらしいので僕もマネしてみました。

そつちのトランペットはどうですか。レベルは高いですか？部長さんがパート・リーダーもやっていると聞いたので、なんだかスゴイ練習してそうなイメージです。もしそうならちよっと心配だけど、野崎君なら友達もたくさん出来ると思うので頑張ってください。

こっちの先輩はスゴイ人がいました。郡先輩と言う人なんだけど、二年生なのに三年生を追い抜いてコンクールでトップを吹くことになりました。その時はちよつともめたらしいです。

僕が言うのもなんですが、腕前は三年生に匹てきします。そして誰よりも音楽のことを考えています。ちよつと前まではコンクールをかなり意識していたみたいだけど、最近は少し様子が変わってきて、先生の言うこともよく聞くようになったというウワサです。

ただ後輩にはキビシイ！ので、僕はコンクールには今年は出られないけど、それでも面どうを見てくれるし、頑張つて郡先輩みたいになれるよう、思っています。

やっぱり高校の部活はだいぶ違うね。目標になる人が出来て、僕は良かったと思つていません。

僕もあれだけ吹けて、頭が良くてセンスがあつたら、来年は後輩からモテモテな気がします。ただ残念ながら郡先輩は顔もかっこよくて男の僕でもホレそうなので、さすがにそのレベルには届かないかな。まあでもそんなわけで楽しくやっています。

野崎君はどうですか。相変わらず乙女キャラですか。けやき坂は一年生もコンクールに出られるというのでうらやましいです。コンクールの会場で会えるのを楽しみにしています。もちろん演奏も。それでは。

手紙は難しいですね。文章がところどころおかしいです。なんで敬語になるんだろう。

拓也に手紙を出すまでの一ヶ月、篤子は度々郡大二郎と衝突を繰り返した。郡は何度もコンクールで勝つためには、という言葉葉を口にした。純粹に田口の音楽を追い求めてきた篤子にとっては、彼のこだわりは何の価値もないように思えた。

先輩の植田や同期の大城、部長の滝本までもが篤子をなだめにかかったが、けやき坂同様に地区予選敗退を続けている瀬野川の生徒が「コンクールで勝つ」などと言っても篤子からすれば「まともに吹けるようになってから言え」というもので、焼け石に水、といった状態が続いた。

そんな篤子の頼みの綱の田口はと言えば、「彼は大丈夫」と言つたきり、これといった動きもなく、初回の合奏と変わらず細かくネチネチと合奏を進めていくのであった。不思議なもので、初日に郡が「このペースじゃ間に合わない」と言っていた田口の合奏は、ゆつくりではあるが着実に進んでおり、これはこれでアリなんじゃないかと多くの部員も思ひ始めていた。

そして六月も中旬に差し掛かる頃、合奏を止めてしばらく思案していた田口が、何かをひらめいたような、なんとも軽い調子でこう言つてのけたのである。

「そうだ郡、おまえ自由曲のトッパ吹けるか」

三年生は全員凍りついた。それまで常に年功序列でやってきたバンドである。郡もすぐに言葉を返すことが出来ず、トッパを吹いている三年生男子の表情を伺うばかりであった。そして次に、

「でトロンボーン。課題曲も自由曲も宮内をトッパにしなさい」

今度は命令だった。さらに凍りつく練習場で、部長の滝本が恐る恐る言葉を発した。

「あの、先生」

「なに？」

田口は何か俺ヤバイこといったかなあ、という具合でキョトンとしている。

「うちはずっと三年生がトッパ吹いてきたんで、二年生がトッパはちよっと…」

「どこが問題？」

想定範囲内の反論だ。ここを乗り越えられれば瀬野川は変わる。

「問題だと思います」

そう斬り込んだのはトランペットでトッパを吹いていたパート・リーダーの三年生だ。

「どういう問題？」

田口はあくまでも優しい口調で返す。優しいのは口調だけだが。

「僕にもプライドがあります」

「どんなプライド？」

「郡は二年だし、」

「学年がプライドなのか？」

「いやそれだけじゃないですけど、なんつーか」

「音楽のセンス？音色？テクニク？」

我ながら嫌味な畳み掛け方だな、と思いながらも田口も彼なりの正念場だ。

「いや、そう言われるとよくわからないですけど」

「俺もさ、君たちの今までどおりのしきたりみたいなので良い音楽が作れるならそれで良いと思うよ。でも申し訳ないけど君たち三年生は現実を受け入れなきゃいけないよ。誰が今年のバンドを引っ張るべきか、聴き分けられる耳を持たなきゃいけない」

静まり返った部員を見渡し、最後にこう付け加えた。

「郡と宮内が今年のキーマンだということに、気付かなきゃいけない、君たちは」

「ちょっと待ってください」

郡が割って入った。

「俺は、その、無理じゃないですけど、理由がわかりません。あと宮内と隣り合わせは嫌です」

現状のセッティングだと、トランペットとトロンボーンのトップ同士は隣り合って座る形になる。

「まず理由は、幻想交響曲の色をおまえが持つてるからだ。正確には、まだ引き出されないけど、持つてるってことだ」

「引き出されてないんだったら郡じゃなくなたって」

さきほどの三年生が反論する。

「それを引き出すのが宮内だ」

篤子もさすがに哑然としている。アタシが郡の何かを引き出す？何それオエツ。でも田口先生が言うんだから間違いはない。はず。自信ないけど。

「植田、君ならこの意味がわかるはずだ」

「はい」

植田かすみは、この時ばかりは普段の彼女からは想像出来ないほど、決然と同意を示した。

「じゃあトロンボーンは問題なしだね」

「問題ありません」

「ちょっとかすみ！」

思わず声を荒げたのは部長の滝本だ。それに対して植田がハッキリと答える。

「いいと思うよそれで。宮内さんが私のパートを吹いていたら、どんなにいい音がするだろうって、毎日、思ってた。トップの私がセカンドの宮内さんに引っ張られてるの、わかるでしょう。先生がそれで良いっていうなら、そうした方が良くと思う」

「なんで、先生…」滝本は泣き出してしまった。

「おい滝本、しっかりしてくれよ。おまえ部長だろ。ただ約束する。郡と宮内をトップにすることで、おまえらが行ったことのない大会まで、連れてってやる。郡、宮内、いいか」

「はい」

「はい」

良くないです、とは言えない空気が、田口の口調にこもっていた。若き二人のエースも反論することが出来ないほど。

お互いの顔を見てベーとかイーとか変な顔の応酬はしたものの、とりあえずは二人、隣同士で楽器を吹く羽目になってしまった。

こうして合奏中に急遽大抜擢が行われたのであるが、その後の幻想交響曲の合奏を聴けば、誰もが納得した。プライドを粉々にされたあの三年生ですら、音が色彩を帯びてくる。間違いなく、田口が宮内の音色を引出し、その音に郡の音色が引き出され、全体のサウンドが導き出されていくようになった。冒頭の低音パートさえも、合奏で聴く新しい二人のトップの色彩に合うように演奏をするようになった。瀬野川高校の自由曲は、着実に田口が求める完成形に向けて動き出していた。合奏場の隅で、もう一人の顧問である山之内が、「お見事」とでも言いたげに、やや禿げあがった前頭部を撫でていた。ただ、この後の三年生部員のケアは山之内の仕事であろう。「お見事」ではなく「まいったな」だったのかもしれない。

郡も、隣で吹くことで、あらためて篤子の音楽センスには脱帽せざるを得なかった。篤子からすれば「オマエちゃんと付いてこいよ」という感じではあったのだが、隣で聴いてみると思った以上に思い切りのよい郡の吹き方は、嫌いではなかった。

そしてこの日を境に、郡大二郎はめっきり大人しくなってしまった。篤子と衝突することもなくなった。田口への批判を口にすることもなくなった。ただひたすらに責任を感じて自分のレベルを上げることに集中しているようでもあった。ただし後輩への指導も厳しくなったので、一年生がヒイヒイ言いながらついてくハメになったのは流れ弾に当たったようなものである。

*

佐藤直弘様

野崎です。お手紙ありがとうございます。僕は別に乙女キャラじゃないんだけど、なんか周りはずういう風に見ているようです。こっちは男の先輩は怖いけど女の先輩も同学年の女子も仲良くしてくれています。だからいけないのかなあ？

うちのパートの先輩で部長の人は山上さんって言うんだけど、練習は厳しくないよ。た

まに練習サボってたりするし。あれはサボってるのかな？よく副部長さんと話してるから、サボってるわけじゃないかもしれないけど、よく二人とも「だりい」って言ってます。

そうそう今年の自由曲はホルストの木星になったんだけど、全然吹けなくて困ってます。今から曲を変えるのもちよっとってことでまあ無理してやってるって感じですよ。何より僕が全然吹けないのであれこれいう資格ありません。

それはさておき、とにかく個性的な先輩が多いです。男の先輩は怖いけど遠くから見たり話を聞く限りだと相当ヘンです。副部長さんは金髪で不良です。テューバの伊野さんという人はなぜかギターを弾いていることが多いですが、合奏ではちゃんと吹けています。サクスの上条さんという人はよくわかりませんがよくフラれているそうです。この間もうちの学年の女子にフラれていました。ちよっとかわいそうです。

という感じで特に目標となる先輩もいません。佐藤君がうらやましいです。

コンクールで会いましょう。演奏はあまり期待しないでください。

それにしても手紙はなんかヘンですね。佐藤君の敬語というのも新鮮です。

なんだか宮内も妙なことに巻き込まれてるな。ギターを弾く手を止め、篤子からの手紙を読んだ拓也は新天地に旅立った旧友のことを考えていた。今でもこうして連絡があるのだし旧友というほどでもないのだが。

六月初めのことである。手紙には電話をくれとあったが、こちらなかなかそうもいかない。正直明かしたくない事情もあるし、ギターの練習も忙しい。そもそもPHSの番号すら知らされていないわけで、家に電話して家族が出て来ても気まずい。そんなわけだから、とりあえず後でいいか、と拓也は手紙を放っておいた。結局それ以降、二人が連絡を取り合うことはなかった。

数日前に、コンクールの自由曲が決まっていた。

コンクールの選曲は、新生を含めた部員全員で行った。候補曲には昨年演奏したような元来吹奏楽のために書かれた作品、いわゆるオリジナル作品も多かったが、管弦楽曲を吹奏楽用にアレンジしたものも数曲含まれていた。一日練習を休みにして候補曲をすべて聴き、最終的には多数決で決めることになっていた。

新生の数人は、中学校でも親しんでいた明朗快活な吹奏楽オリジナル曲に票を入れたが、今年是指揮者が田口から笹野ささのに代わったため、新しいことにチャレンジしたいという

理由と、定期演奏会でのシヨスタコーヴィチの吹奏楽編曲がなかなかの評判だったことから、アレンジ作品に人気が集まった。なかでも美しいメロディと壮大な世界観を持つホルストの「木星」は多くの部員のハートを掴み、結局そのまま「木星」が今年のコンクール自由曲に決まった。

先に課題曲が上岡洋一の「はるか、大地へ」に決まっていた。この曲は今年の課題曲四曲の中でも特に演奏時間が長い。コンクールの規定で演奏に使える時間は課題曲と自由曲を合わせて十二分しかないので、木星は難しいからといってテンポを落とすことも出来ないギリギリのラインだ。楽譜は、はるか昔に今は誰も知らない先輩が使ったであろうものを、譜面管理の鈴木と小野田が楽譜ラックの中から見つけていた。

選曲会が終わったあと、部長の山上が選曲の結果を新顧問の笹野次郎に伝えると、少々驚いていた。クラシックに縁のない笹野一族の彼でも木星くらいは知っている。まあ実際に指揮するのは甥っ子の笹野滋しげるなわけで、正直どうでもいいといえはどうでもよく、「ああ、じゃあ滋に伝えておくよ」と、それ以上は何も言わなかった。滅多に部活にも顔を出さない顧問である。

職員室を出た後に山上が音楽室へ戻ると、ちょうどクラリネットのパート・リーダーである橋本はしむらが帰ろうとしているところだった。

勉強もスポーツも楽器も出来る才女であり、なおかつ山上の同期には珍しく少し長めの黒髪が映える美人で後輩からの人気も高い。フルートやクラリネット、サククスなどの木管セクションのリーダーはサククスの西堀にしほりしか立候補しなかったので西堀に決まってしまったが、今になってみれば橋本を木管セクション・リーダーにすれば良かった、なんて声も聞こえてくる。

ただ、部内ではクラリネットの同期や後輩以外とは余程のことがないと会話をしない人物である。山上も、今年から同じクラスになったバリトン・サククスの戸崎聡子とどきさとことは少し仲が良いようだ、くらいの認識しかない、謎に包まれた同期であった。が、今日ばかりは放っておくわけにはいかない。山上は木星に票を入れなかった。その理由がクラリネット・パートにあるからだ。

「あの、橋本さん」

山上の存在に気付くことなく階段を降りようとする橋本を山上は呼び止めた。

「はい？」

急に声をかけられて驚いたのか、橋本は敬語になってしまったが、振り向いて山上だと分かると、急に興味のなさそうな表情になった。怖い。

「木星、譜面見た？」

「見た」

返答は短い。

「出だしの細かい音符、クラがメインだけだけど大丈夫？」

正直失礼なことを言っているような気がするが、部長としても見過ごせない部分ではある。

「わかんない」

「いや、わかんないって」

「でもたぶん昔の先輩は吹いたんでしょ」

「そうだろうけど」

「じゃあ出来るんじゃない」

「じゃない、って」

六月独特の嫌な湿気が橋本の言葉に乗って山上を襲う。

「山上君もソロ外さないように気を付けて」

「あ、うん」

「じゃあ」

そういうと橋本は踵を返し、階段を降りて行った。

この人怖え。俺って部長だよな？部長決めるとき、皆協力してくれるって言ってたよな？部長らしくないといえたらしくもない自分も悪いが、どうも皆、他人事のように部活に来てる感じがする。どうしたもんかと思えようとしたが、名案は浮かびそうになかった。

正直、新入生が入ってからというものの、同期がシャキッとしない。

「だりいわ」

独り愚痴るのが、最近の山上のクセになっていた。モヤッとした風が廊下をゆっくり吹き抜けていく。

*

「なにいいいいいい木星」

その日の晩に叔父から電話を受けた笹野滋は、文字通り椅子から転げ落ちそうになった。今年の三月に無事にけやき坂高校を卒業し、晴れて音大浪人となった笹野であったが、とりあえずの指揮者とは言っても毎日けやき坂に通う訳にもいかず、ちょうど学生だけで出来るような基礎合奏メニューを作成しているとところだった。態勢を崩した際にとっさにその紙にしがみついたものだから、せつかくのお手製メニューも盛大に破れた。

「叔父さん、正気かあいつら！」

思わず電話向こうの叔父に怒鳴ってしまふ。

「いや俺にはよくわかんねえよ」

そりゃあそうだ。新年度になってから部活には月一回しか顔を出していない。色々な部員が音楽室の利用申請や経費の申請やなんやかんやで個別に職員室を訪問してくるくらいだ。

「そうですか…」

「楽譜はもうあるってよ。早目に顔出せや」

「わかりました…」

力なく答えて電話を切った後、笹野滋はしばらく呆然とせざるを得なかった。

確かに言ったけど。選曲の前に、

「ちよつと背伸びするくらいがちょうどいい」

とは言ったけど。どんだけ背伸びする気ですかと、問いたい。

キビシイなあ、と呟いて笹野は頭を掻き筆った。もう基礎合奏のメニューどころではない。あと二ヶ月で課題曲と木星を完成させなければいけないのだ。しかも去年と違い、今年の二年生は「吹ける」人材が極端に少ない。完全に出遅れた。

ともかくにも、明日にも学校に顔を出し、スコアを手に入れ、合奏計画を練る必要がある。笹野がいなくても上達するプログラムを作らなければならない。

七月になると、いよいよコンクールが近づいてくる。昼間は熱いがまだクーラーをつけるほどでもない晩に、戸崎聡子はライバル校へと移った篤子の自宅に電話をかけてみた。これとって理由はない。ただ、話したかっただけだ。

電話に出た篤子の母親から、篤子に代わってもらった。

「もしもし」

「もしもし、久しぶりだね」

「だねえ」

「どうしたの急に。何か面白い情報でも入った」

篤子の声は、聡子よりも明るかった。それだけで聡子は何だか少し気遅れしてしまう。

「いやなんとなく。伊野君が手紙来たって言ってたから。そっちどうかなくとか」

「あいつお喋り野郎だな。こっちはまあ、順調」

「そっか」

「声が沈んだね。さては上手くいってないな？」

鋭いな。

「やばいよ。マジで」

「ササノさんて人がいるんでしょ」

「まだ笹野さんの出番じゃないレベル。来てもらっててなんだけど」

うわあ、我ながらひどい言い草だ。

「後輩から聞いたけど木星やるんだって？」

誰だよ情報流したの。まあいいけど…

「そう」

「どの辺がやばいの」

「低音以外全パートかな。あ、トロンボーンはまあ何とかなりそう」

「なに、じゃあ他のパートは一年生だけのトロンボーンに負けてるわけ」

あ、ちよいとグサツと来たそれ。

「いやひどいよマジで。合奏中とか耳が壊れそう」

「分奏とかもやってるんでしょ」

分層とは木管、金管、それぞれのセクションごとに分かれての合奏のことだ。

「まあ分奏の面倒見てるのが山上と西堀だからね」

「山上はともかく西堀さんは良さそうじゃん」

「全然ダメ」

ダメな理由はここで言う必要はないか。

「厳しいねえ。聡子が代わりにやればいいじゃん」

「今さら役職代われないでしょうが」

「そういうもんか」

なんか篤子、突き抜けてんな。

「そんなこと言い出したら西堀暴れるよ。ただでさえ最近ヒステリックだから」
「あの人そんな感じだっけ？」

「分奏の時だけね。『なんで皆ウチの言うことが聞けないの！』とか叫ぶよ」
あ、流れでダメな理由ひとつ言っちゃった。

「ああひどいねそれ」

「ひどいわ。スコアばっか見て自分の練習しないからサククスも下手になってるし」
今のは言い過ぎか。

「あの人一番上手かったのにねえ」

「まあ今でも上条とか小島よりはマシだけどね」
マシってアタシってば一体。

「こないだの定期演奏会、上条良かったじゃん」

「アイツはもうポップス要員」
確かにポップスは良いんだよ。

「あら」

「しかも上条とかいってき、ペットの一年生で吹ける娘いたんだけどさ」
これ言っちゃるかアタシ。

「辞めた？」

「そうそう。なんか予備校通ってるらしくて勉強と両立が難しいとかで」

「一年から予備校通ってるの？」

「親の方針みたいだけどね」

「時代だねえ」

「うちらと一年しか変わらないじゃん。山上ですら予備校行ってるからね」
また個人情報流出だ。アタシって結構ヤバイな。

「うっそ！イメージ崩れる！」

「だよね。伊野君も同じ予備校通い始めたし」

「マジで？赤点組必死だね」

「まあさすがにヤバイと思ったんじゃない」

ヤバイのは今のアタシも一緒だよ。と心の中で自分にツッコミつつ。

「あれ何の話だっけ」

「えーっとね。ああそうそうそれでそのペットの娘がそれで退部するか悩んでたわけよ」

「ふん」

「そしたらそんなときに限って上条がコクつたらしくてさ」

「ええ〜」

「小百合先輩に振られてからの立ち直りはハンパじゃなかったね」

あのタフさは見習うべきだと思う。

「でもさあ、そんなタイミングで来られてもねえ」

「だよ。それで上条のことも考えなくちゃいけなくなっちゃって、結局全部嫌になって辞めちゃったわけ」

「上条切腹じゃん」

「マジ切腹してほしいわ」

でもタフだから。死なないだろうな。

「それで。ペットは崩壊？」

「他に吹けるのいないし山上も運営と分奏で忙しくて自分のパート細かく見てられないみたいだし」

てかここまで他校に内情さらしていいんか？あっちゃんだからいいか。

「あの曲は高い音も多いから一年生にはキツイよねえ」

「まさにそれよ。音外しまくって話にならない感じ。ホルンも音程合わなくてヒドイもんだけど」

これは本当に愚痴りたいところだ。耳が壊れそうになる。

「淳は上手くなった？」

「中本は上手くなったね。だけど一年の女子が中本ファンクラブでさあ」

「彼女いるのに？」

「えっマジで」

「なに知らないの？なんか他校の彼女いるらしいよ」

はああああああああ？知らねえし。

「何でそれを瀬野川の生徒から聞くことになるんだろうか」

「聡子が輪の中に入っていかないからでしょ」

おお、またはグサリと。

「そんなことないよ、最近は低音パート練習もまた始めたし」

「何それ」

「アタシとバスクラとユーフォ、チューバで曲の合わせやってんの」

「へー。だから低音は平気なわけか」

「他のパートより譜面も楽つてのもあるんだけど、やっぱり低音しつかりしてないとね」

そうそう。そういうことなのよ、アタシも苦労してんのよ。

「じゃあ伊野とラブラブじゃん」

そういうのやめてよ意識しちゃうじゃん。

「なんでアタシが！てかさっちこそ彼氏は」

「え〜」

「なんだそれ、いそうな雰囲気ふんぷんですけど」

「いや〜自分でも迷ったんだけどさあ」

出たよコイツ。

「いるんじゃない！例の同期のペット男子？」

「なんで知ってんのよ」

「いや他に瀬野川に誰がいるか知らないし」

「また伊野か：ああでもこれ伊野には言わないでよ、アイツ口軽いんだから」

今のところ伊野君よりもアタシの口が軽いよ。

「はいはい。まあとりあえず良かったねラブラブで！」

「姉さん、嫉妬しないでくださいまし」

嫉妬：してるのかなあ？

「名前なんて言うの」

「大二郎」

「大五郎？」

「違う！それじゃ『俺とお前と』じゃん」

「ウケる！」

何その返し、あっちゃん天才すぎるから。腹よじれる。

「ちよっと人の彼氏大五郎にしないでくれますかー」

「はいはい。ああでも伊野君ショック受けそうだなあ」

ヤマカン。

「だから言わないでって。てか何でショック受けるのよ」

「伊野君ってあっちゃんのことを好きだったんじゃないの？」

ヤマカン当たれ、いや当たるな、ああどっちでもいいけど。

「はあ？そんなビーム一回も食らったことないけど。電話よこせつってもよこさないし、そもそも手紙の返信もないし。勘違いじゃない？」

お？

「そうかなあ」

「まあどっちにしる残念賞だわね」

ヤマカンが当たってればそうなるか。

「でも大五郎とは仲悪かったんじゃないか？手紙にボロクソ書いてあったとか」

「大五郎じゃないし。まあ前はかなり喧嘩したけどね。なんか急に大人しくなったと思ったら付き合ってくれとか言われちゃって、たった少しの間に色々グルグル起きてもうわけわかんなかったから、とりあえずまいっかって感じで」

勢いってやつか。

「なんか上条の話とかぶるね。こっちは部活的に残念賞だったけど」

「不思議なもんねー」

「ねー」

「で、何か別の話してなかったっけ」

よく覚えてるな、あつちゃん。なんだっけか。

「えー？あ、中本か」

「あーそうだ」

「割愛しますか？」

「いえ一応お聞かせください」

「えーだから、その後輩女子が中本のことが好きで、まあとにかく練習中に話しかけまくってて練習にならないらしいよ」

「そんなん中本が去年みたいにキレたらいいじゃん」

嫌な事件思い出した。机蹴り上げ事件。

「それがアイツ後輩女子に弱いよ。しかもその娘もまた可愛いくてさあ」
本当、今年の子は可愛い子多いんだよな。

「さすが不良」

「まあそんな感じで全体的に浮ついてて、真面目に練習してるのは低音と、トロンボーンだけなんだわ。あ、クラも一応真面目に練習はしてるんだけど曲の出だしのアレがやっぱ

めっちゃめっちゃ難しいらしくて、橋本さんしか吹けてないらしい」

「困るなあ、それじゃ張り合えないじゃん」

すみません、これが現状です。

「まあ伊野君にも手伝ってもらって何とかしてみよう」

「頼りが伊野君ってのも心もとないけど、頑張って」

「そうねー。あ結構時間経ってるね。ごめん」

なんか辛くなってきたから終了の雰囲気出してみた。あっちゃんごめんよ。

「ああ全然。また電話してよ」

「何か面白いことでもあれば」

「オッケー。じゃコンクールで」

「コンクールで。じゃあおやすみ」

「おやすみ」

電話を切って、バフツという音とともにベッドに寝転んだ。と同時にうめいた。

「ああああああ」

彼氏も出来て合奏も順調か。こっちは大違いだ。隣の学校なのにこうも違うもんだろ
うか。とりあえずポテチ食べよう。でもって明日、伊野君に相談しよう。だりい。

*

「…と、今日の練習予定は以上です。明日は笹野先輩の合奏があるので今日は前回注意されたところを完璧になおしておいてください。解散」

山上の号令とともに、各パートが教室へと向かう。

「伊野君、今日もやるから。由里ちゃんにも声かけておいてね」

ギターとテューバを持って教室へと移動しながら、あいよ、と拓也が返す。このところ拓也はパート練習にギターを導入している。元々はただ暇つぶしにギターを弾いていただけだったのだが、見かねた聡子に「木星のコード弾いてみて」と言われたのがきっかけだ。ギターでコードを確認すると、全体の中で低音がどのような音程を取れば良いのが見えてくる。拓也には絶対音感はなかったが、相対音感はそれなりだ。

拓也は、音が良くない権田尚人に対して、せめて音程は、ということと拓也のギターに合わせてテューバを吹かせる練習を始めたのだ。効果はこれまたそれなりだ。ピアノと合

わせれば良いのだが、あいにく拓也はピアノが弾けない。

昨年の地区音楽会のあたりから、合奏がない日は、たいてい低音パートだけの練習をするのが習慣になっていた。昨年の仕切りはテューバの広田裕子ひろたゆうこが行っていたが、彼女が三年生になり引退した後、今年のリーダーはバリトン・サックスの聡子だ。逆に聡子が声をかけない限り、この練習は開催されない。

参加メンバーは聡子と拓也、ユーフォニアムの小野田、バスクラリネットの一年生とユーフォニアムの一年生、そして問題の権田尚人を入れた合計六名である。

メンバーの半分が一年生だが、それでも他のパートに比べると問題は少ない方だった。

この日の練習後、初めて聡子は拓也を誘って瀬野駅近くのモスバーガーへ寄った。

「なんか落ち着かないな戸崎と二人でモスとは」

他の部員に見つからないよう、奥の席を選んで拓也は腰掛けた。

「普段は男子で集まる場所なんですよ」

なんかこのモス、よくよく見るとテーブル短いな。顔が近づくとヤバイ。

「昔はよくやってたね」

「昔って数か月前ですよ」

「たった数ヶ月が長く感じるよね」

拓也は何気なく視線を外して遠い目をした。

「確かに今年長い。まだ七月なのに」

聡子も同じように視線を遠くに運んでみた。

「あと一ヶ月でコンクールって雰囲気じゃないな」

「この一ヶ月は長そうだね。男子は最近どう」

「どうって」

「昔はいつも一緒にいたじゃん」

「あー。上条とはよくつるんでるけど山上と淳は最近あまり絡みがないな」

拓也もちよつと気にしている部分だ。思わず俯いてしまう。

「でも上条以外は皆金管だから伊野君と同じ部類じゃん」

「んーでも特に話すこともないっていうか。山上と淳はよく何か話してるけどね」

「部活の話？」

「多分ね」

「ふーん」

少し間が空く。自分から誘っておいてなんだが、なかなかに聡子も話するのが得意ではない。

「女子は相変わらずか」

「いやーちよつと雰囲気悪いかな」

「マジで」

「まあ女子に限らず部活の雰囲気悪いかと思つてそれで珍しく伊野君誘つただけど」と言つて聡子は拓也の顔をじつと見てみた。面倒はゴメンと顔に書いてあるぞコイツ。

「なんの力にもなれんよ俺は」

「それじゃ困るでしょ」

拓也はそれには答えず、運ばれてきたコーラをチューと飲み、ゲップをしてからようやく話を続けた。

「困るつて言われてもなあ。何したらいいんだ」

「なんかこう、部活全体フワフワしてない」

「してるねえ。今年は合宿しなかったからかな」

前任の田口が顧問をしていた頃は毎年合宿を行っていたが、今年は顧問の許可が下りず合宿は行われなかった。何といつてもほとんど部活に姿を見せていない顧問である。いくら指揮者の叔父でも合宿の引率者などまっぴらご免というわけだ。

「かもね。でもそれだからつてこのままで良いわけないじゃん。そこをなんとか」

「それは山上に言えよ」

「伊野君から言つてよ」

「アイツもテンパってるから言いくいよ」

別に山上にテンパってる感はないのだが、拓也はなんとかこの面倒な状況を切り抜けた。

「でも他に言う人いないでしょ」

「村田とか西堀とか小島とかでもいいじゃん」

「あの人たちとももうあんまり話してないんだよね…」

「なんで」

「なんか西堀が分奏でキレまくつてきて、それで麻紀も岸君と二人で練習してるが多くなつて、美紀は部活あんまり来なくなつちやつたし、上条は最悪のタイミングで振られ

て落ち込んでるし、サックスは完全に崩壊中」

「てかなんで西堀だけ苗字呼び捨て」

アイステイーをチュー、とやってから聡子は答えた。

「なんとなく。嫌いだし」

「それ言っちゃ終わりじゃね」

「まあそうなんだけど。木管の分奏みたら伊野君も嫌いになるよ彼女のこと」

「俺はもとから嫌いだもん」

「何それずりい」

「へっへー」

「笑いごとじゃないよ…もう伊野君しか頼れる人いないもん」

聡子の声が泣いている。もちろん演技だ。

「ちよ、ちよっとこんなところで泣くなよ…」

「ごめん」

「まあ確かに練習に身が入ってない感じはあるからさ、ちよっと山上と淳と話してみるよ」

「ごめん」

「いいって」

「伊野君が低音で良かった」

正しくは、伊野が女のウソ泣きに弱くて良かった、だ。

「まあそりゃお互い様だわ」

「ついでに上条も何とかして」

「わかったわかった」

あの戸崎に泣かれたら誰だって協力せざるを得ないだろう。一年の時から独りひたすら頑張ってきたヤツだ。拓也は決心した。まあ世の女性から見ればただの浮かれポンチであるが。

とりあえず大事な用件は終わったので、世間話に移る。

「あ、昨日あっちゃんと話したよ」

「おお宮内か！やっべ放置してた」

「向こうは順調みたいよ、彼氏も出来て」

「彼氏!？」

「シヨック?」

ヤマカン・パート2。

「いや別に」

まあ少しはショックだが期待もしてなかったから別にいいんだそれは。

「相手は大五郎だって」

「誰だよそれ酒じゃねえか」

「ほら伊野君が言ってたトランペットの」

「ああ、その人大五郎っつーのか。親もすげえ名前つけたな。でもそいつのこと嫌いだっ
たんじやないの？」

「それが不思議なもんでねえ」

「女心と秋の空だな」

それとなく目を細めて渋い表情を作ってみる。窓の外など見てみたが別に渋くなくていいのは自分でも分かって、やや後悔した。空が夏色だったのもなんだかしっくりこない。

「女心がわかるわけ？」

「言ってみただけだよ。女心がわかれば俺だって苦労しない」

何その思わせぶりな態度。聡子も聞かすにはいられない。

「えっなに好きな子いんの」

「言ってみたかったただだよ。本気で苦労してんのは上条くらいのもんだろう」

なんだつまんね、とこぼして、聡子はアイステイーを飲む。変な沈黙が流れた。今のは

ヤバイ。

「ま、まあとにかくさあ、なんか押し付けちゃった感じで悪いんだけど」

「ああ全然。やるだけやってみるから。でも期待はしないで」

「ありがとう」

「んむ。ところで昨日の夜にポテチかなんか食っただろ」

「えっなんで知ってるの」

「ニキビ出来てる」

「よく気づくねそんなの」

「戸崎には珍しいからね」

「へえー」

そんなに見られてるのかな。これからは気を付けないと。って何でアタシが気を付けな
きゃいけないの。

そんな聡子の心を知って知らずか、拓也は「ゲッフ」と今日何度目かのゲッフをした。「ゲッフやめろって」

でもまああれか、オナラよりマシか。

*

翌日は笹野の合奏だったが、前日の山上の声掛けも空しく、前回と同じ個所を注意されることが多かった。課題曲はほぼ通るようになっているのでメインは自由曲「木星」の練習だ。やはり難関はクラリネットだが、トランペット、ホルン、サクソともに音程やら譜面通りに吹けていない箇所を厳しく注意された。

合奏後、山上と西堀は笹野に呼び出され、どういう分奏をしているのかとこっぴどく叱られた。特に山上は部長としても問題があるとメッタ切りにされたのだった。そんなわけで、部活終了時のミーティングでも元気がなく、トボトボと一人帰っていった山上に、拓也も声をかけるタイミングを失ってしまった。

そのまた翌日は個人練習の日だった。授業を終えて拓也が音楽室へと向かうと、何やら中がいつにも増して騒がしい。音楽室に入ると、部屋の奥の方で大勢の部員が何かを取り囲んで大騒ぎをしていた。

入り口近くで一年女子と一緒に興奮していた野崎に「どうしたの」と聞くと、

「せんばーい、見てくださいよアレ！」

と、ぴよんぴよんと飛び跳ねながら野崎が奥を指さした。

あまりそういった雰囲気は得意ではない拓也だが、とりあえず見に行くと、目に飛び込んできたのはツルツルの坊主頭になった山上だった。

「おい淳、あれどうしたんだ？」

さすがに驚いて中本に聞くと、

「ハハハ、わかんねえよ、マジでウケんだけど」

と言って腹を抱えて笑っている。

中本だけでなく、一年も二年も関係なくこぞって皆が笑い転げている。聡子も少し離れた場所で楽器を組み立てながら、笑いを堪えていた。拓也もさすがに笑わずにはいられなかった。部長の威厳も何もない。

「おいお前ら、もういいじゃねえかよ」

と山上が制するも、効果はほとんどなかった。

出欠の点呼を取る時間になってもまだ音楽室内はざわめいていたが、拓也はもうさほど笑う気にもなれなかった。戸崎との約束を果たすには今日は絶好のチャンスだ。やや緊張する。ただそんな日に限ってなんで丸坊主にしてくるか山上。

点呼を取り終わり、各自教室へと個人練習に向かう。その間、山上は坊主頭を多くの部員に撫でられていた。さすがに一年生男子の岸や野崎に撫でられたときは「殺すぞ」と凄んでいたが。

一年四組の教室で後輩の権田に練習メニューを与えた後、拓也は同じ教室で練習するユ一フォニアムの小野田に話しかけた。

「小野田さん、ちよつといい」

小野田が座っている前の席の椅子に逆向きに腰掛け、小野田と対面する。

「え、いいよ」

始めたばかりのロングトーン（一定の長い時間、同じ音を伸ばして演奏する）の練習を途中で止めて、小野田が応じる。

そして拓也は先日の戸崎との話を、少々かいつまんで話した。

「とまあそういうわけで戸崎もちよつと参っちゃってる感じですか」

「ふぬー、聡子ちゃんと同じこと考えている人は他にもいるんじゃないかなあ」

楽器のピストンをパタパタとさせながら、眉間にしわを寄せて小野田は答えた。わざとらしく見えるが、本人はいたって真面目に相談に乗っているだけである。それを見て、思わず拓也も眉間にしわが寄ってしまう。

「小野田さんのところにはそういうお悩み相談きてないの」

「そういう感じの相談は来ないねえ。里美さとみちゃんが、パート練習が上手くないかかって愚痴ってるのは聞くけどねえ」

里美というのは小野田と仲の良いフルートの鈴木里美である。

「んー、フルートねえ」

そう返してしばらく拓也は無言になってしまった。小野田と拓也の間に置かれたメトロノームの音がカチカチと耳を打つ。同じ教室内で、小野田の後輩のロングトーンが聴こえる。権田の下手くそなチューバの音も聴こえる。改めて聴くと本当に下手だ。チューバ・

パートだって万事うまくいっている訳ではないのだ。

「まあ何にしてもこつちからも幹部連中が何考えてるか分からないし、今日山上と淳に話はしてみようと思うんだけどさ」

「早い方がいいよねえ」

そう言いながら小野田はカチカチと耳障りなメトロノームを止めた。

「なんて言えばいいかな。戸崎が言ってたって言うべきかな」

「いやあそれは違うと思うよ。聡子ちゃんは伊野君の意見を言ってほしいんじゃないかな」
あんたあの聡子ちゃんに頼られてんのよ、しっかりしなさいな、と言いたくもなかったがそれはやめておいた。

「俺の意見っていつでもさ」

「思うところ色々あるんならだけど」

「いや、無くは無いかどさあ、俺の意見なんて聞くかなあ」

「意見を言うんじゃないかと、これからについて相談する感じにすれば」

拓也はまだ、どう切り出すか迷っていた。どうにもスタートもゴールも見えない。

「幹部でもないのに？」

腕組みをしてメトロノームを見つめながら、聞いてみた。

「でも同じ学年だもん、幹部とか関係ないんじゃないかね」

小野田もメトロノームを見つめながら返す。お互い、これまで部の運営に口出しをしたことがなく、のんびりとやってきたこともあって、正直あまり自信がないのであった。

また無言になってしまったところへ、都合よく教室のドアを開け上条が入ってきた。首からストラップを下げ、その下には本人の土気色の顔色とは違って光り輝くアルトサククスが吊るされている。

「よう伊野、ロングトーンしようぜ」

やる気があって来たというよりは、サククスの教室から逃げてきたような感じがモロバレだ。何といっても土気色。しかしとても上条とロングトーンをする気分にはなれない。

「いや今日はちよつと大事な用があつて無理」

「なんだよ二人して眉間にしわ寄せて。練習メニューでも考えてんのか。低音パートは真面目だな」じゃあいいや、と呟いて上条は体を反転させた。

ここは、ひとつ上条君にババ引いてもらうしかないか。どうせこのままでは埒が明かない。そう考えた小野田は拓也に「上条君に先に相談してみれば」と耳打ちした。

「んー」と一瞬考えた拓也であったが、小野田からはこれ以上意見も出なそうなので、おとなしく従うことにした。

「あつ上条ちよつと待って、相談があるんだけど」

ふてくされてサックスを右手に持ち教室を出ようとしていた上条が振り返り、「おおなんだ、珍しいな」と嬉しそうな顔を見せた。

吹奏楽部が練習に使っている四階から二階下、三年生の教室がある二階の廊下には、ちよつとした広いスペースがあり、ベンチに座って談笑などすることができる。拓也と上条は楽器を四階の教室に置き、そこへ移動して話すことにした。

小野田の言うとおりに聡子のことは伏せたままで、拓也は吹奏楽部の現状について思うところを上条に話してみた。半分くらいは聡子の意見も混じっているのだが。

「いや正直おまえがそんなこと悩んでるなんて知らなかったぞ、ていうか部員全員驚くぜ」
やや興奮混じりに上条は話に乗ってきた。

「そんなことないだろう」

真面目に練習しているつもり拓也にとっては心外だ。

「だっておまえギター弾いてるだけじゃん。あれ結構問題になってんだぞ」

「あれは木星のコードを弾いて権田の練習に付き合ってたよ」

「マジか！おまえそれ凄くね？」

上条は心底驚いた顔をした。どうやらギターの使われ方について知っているのは低音パートくらいのようなのである。

「まあそれはさておき、おまえはどう思う」

拓也は話を戻した。

「確かに俺もそう思ってるよ。なんか気合入ってねえっつーか。それぞれ頑張ってるんだろ
うけど、向いてる方向がバラバラっつーかな。自分のことしか見えてないっつーか。ギス
ギスしてるところもあるしな」

そう言う上条は、ふうーっ、と長いため息をついた。

「なんだおまえも悩んでんな。それを何とかしようとしたことあるか」

「いや。なんも出来ねえ」

「あの子にフラれたから？」

拓也が聡子も気にしていたことを突いてみると、心外だ、というような顔をして、「そ

れはもう終わったことだろ」と上条は返した。目を見る限り、どうやら本当に終わったこととして彼の中では処理されているようだった。

「じゃあ最近暗いのは何だよ」

「さっきおまえが言ってたようなことだよ。今の状態で楽しく練習なんか出来ねえだろ」吐き捨てるように言うと、またふーっとため息をついた。どうやら上条の悩み方は聡子よりも深いかもしれない。西堀が木管分奏に力を入れ過ぎて自分の練習をしていないため、アルトサクスを引っ張れるのもう上条しかない。だが実際にはサクスペートは崩壊している。上条にもどうして良いか分からない状況でもあるらしい。

俯いている上条に、拓也も同じように俯きながら再度質問を投げかけてみた。

「最近、山上と淳とは部活の話とかしないのか」

「あいつらともあんまり絡んでないわ最近。まああいつらはあいつらで何とかしようとしてるみたいだけど、二人で話してそれで終わってちゃあ意味ないよな。もっと相談とかしてくれればさ、何かやりようがあるかもしれないねえけど」

上条は三度目のため息をついた。拓也は、なんとなく山上と中本に相談する内容の方向性が見えてきたような気がした。

「上条はさあ、あの二人に部活をどうして欲しいと思う」

「二人だけに任せるのは違うと思うんだよ。やっぱ皆でゴーンと行きたくね？この前の定期みたくさあ」

ゴーン、の部分で右腕を振り上げる。

「定期演奏会の時の感じねえ」

「楽しかったなあ」

上条は当時を思い出したのか、自然と笑顔になっていた。

「わかった。じゃあちよつと俺山上達と話してくるわ」

そういつて拓也が立ち上がると、ちよつと待て俺も行く、と上条も立ち上がったが、た拓也はそれを制した。

「二人で同じこと言ってもしょうがねえじゃん。おまえとりあえず西堀なんとかしてくれよ」軽いタッチで拓也は言う。

「なんとかってなんだよ」

あまりの無茶な要求に慥然として上条が答える。

「上手くなったっつってもまだ西堀のほうがお前より上手いんだろ。習ってみろよ」

「なんで俺があいつに！」

上条は顔を真っ赤にして憤慨した。よほど西堀は嫌われているらしい。

「だっておまえがトップにならなきゃ権力奪えないだろうが。西堀を叩き潰せ」

「無理だろ。責任重すぎるって」

一呼吸置いて、諭すように拓也はゆっくりと話しかけた。

「あのな。上手いサククス奏者と。下手くそなおまえと。どっちがモテると思う？」

「何が言いてえんだよ？」

上条の右の眉毛が吊り上る。

「言わすか？今のままじゃまたフラれるぞおまえ」

「うるせえよオメエ！」

上条は笑いながら蹴りを入れる真似をする。

「コンクール終わるまでに彼女作ってやるからな。山上のほうはおまえに任せろ！」

そう言い残すと上条は階段を駆け上がった。相変わらず優先順位がハッキリしていて誠によろしい。御しやすい奴よ、と思いながら拓也も四階へと戻った。もちろん山上と中本と話をするためだ。

拓也が四階に上がると、ちょうど音楽室や美術室が並ぶ廊下で山上と中本が立ち話をしているのが目に入った。皆が練習している教室と音楽室のちょうど中間あたりだ。二人の表情は真剣そのものだったが、拓也が「おっす」と声をかけるなり、中本の表情が崩れた。「おっす伊野、やっぱこいつのハゲっぷり笑えるわ」

「だからハゲじゃなくて坊主だって」

すかさず山上が反論したが、拓也にとってそれがハゲなのか坊主なのかは正直どっちでもいい話だ。

「何の話してんだよ」

「ここはさりげなく会話に入りたい。」

「何って、まあ色々だよ」

警戒した様子で山上が答えた。中本も拓也の様子を伺っている。

「そっか。いやあちよつと参っちゃってさあ」

拓也は二人の警戒をものともせず話を続け、聡子と上条から聞いた話をこれまたかいつまんで話した。今回は上条の名前も使わせてもらったうえに、小野田から聞いたフルー

ト・パートの話も交えた。もちろん聡子の名前は出してない。あくまでも上条と拓也の会話で上がった話をメインに相談した形だ。

「とまあそんな感じで上条も悩んで、俺もなんか最近居心地良くないし、どうしたらいいのかなあとか思ってた」

話を聞き終えた山上と中本は思わず目を合わせた。特に中本は「まさかおまえらまで悩んでるとは思わなかったよ」と驚きを隠さなかった。

「実は俺らもたまに時間作って色々話してんだけどさ」

とうちわを扇ぎながら山上が続く。ややぼつちやりの山上にはそろそろうちわが手放せない時期になっていた。夏本番になれば濡れタオルを首に巻くのであろう。

「おまえらがここでよく話し合ってるのは知ってるよ。たぶん部活のことだろうとは思ってたけど、ちょっと俺も上条も話しかけづらかったし、逃げてたからな」

拓也は努めて申し訳なさそうに言った。

「いや逃げてるとかじゃないと思うよ、皆それぞれ後輩も出来たし大変なのはわかるから山上がフォローする。」

「いやいや、でもやっぱりおまえと淳に責任がのしかかり過ぎだと思っただよ。せめて俺と上条だけでもいいから相談してくれねえかな。上条も言ってたんだけど、二人の間だけで話が終わってちゃ意味がないと思うんだよね」

腕を組みながら拓也の話を聞いていた中本が続く。

「確かに山上と二人ですつと話し合ってきたけど、正直これ以上どうしたらいいかわかんねえ。うちのパートもちよつと厄介なことになってるしな」

「伊野の話を聞く限りだと、全パート厄介なことになってそうだな」

山上も続いた。

「てことは部活全体厄介な状態ってことじゃねえか。そろそろ部長としてビシッと決めないとまずいんじゃないか」

拓也からの手痛い指摘を受け、思わず山上は坊主頭を撫でながらため息をついた。

「同じようなこと、昨日笹野さんからも言われたよ。もつと部長として引つ張られて」

「それで坊主？」

「まあ一応、気合ってことで」

「でもおまえ笑い生んだだけだったよな」

と中本が楽しそうに話す。拓也も思わず笑った。淳はしばらくの間、山上の坊主頭を笑

いの種にするのであろう。

「でもまあアレだわ、手付けられるところから直してくしかないと思うけど」

拓也が真顔で再び話題を元に戻す。

「どこから手付ければいいのかわかんねえ」

ため息混じりに山上が返す。

「技術的なところは後にして、やっぱこの空気がマズイんじゃないかねえの。なんか地に足付いてないっつーか。まあその点だとうちが一番やべえんだけど」

中本がバツの悪そうな顔をしながら言う。

「皆がストレス溜まってそうなのはホルンと木管分奏だろうなあ。木管分奏は西堀が問題らしいよ。一度上条に話し聞いて、山上に対応してもらったほうがいいかも。ホルンは：：：淳が彼女の存在を公表しないから林田さんはやしだがあんなにはしゃいでんじやねえのかな」

拓也の意見は意外と的確だ。林田さん、とはホルンの一年生で、練習中ひたすら中本に話しかけては楽しく笑い転がっているそれはそれはハッピー全開の女子だ。

「林田さん：：：だよなあ：：いやわかってんだよ林田さんが俺のこと好きだったのは。いたるところで公言してるからなあの子も。そろそろ言わねえとマズイ感じはあるんだけど」

と中本が苦渋の表情で語る。

「言えばいいのに」

山上にとっても重要案件である。確かに他のパートがそれなりに一生懸命努力してる最中、ホルン・パートの教室から絶えず林田の笑い声が聞こえてくるのは良くない状況だと、山上も認識はしている。そして中本の事情は、山上にとってはどうでも良いことである。

「言えばいいのに、ってお前このタイミングで言っつて部活辞められたらそれこそやべえよ人足りねえのに」

中本が反論する。

「確かにまだ一年生はこの時期だと部活どっぶりって感じじゃないからな。その辺難しいと思うけど、そこはお前ホルンのリーダーなんだから、別に彼女のことは言わなくてもいいけどビシッとなんとかしろよ」

山上にそう言われて、「まあやってみるよ」と答えるのが精一杯な中本であった。去年は上級生の前で机を蹴り上げて叫んでいた男だが、一年生女子には滅法弱い。

「あとはおまえもミーティングでビシッと皆に喝を入れるべきだな」

「え俺も？」

拓也からの注文をかわそうとした山上だったが、「当たり前だろお前」と中本からツッコミが入り、かわしきれなかった。

「でもそれこそタイミングいつだよ」

やや困った表情で山上が二人に問いかける。

「今日の終わりのミーティングでいいじゃん」

サラリと拓也が言う。基本的には拓也は安全圏から長距離砲を打つようにものを言う場合が多い。

「今日？無理じゃね？」

「俺も今からうちのパートやつつけてくるんだからお前もやれや！」

すかさず中本からまたもやツッコミが入る。そうこうしている間にも教室の方から林田の笑い声が響いている。

「俺もういくから。伊野、ハゲのことよろしく頼むぞ」

そう言い残して中本は足早に教室へと向かった。

「今日かあ…」

山上はまだ腹が決まっていないようだ。それを無視して拓也がダンドリを伝える。

「いま多分、西堀は上条と一緒に練習してるはずだから、まずそこにいくだろ。で、西堀を呼び出して一度色々と話し合ってみる。その場の上条が同席してもいいと思う。で、何食わぬ顔してトランプットの練習に戻る。で、足りない頭で」

「足りない頭は余計だろ」

「すまん、本音が出た。で、まあとにかく何を皆に伝えなきゃいけないのかをじっくり考える、と」

拓也のダンドリを聞いて、はああ、と長い溜息をつきながらも、

「やるっきゃないよなあ…よし、やる」

と意を決し、山上は拓也と並んで教室へと足を向けた。

「そーいやその間お前は何してんだよ」

歩きながら山上が拓也に問う。

「練習」

表情ひとつ変えず、サラリと拓也が答える。

「ああ、まあそうか。それが普通だよな」

一瞬呆気にとられたが、山上も何となく納得してしまった。そして二人はサククス・パ

トトが練習する教室へと入って行った。

階段脇の窓から舞い込んだ風が、誰もいなくなった廊下を、音もなく滑って行く。

「とまあそういうわけで、とりあえず」

拓也はサックス・パートの教室から戸崎聡子呼び出し、ことの顛末を報告し終えた。

二人は先ほど拓也が上条と一緒にいた、二階の廊下にあるベンチに並んで腰かけている。話を聞き終えた聡子は、「上出来、上出来」と拓也の労をねぎらったが、すぐに何か考え込むように、ふむー、と唸って遠くを見やった。

「なんだ、まだ何かあるのか」

拓也の顔には、もうこれ以上の面倒はゴメンだ、とハッキリ書いてある。

「いやもう頼むことはないけど」

拓也とは目を合わせずに聡子は短く答える。

「じゃ何でたそがれてんの」

この苦労を上出来の一言で終わらされた拓也は少々物足りない。

「んーコンクール間に合うかなって」

「ぬあー、それはわからん」

本当にわからん、という感じで拓也は天井を仰いだ。吹き抜けになっているので四階まで見える。

「来月だよ本番」

別に聡子には拓也を責めるつもりはないのだが、他に誰もいないので拓也を責めるような口調になってしまう。

「そりゃわかっているけどさ。今日の山上の出来次第で変わってくるんじゃないやねえ」

拓也もなんだか自分が責められているようで、思わず責任を山上に押し付けてしまう。

「部活の雰囲気はそうだろうけど、そうじゃなくて技術的などところで」

聡子は聡子で考えていることがあるのだが、言っても詮無きことであるという自覚もある。結論のない会話になってしまう。

「まあ曲が難しいからなあ」

なんとなく他人事のように話してしまうのは拓也の悪いクセだ。

「いくら難しいって言ってもここまで吹けてないとさあ。引っ張れる人もいないし」

と口に出してから、聡子は宮内の姿を思い浮かべた。あっちゃんがいたら、何か変わっ

てたのかな。

「宮内がいたらなあ」

「えっ」

ボソツと呟いた拓也の一言に、心が読まれているのかと、思わず驚いた。だが、なぜだかそれが少しカンに触った。

「あっちゃんが何」

つい尖った言い方になってしまった。拓也も急に空気が変わったのを感じとって、やや困ってしまう。

「いや、宮内がいたら少し引っ張ってくれたかな、とか？」

いやいや多分これは戸崎にとって正解じゃない。これは俺、地雷を踏んでいる気がする。戸崎の顔色を伺って、すぐに目を伏せた。違うな。気がするんじゃないかと、地雷踏んだ。完璧に。

聡子は聡子で、なぜだか後に引けなくなってしまった。頬を紅潮させて、気づけば叫んでいた。

「なんで今になってあっちゃんが出てくるの。なんであっちゃんなの。もういない人に頼ったってしょうがないじゃん！そう思うならなんでアンタが引っ張ってくれないの！」

気づけばベンチから立ち上がり、拓也を見下ろしていた。足が震える。涙も出そうだ。聡子は走って逃げた。ああ、やっちゃった。なんでいきなりキレてんだろうアタシは。わけがわからない。つまらない女だ。自分だって同じこと考えてたくせに。顔に当たる風が熱い。単に夏だから、ってわけじゃなさそうだ。

戸崎聡子は疾風のごとくに立ち去った。困ったな。残された俺。席を立つタイミングがわからない。っていうか、どうしよう。怒らせてしまった。ヤバイのではないだろうか。目を瞑り天井を見上げる。

「あああ、やべええええよコレ」

心の眩きがそのまま声に出た。

「何がヤバイってー」

ハツとして拓也が目を開けると、四階から上条が覗き込んでいた。

「はっはっは、フラれたなああああ！」

満面の笑みを湛えた上条が叫ぶ。

「ちげえ、なんでそうなるんだよ！そういうんじゃあねえから、とりあえず叫ぶなよ！」
そう言いながら拓也も叫ぶ。これは高くつきそうだ。

結局この日は、山上が終わりのミーティングで何か特別なことを言うことはなかった。
本人曰く、「帰ってから原稿書くから明日やる」とのことだった。西堀の木管分奏についての問題は、一応本人とも話し合って解決の方向に向かいそうらしい。

中本はそれなりに自分のパートには注意したようで、いつも明るい林田も沈んだ表情で帰って行った。

拓也と聡子はあれ以降会話を交わさないまま、この日の練習を終えてしまった。

*

「キヤーツ」

翌日の練習、拓也が音楽室に入ってきたのに気づいた誰かが大声で叫んだ。他の部員も一斉に音楽室の入り口の方を振り向き、次の瞬間には大騒ぎになった。伊野拓也は坊主頭になっていた。

「おまえ昨日に引き続き俺ら笑い殺しにする気か！」

早速中本が寄ってきて笑い転げながら拓也の坊主頭を撫でまわす。

「なんでおまえまで坊主なんだよ！」

笑い続けながら問う中本に拓也が答える前に、上条が口を挟む。

「ふられちゃったんだよなく可哀想に」

「だからそれは違う！」

これは即座に否定したい。

「じゃあなんでよ」

上条は、本当に拓也が振られたのだと思っていたらしく、頭の上にハテナが浮かんでい
るような顔をしている。

「まあ色々思うところあんだよ」

拓也はそう答えるしかなかった。実際色々と思うところあって、いやありすぎて、捨て
鉢で昨夜床屋に寄ってみたただけだ。

気になって目で探してみると、音楽室の隅で聡子も笑みを浮かべているようだったので、

とりあえず拓也としては安心であった。会話の糸口にこの頭が使えそうだ。

「なんだよ本当に振られたわけじゃないのか？やばいぞそれは」
神妙な顔で上条が腕を組みだした。

「どういう意味だよ」

拓也の胸に不安がよぎる。

「俺もふられたって聞いたぞおまえ」

中本が薄ら笑いを浮かべながら肩を組んできた。中本に肩を組まれたまま、拓也は上条を睨みつける。

「上条、どうなってんだ」

すると凄まじい勢いで上条が土下座を始めた。

「いやゝ悪い！ゴメン！すみませんでした！先走りましたッ！」

「だから、どうなってんのかって」

土下座に構わず拓也は上条を問い詰める。

「結構な勢いで広がっております」

拓也を見上げる上条は涙目だ。

「俺が戸崎に振られたっていうデタラメが？」

「さ、さようでございます」

「バカモーン！」

言うなり拓也は上条の脳天にモンゴリアンチョップを叩き込んでいた。

「痛えッ！」

上条が悶絶する。

「さっさと皆の前で訂正しとけ、このラテン崩れ野郎！」

「はいっすみませんでした！すぐに訂正します！」

さらに上条は土下座を続けた。

その後、練習始めのミーティングで今日の予定を一通り伝えた後、山上が

「えーと、今日は上条君から報告があるそうですね」

と切り出した。

呼ばれた上条は申し訳なさそうに、昨日自分が広めた噂についての訂正を始める。

「えー、皆様、この度は伊野君が戸崎さんに振られたということで噂が広がっておるか」と

思われますが、不肖上条、皆様に戻った情報を回してしまったことをお詫びします。伊野君は、まだ振られておりませんでした！ここに訂正いたします！」

おー、と、どこからともなく拍手が巻き起こる。その拍手を制するように拓也は叫ばなければならなかった。

「ちよつと待て、『まだ』って何だ！そもそもそんなじゃねえんだよー！」

「はいはい」と中本が合いの手を入れてくる。こいつもモンゴリアンチョップかましたるか。中本の合いの手を合図に、やたらとヒューヒュー、などと囃し立てる輩が湧いて出てくる。

「おい今ヒューとか言ったやつ全員表に出ろ、ボコるぞこの野郎」

拓也がキレかけたとき、もう一人の当事者である聡子が割って入ってきた。

「何あたしじゃ不満なわけ？こつちにも選ぶ権利あるんですけど」

驚いて拓也が見ると、聡子は顔に薄ら笑いを浮かべている。なんであなたは自分でことをややこしくするんですか戸崎さん。

「いや、その、戸崎がダメとかそういうあれじゃないけど、とりあえずなんもないじゃんか、いやもう参ったなこれは」

さすがに拓也が泣きそうになりながら弁解を始めると、音楽室は爆笑に包まれた。

「はいはい。この件はここまで。あとは二人を温かく見守りましょう」

そういつて山上が締めると、またドツと笑いが起きた。

「じゃあ今日も一日、宜しくお願いします」

最後の締めめに、全員がよろしくおねがいします、と返し、練習が始まった。久しぶりに良い雰囲気でのスタートだ。

二階の部室から四階の教室まで楽器を運ぶ途中で、戸崎が拓也に話しかけてきた。

「で、その坊主頭はなんなのよ」

「なんか色々あったから勢いで」

お互い楽器が重いので顔は合わず、それぞれ前を向きながらの会話になる。

「その色々には昨日のアタシへの反省も含まれてるわけ？」

「まあ、そうだね」

「それなら、よし」

嬉しそうな聡子の声にどう返していいか分からず、とりあえず「うむ」とだけ拓也は呟

いておいた。

四階に着くと、

「今日は木管分奏に出なきやいけないから低音セクションは練習なしで」

と言いつつ残して聡子は音楽室へと消えた。

まあとりあえず昨日の不穏な空気は晴れたわけで、拓也としては今日はもう十分だ。あとはその木管分奏がどう変わるか、ホルン・パートがどう変わるか、が気がかりなところではあったが、この日は木管分奏の部屋からも西堀の怒声が聞こえることもなく、またホルン・パートも粛々と練習をし、久々に真面目な練習日となった。この状態が続くかどうかは、昨日原稿を書いてきているはずの山上の演説にかかっている。

そして練習終了後のミーティング。部員全員が音楽室の椅子に座って、連絡事項などを伝え、最後はいつも部長の山上が指揮者台の上から一言で締める。この日は分奏があったので、セクション・リーダーから今日の練習内容報告と今後の課題などが伝えられた。いつも厳しい西堀の口調は、山上とどんな会話があったのかは知らないが、これまでとは打って変わって穏やかであった。金管セクション兼務の山上からは、いつも通り「明日からも頑張りましょう」程度。その後特に連絡事項もなく、いつも通り山上の締めに入る。が、山上に落ち着きがないのは部員全員にすぐに伝わった。

「えーっと」

山上がまず口を開いたが、その後が続かない。部員がざわつき始める。ミーティング時の二年男子の定位置となっているピアノの前から、中本、上条、拓也が一斉に小声で

(早く言え！)

とまくし立てるが山上は固まっている。

「部長、どうしたー」とサックスの小島美紀から威勢の良いかけ声が入ると、笑い声とともに室内の空気が和んだ。そこでようやく山上が話し始める。

「えーっと、ちょっと何人かの部員からも言われたし笹野さんからも言われたんだけど、部長がすっかりしてなくて本当にすみません」

いつもと違う締めが始まりに、室内は静寂に包まれた。特に一年生は緊張の面持ちで山上を見つめた。二年生はバツの悪そうな顔をしているメンツも多い。

「今日は色々と言っておくべきことがあって、昨日家で原稿も作ったんですが、忘れてきてしまいました」

笑いが起きそうな場面ではあるが、一切笑いは起きない。山上の坊主頭から汗が流れ落ちる。

「なので途中からわけわからなくなるかもしれないかもしれませんが、言います」

フーツとひとつ息を吐き、山上は一気に話し始めた。

「最近、部活の雰囲気かね、ちよつと悪いんじゃないかという意見がありました。僕もそう思います。副部長の淳とは、毎日のように話し合っています。僕たちだけではどうにもなりません。まあ何が良くて何が悪いかってのはそれぞれあると思うので押し付けたくはないんですが、少なくとも去年は、こんなに早い時期に部活の雰囲気が悪くなることはなかったです。多分それは今の三年生が、上手く協力して部の運営に力を入れていたからじゃないかなと思います。ちゃんと吹奏楽部として活動が出来ていました。今年は、ちよつと違うように感じます。楽しくやるのもいいですが、お喋りよりも音楽を楽しんで欲しいですし、逆に厳しくやりすぎても楽しくないですよ。僕は今までこういう話を避けてきましたし、各自好きにやればいいやと思っていました。正直限界です。特に二年生、ちゃんと先輩として各自、一年生を引っ張ってってください。吹奏楽を楽しめるような環境を作ってください。僕が言えた義理ではないんですが、僕も努力します。二年生の皆は、僕を部長に決めた時、全員でフォローすると言っていました。それを実行してください。お願いします。一年生は、まだ遊び半分かもしれませんが、本気で吹奏楽に取り組んでいる人も多くいます。だからもうお遊びはやめましょう。ダラダラと練習するんじゃない。先輩を追い抜けるくらいに、もっと練習を頑張ってください。でもまあそれも、元はといえば僕たち二年生が悪いんです。でも僕たちのせいにしてちゃんと練習しないってのは、高校生としてどうかと思います。厳しいことを言うようですが、二年生も頑張りますから、お願いします」

ここで一旦息をつき、「ちよつと今のじゃ意味わかりませんよね」と自嘲気味に笑いながら、それでも山上は話を続けた。

「今の話しはちよつと具体的じゃなかったんで、順番が逆になっちゃいました。じゃあ具体的にどうしたらいいのかという話をします。まず、今僕たちが取り組んでいるのは夏のコンクールですよ。だからとりあえずは、コンクールで良い演奏が出来るように、練習することです。でもその練習の雰囲気が悪い。なんだか浮ついて練習に本気度が感じられません。楽譜もさらえてない。音も外す。笹野さんの指揮についていけない。問題だらけです。それをパート・リーダー含め二年生は、自分が出るようになるのはもちろん、

一年生にもちゃんと指導をしてください。正直、基礎練習の時間を短くしてでも、特に木星の個人練習やパート練習に時間を取らないと、本番に間に合わないような気がします。分奏のときだけじゃなくても、パート・リーダー同士で話しあって、同じ動きをしているところを合わせるとか、そういうことがあってもいいと思います。今は何だか、各パートが各教室にこもって、それぞれのペースでやっていますが、そろそろ練習ペースを合わせないと、マズイと思いますので。二年生は、一年生の憧れになるような、そんな行動を心がけてください」

室内は静まり返っている。山上はペットボトルの水を一口のみ、また話を続けた。

「えーっと、ちょっと説教じみた感じになってしまつて、オマエごときが何言つてんだ、と思う人もいるでしょうが、現実起こっていることをお話ししました。で、ここからは個人的な話しをします。僕はキャラじゃないと思つて今までこういう話を皆の前でしたことはありませんが：一年生は知らない話ですが、二年生は覚えていると思います。この間の定期演奏会は、基本的に笹野さんが合奏をしてくれていました。今と同じです。あのときは正直、メツチャ厳しかったけど、でも定期演奏会は凄く楽しかったですよね。大成功とは言わないまでも、一年間で一番楽しい演奏が出来ました。あの感じを、もう一度味わいたいと思つてます。それが定期演奏会だけじゃなくて一年通して味わえたらもつといい。僕は中学校から吹奏楽を始めて、高校でも吹奏楽部に入ると決めてました。吹奏楽が好きだから。皆でひとつの目標に向かって一生懸命に楽器をやるのが、好きだからです。そうは見えないとは思いますが：それは僕の責任です。ごめんなさい。しかも皆とコミュニケーションを取るのを面倒に感じていました。それもごめんなさい。これからは、一年生も、部活で不満に思つたこと、わからないこと、先輩に聞きづらいこと、何でもいいので抱え込まずに、困ったら僕に相談してください。淳でもいいです。他の先輩でもいいです。二年生は、まあ今回は実は伊野君が相談に来てくれたんですが、そういう感じで、思うところは僕にぶつけてくれて構いませんので、一緒に雰囲気の良い部活を作っていきましょう。えーっと、長くなりましたが、以上です」

山上が部長になって、ここまで長い話したのは、しかも真面目な話したのは、これが初めてだった。それだけに二年生も一様に渋い顔をして、ただ俯いていた。それぞれに思うところはあるのだ。一年生は、そんな上級生の顔色を伺っている。

「では、今日の練習はこれで終わりにします。解散」

山上がそういうと、いつもはある程度揃っている「お疲れ様でした」と言う部員の返し

も、今日はバラバラで覇気がなかった。これは失敗だったな、と思いながら山上は指揮者台を降り、ピアノ前に固まっている二年生男子の下へ向かった。他の部員は、静かに楽器を片付け始めている。

「すまん、なんか上手くいかなかった」

そういつてしよげる山上だったが、三人の反応は悪くなかった。

「上出来だろハゲの割に」といつて中本が山上の頭を撫でまわして遊ぶ。上条と拓也も、「まあ、いいんじゃない」といつた感じだ。とにもかくにも四人にとって口裏を合わせていた一大イベントが終わって、ホッと一息といつたところだ。何より、我らがダメ部長は意外と真剣なんだということが伝われば、少しは雰囲気も変わるだろうという期待が持てる。

山上の（当人にとっては）大演説が終わり、そのままピアノの前で四人でなんとなく話しているところに、二年生女子が一人また一人とやってきて、劳いの言葉をかけたりしながら、音楽室を去っていく。聡子はやってこなかったが、楽器を片付けてヨイシヨ、とケースを持ち上げた彼女に拓也が目をやると、こっそりとVサインをしてきたので、周囲に分からないように拓也もこっそりとVサインを作った。とりあえず俺にやれることはやっただかな、と拓也も帰り支度をしようとしたとき、小柄な影が異常な速さで四人の元に駆け寄ってきた。トランペットの一年生、乙女チック野崎君である。

「あおう、部長う」

お、さっそく先輩に助言を求めるか野崎君。そう思い内心ガッツポーズの四人であったが、彼の相談は四人が思っていたのとはまるで違った。

「今度の土曜日、瀬野川の演奏会がその生涯教育センターであるんですけど、見に行つていいですかあ」

ガククシである。よりによって瀬野川。そんなヒマがあつたら練習しとけと言いたくもなる。

「別にいいけどさ。なんで瀬野川。しかもその日一応練習日なんだけど」当たり前疑問を山上が口にする。

「瀬野川に中学の同級生がいるんですけど、なんかあその二年生のトランペットの人が凄いいらしいですよ」

「凄いつつても瀬野川だろ。あんまり参考にならないと思うけど。曲何やるの」

あまりオススメは出来ないが、情報としては気になるところだ。

「毎年やってるミニコンサートらしくて曲数はあんまりないらしいんですけど、今年の課題曲と自由曲もやるって」

「マジで？」

山上の目の色が変わった。それはちよつと参考になるかもしれない。

「コンクール前にどのくらいのもんか見ておくのもいいかもな。刺激になるかも」

と中本も応じる。

「宮内にも久々に会えるな」

拓也も乗り気だ。だが、

「俺は行かねえ」

ただ一人、上条が反対した。

「なんでよ」

中本が不思議そうに尋ねる。

「さっきの山上のでちよつと燃えてんだよ。そんなヒマがあったら練習するっての」

目をギラギラさせながら熱く燃える上条であったが、悪友とはまさにこのことか、

「可愛い子いるかなあ。いたら宮内に紹介してもらおう」

と拓也が聞こえるか聞こえないかで呟くと、

「ちよつと待て。やっぱ俺も行く」

と態度を反転させる上条は、やはりサククスよりも女が大事なのであった。

「これは一応、部員に教えておいた方がいいね。生涯教育センターならすぐ近くだし、その時間だけ練習拔けるのもありだな。明日のミーティングで言おう」

と山上が方針を決めた。

「ありがとうございますう〜！」

と目を輝かせながら、野崎君はキャピキャピと去って行った。

「にしてもあそこにホールなんてあったのか？」

もつともらしい疑問を上条が投げかける。

「おまえ去年あんだけ申請出しといて気づかなかったのかよ。ホールって感じじゃないけど、一応小さいステージがあっただろ」

と中本が応じる。

「俺ら、和室で部長決めとかやってただけだもんな。あれはきつかった」

拓也が当時を思い出すように言うと、他の三人も「いやあもう勘弁だなあそこは」と口

を揃えるのであった。

翌日、笹野の合奏が終わってからのミーティングで、山上は瀬野川のミニコンサートについて部員に告知をした。どのみち練習のために学校に来ている日だということもあって大半の部員が参加することになった。その旨は指揮者の笹野滋にも了承され、顧問の笹野次郎から、瀬野川高校の顧問である山之内へと伝わった。座席を確保してもらうためである。

*

「えええ本当ですかあ!!」

滝本かえでの大声は、職員室中に響き渡った。他の教員が何事かと訝しむ目でこちらを見ている。山之内は小声で「すみません」と言って周囲に頭を下げた。

「なんか問題ある〜?」

田口は相変わらず、合奏時以外はのんびり口調だ。オンとオフとでも言おうか、タクトを持った時と持たない時の田口のキャラの変化にも、だいたいの生徒が慣れてきた。二年生、三年生の一部には彼の世界史の授業を受けている生徒もいるが、授業中の田口はいつもこんな調子らしい。

「そりゃあ学校近いんだし、今年はこっちに宮内さんもいるから来るだろうよ」

山之内が呟く。

「いやあそれはもうひと頑張りしないとイケないですね!」

かえでの鼻息は荒い。

「そうだねえ。俺も元教え子の前で恥かくの嫌だもの。ちょっとコンクールの曲に集中させてもらおうかなあ」

チラリと田口が山之内を見る。

「え?それは他の曲は僕が振るっていうアレですか」

「そうそう」

「えー! 久々だなあ。振れるかなあ」

「おおお山之内先生の指揮! 久々ですねえ!」

いまだ、かえでの鼻息は荒い。

「まあほとんど指揮者いらぬような曲ですからねえ…やりましようか」

山之内ものほんと答える。田口と山之内はなかなかの名コンビになりつつあった。

「ではさっそく、部員に伝えます！」

そういつて滝本かえでは意気揚々と職員室を後にした。

「それにしても元気な子ですね」

「一年生のときからああですからね」

「逆に来年が不安になります」

「彼女ほど部活を引つ張れる子は今の二年生にはいないですからね」

「僕は郡君の成長に期待してるんですけどね」

コーヒートをすすりながら、何気なく田口は本音を吐いてみた。

「あれ、愛弟子の宮内さんではないんですね」

「あの子は楽器で引つ張れるからいいんです」

「ははあ、そういうもんですか」

「そういうもんです」

顧問は顧問で、そんな悩みもあつたりする。生徒は次々と卒業していくが、教師は、場合によってはかなりの長い間その学校に留まるからだ。

そしてその週の土曜日、けやき坂高校のすぐ傍にある生涯教育センターで、予定通り瀬野川高校吹奏楽部のミニコンサートが行われた。拓也達けやき坂高校吹奏楽部の部員もほぼ全員が聴きに来ていた。二年生はクラリネットのパート・リーダー橋本を除き、全員参加である。自主的に不参加の橋本は、他の二年生が出払っている間、学校に残った一年生部員の面倒を見ることになっている。そういった例外を除けば、指揮者の笹野滋までもが聴きに来ており、なんだかんだでお隣さんの動向は気になってしまふのであつた。

部長山上の引率の下、あらかじめ用意されていた座席に案内され、各々腰掛ける。周りを見渡すと、さすが毎年恒例行事らしく、地域の子供からおじいちゃんおばあちゃんまで老若男女、客層も幅広い。ミニコンサートなりに簡単なパンフレットも用意されていて、コンサートの演目などが書かれている。

「田口の指揮、久々だな」

パンフレットに「指揮 田口浩之」と印刷された部分を指で弾きながら、中本が山上に話しかける。

「まあ正直それはどうでもいいんだけどな」と興味なさそうに山上が答える。

「やっぱ野崎が言ってたラッパが気になるんか」

「まあ気にするよね後輩にあんなこと言われると。俺も先輩なんですけど、って感じで」後輩に「瀬野川の二年生トランペットが凄い」と何の気遣いもなく言われると、さすがにムカツとしてしまう。普段は練習熱心でもない山上でも、なんぼのもんじやい、と思ったりもするわけである。

「おい山上、コンクールのメンバーな、ラッパのトップは二年が吹いてるらしいぞ」

山上の気を知ってか知らずか、右隣に座った笹野がボソツと耳打ちする。

「うちだつてトップは二年でしかもそいつは部長です」

誰が件のトランペットか、これで分かるようになったので笹野に礼でも言いたいところだが、こちらにも意地がある。トップでソロ吹きながら今年のメンバーの部長って大変なんだぞオマエ。おかげで坊主頭にまでなっちまったじゃねえか。

けやき坂高校の部長が心の中で自分に恨み節をぶつけているとはつゆ知らず、郡大二郎は男子の控室としてあてがわれた和室で入念に演奏の準備をしていた。人前で「幻想」をやるのはこれが初めてだ。もしここで失敗すれば、また三年生にトップの座を取られてしまいかもしれない。初めは自分も三年生がトップを吹けばいいと思っていたが、ここ最近の合奏で、これは自分がやらなければいけないことだと自覚するようになった。今トップが変わってしまったら、また予選で落ちてしまうだろう。今の自分にはそれくらいの自信がある。それがゆえに不安だ。

ドンドン、と戸を叩く音が聞こえ、部屋に緊張が走る。

「はい男子舞台袖に待機！」

よく通る声は部長の滝本かえでだ。トランペットのピストンをもう一度パタパタと動かし、大二郎が和室の入り口へ向かうと、一年生の佐藤が付いてきた。

「郡先輩、アドバイスお願いします」

「はあ？今？」

なんだコイツは、と思ったが、佐藤の顔は真剣だ。中学の時初めて舞台に立った時、俺もこんな風だったっけな。全く覚えていないが。

「とりあえずいつも通り吹け。今日は場馴れ出来ればそれでいい」

「はい！ありがとうございます！」

佐藤は嬉しそうに一礼し、意気揚々と和室を飛び出していった。

「郡」

今度はパート・リーダーの三年生に声をかけられた。田口に変えられるまでトランペットのトップを吹いていた先輩だ。ちょっと佐藤に対して偉そうにしすぎたか。緊張が走る。

「今の言葉、そっくりオマエにやるよ。気楽にな」

そういつて彼は大二郎の肩をポンと叩き、部屋を出て行った。なんだか少し肩の荷が下りたような気がした。

瀬野川高校吹奏楽部の部長だという恰幅の良い女生徒の挨拶で、コンサートは始まった。

「あの子、実は滝本先輩の妹だ」

笹野の呟きに、横並びの二年生男子四人が一斉に「ええっ」と声を上げる。

「滝本家のご両親に同情する」

と拓也が呟いて、中本が噴いた。

「おい、おまえら静かにしろ」

山上が制したところで部長挨拶が終わり、拍手が送られる。続いて奏者が入場する。

「おっ宮内だ。髪切ったんだな」

と拓也が後ろに座る聡子に振り返り声をかける。

「…だね」

可愛いね、と言いかけたのを何とか飲み込んで、聡子は答えた。ちくしょう、あっちゃん可愛くなってんな。てかアタシも少し髪切ったんだけど。伊野の野郎。くたばれ。

コンサートの前半は一・二年生中心のポップスで、正直演奏は可もなく不可もなくだった。休憩時間にロビーに出たが地域の老人たちが何やら交流しているので、山上達男子四人は施設の外の公園まで出てきていた。

「あああああ、ねみいいいい」

身体を伸ばし大あくびをしながら空に向かって叫んでいるのは中本だ。

「おい、向こうの関係者に聞かれたらまずいだろ」

すかさず山上がたしなめる。

「どうだ上条」

「特にこれってのはないけどうちに比べて全体的にレベル高いよな」
拓也と上条が話しているのは演奏レベルの話ではない。

「じゃあ紹介する手間が省けたな」

「いや一応サックスの子とユーフォの子とあとパーカッションの…」

「いやいや絞れよ。そんなんだからオマエ失敗続きなんじゃねえの」

そんな会話をしていると山上がすかさず部長らしくこれもたしなめる。

「おまえら演奏聴かないんだっいたら今すぐ学校戻って練習するか？」

「俺はちゃんと演奏聴いてるよ」

しれっと裏切る拓也に、慌てて上条も追従する。

「俺も俺も！」

「まあいいか」

半ば諦めたように溜息をついた後、山上も小さく欠伸をした。

コンサートの後半はコンクールで演奏する課題曲と自由曲。けやき坂高校吹奏楽部のメインの目当てはこれである。再び部長の滝本かえでの挨拶があり、奏者入場となる。今年コンクール選抜メンバーである。人手が足りず「選抜メンバー」などという概念そのものが存在しないけやき坂からするとうらやましい限りだ。

「あいつか。二年生のトップ」

「おまえより体形もいいし顔もいいな。おまえすでに完敗だ」

中本の山上への口撃は相変わらず容赦がない。

「うるっせえよ」

そう返しながらも、確かにビジュアルでは完敗である。それは認めざるを得ない。宮内と並ぶと、妙にしっくりくる。

続いて指揮の田口が入場し、拍手が起こる。場が落ち着いたところで、田口の長い腕がしなやかに、それでいて素早く動き出した。今年、瀬野川高校が選んだ課題曲は露木正登つゆきまさとの「交響的譚詩たんし」。けやき坂高校とは違う曲なので部員にとってはあまり演奏の参考にはならなかったが、けやき坂の指揮者であり田口の元弟子でもある笹野には何かと思うところがあつたらしく、彼が演奏中何度も頷いているのを山上は横目で捉えていた。

続いては自由曲として選んだベルリオーズの「幻想交響曲」より「ワルプルギスの夜の夢」。冒頭の低音は、けやき坂高校にはないコントラバスが効いていたが、演奏レベルと

しては正直山上の期待を下回っていた。隣の笹野は腕を組み、目を閉じている。寝ているのかな、とも思ったが笹野に限ってそれはありえない。試しに山上も同じようにしてみると、ステージを見ながら聴くよりも鮮明に音が聴こえてくる。やっぱりそれほど上手くはない。いつも通りの瀬野川だ。しかし一分半が経過した頃だろうか、金管が勢いよく音を出した瞬間に音が変わった。思わず山上は目を開けてステージを見る。今のは何だ？その後は冒頭よりも全パート集中力が増したのか、思わず空気に吞まれてしまう。隣の笹野を見ると、少し口元が笑っていた。

瀬野川と言えば元々木管パートは下手ではない。常に問題は金管パートにあった。昨年もそうだった。それがたった一年、いや正確には山上が瀬野川の定期演奏会を聴きに行ってから一年も経っていない。数か月間に何があったのか。今年は金管パートが強い。正確には強い力を持った奏者がいる。それが宮内と、その隣に座る二年生トランペットだということ。これは山上の耳にも分かった。全体で見ればそれでも金管はまだまだ統一感に欠ける部分も多いが、コンクールまでの残り一ヶ月でどこまで仕上がるのか、田口の合奏をおおよそ一年間受けた者としては何となく想像が出来るのであった。

「クソッ」

コンサートが終わり控室へと戻った郡大二郎は、思わず自分の荷物を蹴とばした。もつと上手くやれたはずなんだ。まだ足が震えている。観客とステージの距離が思ったよりも近かったからか。気合が空回りしたか。いずれにせよ、練習で出せた音が出せない。篤子や田口が言うところの「色彩」が。ただ必死にバカ吹きしただけなような気がする。次に何をしていいかわからずその場に立ち尽くしていると、

「いやー、緊張するなーやっぱり！」

と三年生の先輩達が次々と大二郎を取り囲んできた。おまえらよく平気でそんな顔出来るな、と思わずキレかけた時、パート・リーダーから思いがけず言葉が飛んできた。

「な？」

「え？」

何が「な」なんだ、アンタ。

「場数踏まなきゃいけないのは佐藤だけじゃないしオマエだけじゃないってことだよ、なあ？」

そうやって彼は周りの三年生に声をかける。そうそう、まだまだだな、などと会話が飛

び交う。

「いいか郡、おまえが上手くいかなかったのはおまえのせいじゃないし、俺が上手くいかなかったのも俺のせいじゃない。全部、全員のせいだ」

「連帯責任ってやつツスか」

「ちよつと違う。単にそれぞれ場数が足りてないってことだよ」

「いや、でも」

何か反論したいが特に何も反論できないでいる大二郎に構わず、彼は続けた。

「コンクール前にもう一回くらい本番挟んでみたほうがいいな。駅前で吹いてみるとか学校で本番やるかとかだな」

「はあ」

彼が何を言いたいのがよく分からない。場数踏めばそれでもいいのか。

「場数踏めばそれでもいいのか、って思ってるだろ」

「えっ」

ズバリ当てられるとは思わなかった。なんだかんだいってパート・リーダーであり、三年生である。

「それでいいんだよ。今年のメンバーなら全国も狙える。ただとにかく人前で演奏するっていう経験があまりにも少ない。弱点はそこだ！って今日分かったんだよね」

「はあ」

「だから一人で焦るなよ。こんなときぐらいリーダーに任せとけよ。かえでと話して何とかしてやつから」

「…はい」

確かにコンクールまでの間に本番の回数が増えるのは望ましいかもしれない。そしてそういうことに関しては上級生に任せるしかない。

「まあそういうことだから、その蹴とばした荷物片付けろよ」

「あ、すみませんツス」

少し自分は奢っていたのかもしれない。自分が引っ張ってるんだと。でも違った。パート・リーダーに氣遣われたことで少し行き場のない怒りが鎮火された自分がここにいる。頼っていいんだな、と気づけただけでも今日のコンサートは失敗ではなく成功だったのかもしれない。

郡大二郎が憤ったり鎮火したり忙しくしているその時、いち早く楽器を片付けた宮内篤子は旧友に会うためにロビーに出てきていた。

「おっ篤子だ、おーい篤子オー」

いちはやく篤子を見つけた小島美紀が大声で呼びかけ、それに呼応してけやき坂高校の二年生女子部員が篤子を取り囲む。聡子はその輪には入らず、珍しく四人の男子と一緒に少し離れたところから遠巻きにそれを眺めていた。

「戸崎さん行かなくていいの？」

山上が当然のように疑問を口にする。

「え、まあ。行ってもあれだけ人数いるとちゃんとした話し出来ないし」

「まあそうか」

あっさりとな納得したところで笹野に呼ばれ、山上は場を外した。

「山上の代わりに戸崎さんがいるだけで雰囲気が変わるな」

今度は中本が話しかける。いつも輪から外れて固まっているこのチームからすると、何か相手をしないとイケないという気遣いもあるのだろう。

「そう？」

と聡子は軽く返事をした。

「そりやああのハゲがいるのに比べたら全然。戸崎さん最近可愛くなったよね」

「え、え何どうしたの急に」

女好きの上条ではなく中本からそんな言葉が出てくるのは予想外だった。思わず顔が赤くなっているのが自分でもわかる。

「いや別に急になってわけでもねえけど。普段話さねえからな俺ら」

「まあ、そうだけど」

「髪切ったでしょ」

来たっ。やっど気づいてもらえた。

「切った切った！やっぱ分かるよね普通、気づくよね普通」

「お、おお、まあ気づくんじゃねえかな」

急にテンションの上がった聡子に中本が若干引き気味で答える。

「そうだよねー気づくよねー」

今度は一気にテンションが下がった眩きだ。この子は何なんだ、さっぱりわかんねえ、

イカれてる？とジェスチャーで中本が残りの二人に援護を訴えかける。まあ仲良くなるまで時間のかかる女だからな、と思いここは拓也が出た。

「そうだ戸崎さあ」

「何？」

髪切ったの気づいた？もう遅いけど。

「上条がさあ」

「何だよ上条の話しかよ！」

思わずキレかかる。

「ああごめんね上条。聞くよ聞くよ」

でもここはガマンだ。そういうヤツなんだ伊野って。長い目で調教していくしかない。って何を考えてるんだアタシ、アホか。

「まあ確かに上条の話しじやあつまらんかもしれんが聞いてくれ」

「だから聞くって。何」

「いや上条が宮内に瀬野川の子紹介して欲しいって」

「アホか戸崎さんに言うな——！」

そこで上条の蹴りが飛んできた。

「アホはおまえだろ！痛えなあ」

蹴られた背中をさすりながら拓也が話を続ける。

「いやそれがサックスの子とパーカッションの子と、ええとあと誰だっけ？」

「そんなに手ェ出すの？」

「だから戸崎さんには言うなって…」

「やめとけば、全滅するよ」

聡子も手厳しい。

「えー戸崎さんまで！俺そんなにダメかなあ」

「何人も候補挙げてる所がすでにダメだよね」

「そんな…皆可愛いからしようがねえじゃん…」

上条がうなだれる。哀愁の似合う男だ。むしろ哀愁以外、いらぬ。

「瀬野川作戦終了」

楽しそうに中本が会話に加わる。

「そうそう、中本君みたいに一人の女の子に絞るのが普通だから」

「えっ…何それ」

中本の顔色が悪くなる。

「あれ？中本君彼女いるんでしょ、他校に」

「いやちよっと待ってそれ何で知ってんの」

中本の顔色がますます青くなる。中本の後ろから拓也が顔を出し、両手でバツを作っている。どうやらこれは男子しか知らないトップシークレットだったらしい。だったらなおさら伊野にお灸をすえたくなってきた。何のお灸かはわからないけど、とりあえず喰らえ伊野。

「えっ伊野君から聞いたよ」

「はああああん!!マジ!!」

中本の顔が今度は一気に赤くなる。そして後ろにいた拓也はすでに遠くへ走りだしている。

「おい伊野マジか、っていねえし！戸崎さんそれ誰にも言っていないよね？」

「うん特に誰も噂してなかったから秘密なのかなと思って誰にも言っていないよ」

しれっと嘘をついたが本当はそもそも拓也ではなく篤子から聞いた話なので、篤子には伝わっているわけだ。

「わかったありがとう、そして忘れて。オイ伊野待てやコラ——ッ！」

そう言い残し中本は走る伊野を追いかけ始めた。

「俺も入れる——！」

上条も追いかけてここに加わり、聡子は一人ポツンと取り残され、そして走り回る彼らを見ながら呟いた。

「男子ってアホねー」

「ほんとよねー」

別の声が被さり、ハツとして振り向くと篤子が立っていた。

「よっ」

「あれ皆は？」

「ああ、なんか特に話すこともなくてさ。挨拶程度で終了。まあそんなもんよ」
そう語る篤子の表情に、曇った様子はない。

「まあとりあえずお疲れ様」

「いえいえ。来てくれてありがとね」

さすがに疲れているのか、篤子は手に持っていたスポーツドリンクを一口飲む。

「でも髪思い切ったね」

「だいぶ伸ばしてたからねえ。今年は暑いからちょうどいい」

髪をクシャットつかんでみせる。なんとなく行動も男っぽくなっている気がする。

「アタシも髪切ったんだけど気づかれなくてさ」

「誰に？」

思わぬ質問に、とうかされたくない質問に、しばらく篤子の目を見つめてしまう。

「いやいや、誰にとかじゃなくて、まあ全体的に」

「なんか怪しいなあ。女子はたいがい気づくでしょ」

「女子はね」

「ほら男がらみじゃん」

ニヤリと笑う篤子の顔は、やっぱり前より可愛くなっている気がする。

「まあ私のことはいいよ。そういえば大五郎」

「大二郎だから」

「ああゴメン、あの人結構かっこいいじゃん」

「そうでもないよ」

と言いながらも篤子も彼氏を誉めてもらって嬉しいのか、言動と表情が一致していない。

「それで誰に気づいてほしかったわけ？髪切ったの」

「え？」

話を元に戻しますか篤子さん。

「いやだから別に誰でもないってば」

「へえ。まあ言いたくなければ別にいいけど」

「でも普通気づくよね…」

ひとり言のような呟きはしっかりと篤子の耳に聞こえていて、

「まあアタシみたいにバツサリ切って髪形も変えればさすがに誰でも気づくんじゃない」

などとフォローを入れてくれる。

「髪形かあ」

とそんな話をしているところで

「あ、いたいた、篤子オー、行くよー」

瀬野川高校の部員らしき人畜無害な風貌の女子が篤子と呼んだ。

「あ、すぐ行くー」

とその部員に答え、「じゃあまた」と言い残して篤子は聡子と別れた。

「うーん」

と唸りながらその場に残った聡子が前髪をいじっていると、山上から集合の号令がかかった。学校に戻って早速練習再開である。特に一年生の参加者には刺激になったようで、「頑張ろー」などと言いながら勇んで校舎に戻っていく様子が、聡子には眩しく映った。

この日は改めて課題曲の合奏を行い、解散となった。笹野からの提案で、急遽月曜日も笹野が合奏をすることになった。今度は問題の自由曲である。

*

月曜日、普段通りに練習開始の点呼が終わり、各自部室から楽器を運び出す。この日も拓也と聡子は並んでそれぞれ重い楽器を持ちながら廊下を歩く。

「昨日のアレ聴いて、今日は何か変わるんかなあ」

「そんなにすぐには変わらないでしょ。個人練習の時間ももうあんまり取れないし」

「まあそうだな。でも今日の合奏で笹野さん結構いじってくると思うよ」

「それはあるかもね」

相変わらず、お互い前を向きながらの会話だ。とかく低音楽器の運搬は取扱いを慎重にしないと危険である。

「それはまあともかく、戸崎どうしたんだその髪形」

目だけ横を見て拓也が問うているのは、それまでサラサラストレートだった聡子の髪型にゆるいパーマがかかっている点である。

「さすがに気づくよね！」

少し嫌味っぽくなってしまったが嬉しくて思わず新しい髪形を撫でた。と、楽器を持っていた両手のうち片っ方が無くなったのでバランスを崩し、バリトン・サクスのハー

ド・ケースの角が拓也のむき出しのチューバにぶつかる。ゴオンという鈍い音が廊下に響いた。

「ああああああ！おまえ！へこんどるがな！」

無残にも、一昨年学校が購入したばかりの真新しいチューバに大きなへこみが出来ている。

「キヤウソー！ごめんごめん大丈夫？痛くない？ごめんねえ」

今にも泣きそうな声でチューバに声をかけ、聡子がへこんだ部分をさする。

「いや、これ楽器だし痛みは感じないと思うけど、っていうか話しかける相手は楽器じゃなくて俺じゃねえ？」

まあ吹奏楽部ではよくある光景だ。マイ楽器をどこかにぶつけて「痛っ」と言ったりするヤツもいる。楽器に名前を付けてるヤツもいる。拓也は楽器をぶつけても代わりに痛がったりしないし、楽器に名前もつけていない。ちなみに上条のサクスの名前は「ジョニー」。チューバ・パートのメトロノームには「ガチャピン三号」という名前が書かれている。どうやら三代目のメトロノームらしい。それはともかく。

「ごめん、ホントごめん」

と謝り続ける聡子が逆に痛々しく、拓也は話題を変えてみた。

「もういいよ。それよりこの前髪切ったばかりなのにまた美容院いったのか」

「え、髪切ったの気付いてたの？」

「気付くだろ」

うそーん。髪形変え損じゃないか。パーマ代を返せ。

「あのさあ、気付いたなら言っつてよ、そんな時に」

「えー、いちいち言っつたらキリねえじゃねえかよ部員何人いると思っつてんだ」
なるほど、そうなるか。

「あー、もういいよ」

「何だよ急に怒り出して」

「怒っつてない！」

聡子はフンフンと鼻息を荒くしながら拓也の前をズンズンと歩き去っていく。

「怒っつてんじゃん…」

と前を歩く聡子に気を取られていると、今度は自分でバランスを崩して壁に楽器をぶつけていた。

「ああっ！」

ベルが少しへこんでいた。

「姉さん、これは悪夢やで…」

呟きながら、階段を四階まで上る。四階にたどり着くまでに、あと何回楽器をぶつけるだろうか。ちなみに拓也は関西人ではない。

この時期になると最終下校時刻は六時。笹野の合奏は四時から五時半までの一時間半である。各自調整を終え、四時より前には音楽室に集まる。合奏の五分前から、西堀の仕切りでハーモニー・ディレクターという機材を使用して全体のチューニングを行う。とはいっても毎度のことながらチューニングはバラバラのままタイムアップである。

そして山上の号令とともに笹野の合奏が始まった。今日大きな変更があることは、山上と西堀は昨日のうちに笹野から聞いていた。

「えーつとまず最初に、木星のテンポを大幅に変えます」
指揮者用の椅子に座った笹野が話し始める。

「変更箇所は冒頭のクラリネット、かなり遅くします。あとは冒頭のソロなんかが終わった後のタタタタタタタタタタの辺りからどんどん加速して行って、メインのメロディも高速で駆け抜ければ、それでまあなんとか規定時間内に収まるはずなんで」

まあ仕方ない処置だな、と拓も思った。何といっても今まで、クラリネットは冒頭のテンポに付いて行けたことがない。パート・リーダーの橋本を除いては。その橋本の表情を伺って見たが、能面のように無表情である。悔しいと感じているのか、それとも仕方ないと感じているのか、どっちにも取れる。

「とりあえず冒頭のテンポ、どこまでのテンポで吹けるかクラリネット試してみよう。他のパートはちょっと休んで」

そう言って笹野はハーモニー・ディレクターを使ってかなりゆっくりのテンポから、順にテンポを上げていき、クラリネットがどこまで耐えられるかを試した。

「思ったよりも遅くしなくて良さそうだな」

クラリネット・パートが完全崩壊したところで、笹野はテストを止めた。

「じゃあこのテンポで行こうか」
「まだ行けます」

その場にいた全員が凍りつくような橋本の声だった。笹野までもが声の主の目を見たまま何も言い返せない。もしくは次の言葉を待ったのか。

「先輩、まだテンポ上げられます」

他のクラリネット・パートの部員は、隣同士で「無理だよねえ」という表情を作っているが、橋本はそれには一切構っていないようだった。

「君が出来ても他の子が出来なきゃダメ」

笹野も冷淡に言い放つ。薔薇の棘のよう、と形容されたこともある男である。

「本番までに全員のテンポを上げます」

橋本も食い下がる。

「本番までこの部分だけ練習し続けるつもり？」

拓也は、笹野の体から冷たい風が吹いてくるような錯覚を覚えた。

「このテンポだと、音楽的に…」

さらに橋本が抵抗しようとした時、冷たい風が熱風に切り替わった。

「音楽的とかどうと言えるレベルかあ！」

普段、冷淡ではあるが物静かな笹野の怒声を、この時部員は初めて聞いた。ビクッと身体を震わせた橋本は、笹野のあまりの怒気に俯いてしまっている。

「他にもさらわなきゃいけない場所腐るほどあるだろ！テンポ上げられるんだったら何で今日までに上げて来なかったんだよ！」

お怒りごもっとも。ごもっともだけど…。拓也は右斜め後ろを振り返って山上を見た。

拓也の視線に気づいた山上の顔には「どうしましょう」と書かれている。だよなあ。

「ごめん、ちょっと熱くなった」

しばらく重たい沈黙が流れた後に笹野が冷静さを取り戻したところで、ようやく音楽室の緊張も少し解かれる。

「君ね、テンポを下げるのは悔しいかもしれないけど、それで音楽的に救えるところもあるんだから、ここは納得しなさいよ。ガキじゃないんだから」

冷静になったらなつたで笹野も厄介である。最後の棘が鋭い。

「すみません」

しばらく俯いていた橋本は、そう言うと言器を持ったまま音楽室を飛び出した。橋本は泣いていた。

「あっおい待て！」

笹野の静止は効かない。

「笹野さん、僕行ってきます」

山上がそう断って追いかけようとする。

「ちょっと待ておまえソロあるだろ」

「誰か代奏しといて」

トランペットの他の二年生に言い残し、笹野の静止を聞かずに山上も音楽室から飛び出

て行った。

「あんだよー」

サクスの小島美紀の愚痴は皆の声でもあった。とにかく雰囲気は最悪になった。笹野もどうして良いか、「チッ」と舌打ちをして譜面を睨み付けている。

「先輩、合奏続けてもらえますか」

そんな雰囲気を打ち破ったのは副部長の中本である。

「ん？」

「二人ともすぐに戻ってくるとは思いますが、それを待ってる時間がもったいないんで合奏、進めてください」

中本が合奏についてここまで決然と言い放つことは初めてだったが、また部活の雰囲気悪くしたくはないという彼なりの必死さがそうさせたのかもしれない。お飾り的とはいえ彼も副部長である。部長が不在の今、決定権は彼にある。

「分かった」

少し考えたあと、笹野は短く答えた。

「じゃあ冒頭から」

そして指揮棒を構えた。

「ああいたいた、橋本さん」

山上がクラリネットの練習部屋である一年二組の教室のドアを開けると、真ん中あたりの席に橋本が座っていた。橋本の目の前にはメトロノームが置いてある。橋本と向かい合うように山上が腰掛けると、橋本も顔を上げた。山上の額からは汗が流れている。この暑い中、走り回って自分を探しのだろうかと思うと、橋本も申し訳ない気持ちになったのか、「ごめん」

と一言呟いた。山上は何も言わず、メトロノームを手に取って、表を見てみた。

「木星頑張ろう！」

と、ウサギの絵の吹き出しに女子高生らしい文字で書かれたものが貼り付けてある。

「頑張ってたんだね、皆」

それを見つめながら、山上が話しかける。優しい声だ。橋本はそれには答えず、手で涙を拭った。

「悔しいだろうね」

山上はメトロノームを元の状態にそっと戻した。ウサギの絵が橋本を見ている。

「情けない…」

しばらくの沈黙の後、絞り出すように橋本が呟いた。

「何が？」

山上は沈黙の間に席を立ち、窓際に立って外を見ている。

「自分が」

「何で？」

外を見たまま、山上は短く返す。

「何でって…あんなゆっくりなテンポまで下げられてさ…皆で頑張ったのに…」

それには答えず、山上は橋本の傍まで戻ってきてもう一度メトロノームを見た。

「そのウサギの絵ってさ」

「え？」

一瞬何のことか分からなかったようで、橋本もメトロノームを見てようやく気付いた。

「ああ、これ」

「橋本さんが書いたの」

「うん」

「絵上手いね」

「そう？」

会話の方向が掴めないので橋本もどんなテンションで返したら良いか分からない。

「橋本さんってもつとクールな感じで練習してるかと思ってた」

山上の声は穏やかだ。まるで何事もなかったかのように。

「こういうのって後輩は嬉しいかもね」

「こういうのって？」

「パート・リーダーが自分でウサギの絵書いて頑張ろうって書いてさ」

言葉が出ない。嬉しくたって、吹けるようにならなきゃ意味ないじゃない。

「多分ね、他のクラリネットの皆は橋本さんのこと情けないとか思ってたと思うよ」

何それ。アンタに何が分かるって言うの。

「最近部活の雰囲気が悪いってんでさ。こないだミーティングで話したじゃん」

橋本は無言で頷く。

「実は結構色んなパートの練習内容とか雰囲気とか見たり聞いたりしてたんだけど、クラ

リネットだけは謎だったんだよね」

「別に隠してたつもりはないけど」

「まあ分かったところで俺には何にも出来なかったけどね」

そりゃそうだろう、と内心で呟く。

「でもこれ見たら安心したよ。何か：橋本さんが頑張って皆を引っ張ろうとしてたのって、他のクラリネットのヤツらにも伝わってると思うんだよね」

「そんなことないんじゃない。結局こんな風になっちゃったし」

吐き捨てるように橋本が答える。山上が次の言葉を探していると、

「情けない、ホントに」

再び自嘲気味に橋本が呟いた。

「情けなくないって、今までやってきたことは」

そこで山上は少し間を置いて、また少し話題を変えた。

「皆合奏始めてるね。聴こえる？」

「あ」

自分を責めるのに必死で、言われて初めて気が付いた。すでに合奏が始まっている。

「橋本さんが自分を情けない、って思いたいなら、むしろ今のこの状況が情けないって思っ
って欲しい」

先ほどまで穏やかだった山上の口調が少しきつくなる。

「どういうこと」

言いたいことは分かる。だが橋本はつい抵抗したくなる。そういう性格なのだ。

「橋本さんに必死になって付いてきたパートの皆を置いて合奏から逃げてるこの状況のこ
と」

橋本不在のまま必死に合奏に喰らいついているパートの仲間たちのことを思うと、胸が
痛んだ。返す言葉もない。

「さつきさ、笹野さんに、テンポ下げると音楽的に、って言いかけてたでしょ」

山上の口調は再び穏やかなものに戻っている。今更ながら、根が優しい人なのかな、と
橋本も思い始めていた。

「あれ、ちょっと嬉しかったんだよね。この部活で音楽がどうこう言う人って少ないから
か」

「それは…嬉しがってる場合じゃなくて、そうじゃない人の存在を嘆くべきじゃないの」

橋本としてもただ吹き散らかしているだけのこのバンドの姿勢は好きではなかった。だからこそクラリネットだけは何か、という思いが強かったのだ。

「まあそうなんだけどね。でもそこを何とかしてもらうために笹野さんに指揮をお願いしてるわけじゃん。結局うちらレベルで音楽について考えても、笹野さんには敵わないから
わ」

笹野の音楽、というか彼の勉強量には橋本も及ばないことはわかっている。でもセンスの違いってあるじゃない？

「まあセンスの違いとかあるかも知れないけどさ」

ハツとして目の前の坊主頭を見つめてしまう。この人は他人の心が読めるのか、それとも部長としての経験でものを言っているのか。

「でも笹野さんの音楽に付いていくことでバンドとして統一感を出したいわけだから、そこは、ね。少しは妥協しないと」

「妥協は…好きじゃない」

「ああ、言葉が良くなかったね。じゃあ皆のために、つてのはどう」
皆のために。痛いところを突いてくるな。

「それだったら出来るよね？橋本さんなら」

「…まあそれだったら…」

少し考えた後に、俯きながらようやくそれだけを絞り出す。もう情けないを通り越して、今まで頼りないヤツと思っていた山上に諭されているこの状況が恥ずかしい。

「じゃあ、戻ろうか」

「え？」

「え、じゃなくてさ。早く合奏戻ろう」

そんなこと言われても、どの面さげて戻ればいいのか。

「今戻らないと、同期だけじゃなくて今まで慕ってくれた後輩から見放されちゃうよ」
それは嫌だ。

「でもどんな顔して戻れるの、この状況で」

皆からの非難がましい目。笹野の怒れる目。色んな視線を想像しただけで足がすくんで動かない。

「大丈夫、そんなに薄情じゃないよ俺たち。それにもう時間も逃げ場もないんだよね。あつという間にコンクール来るよ」

あつという間。こうしている間にも時間は流れる。焦りがようやく橋本を動かした。

「わかった…戻る。でもどうやって戻ればいいの」

「そこは任せなよ。初めは入りづらいと思うけど多分大丈夫」

そう言つて山上は教室のドアを開けて、橋本が来るのを待った。

「わかった。任せる」

意を決したように楽器を握りしめ、橋本が教室から出る。山上は教室のドアを閉め、橋本の前を歩いた。ちょうど音楽室から合奏の音が消え、笹野からの指示が飛んでいる。その最中に、山上はそつとドアを開け、橋本と二人で音楽室へ入った。

「遅い」

二人に気づいた笹野が、やれやれといった表情で冷たく言い放つ。

「すみません、遅れました。お話は後程お願いします」

短く答えて、何事もなかったように山上は自分の席へと戻った。橋本も皆の間を通り抜けて最前列の自分の席へと戻る。

「あの…」

話しかけようとする橋本を、笹野が制する。

「もういい。合奏始まつてるから。しっかり引っ張れ」

この人も暖かい。言葉は冷たいけれど。

「エリ、大丈夫かー？」

小島美紀が声をかける。この人も暖かい。態度は悪いけれど。

「大丈夫。ごめん」

妥協じゃなくて、皆のために。笹野さんも含めて、今は皆を信じよう。

合奏が終わった後、山上は笹野からこつぴどく叱られるかと思いきや、

「おまえ意外と部長適正あるかもな」

などと声をかけられた。そしてそれ以上特に何も言わず、次の合奏日程を確認しただけで、笹野は帰った。その代わりと言つては何だが、中本から恨み節を喰らう。

「おめえいきなり出てつちまうから焦ったじゃねえかよ。やべえと思つて合奏続けてもらつたけどさ、笹野さんにブチ切られるかと思つて超怖えかったぞ」

「悪い悪い、でも助かったよ、サンキュー」

「でもよくあの短時間で橋本さん戻れたな」

実際、橋本が出て行ってから合奏に戻るまで、三十分ほどである。山上の割には頑張ったほうだと言えるだろう。

「俺もあの人のこと良く分かってなかったんだけどさ、あれは熱いよ」

「なんだ熱いって」

「熱いは熱いだよ」

まったく要領を得ないところは普段の山上なのだが、中本もツーカーの仲だけあって

「まあ熱いのはいいことだ」

と軽く流す。そこへ、橋本が近づいてきた。

「山上君」

「はい？」

「ソロ外し過ぎ。本番までに何とかしてね」

それだけを言い残して去っていく。

「熱いか？あれ。どう見ても冷たいぞ」

中本が異議を唱える。

「いいんじゃない、橋本さんらしくて」

山上としても感謝の一言くらいあっても、と思わなくもないが、橋本が持ち直してくれたと解釈した。確かにソロを外し過ぎているし。

「いやあ先輩、良いなあ。橋本先輩と二人っきりで何かやってたんすか？」

卑猥な笑みを浮かべながら寄ってきたのは一年の岸だ。こと女性関係になると上条の何倍も下衆である。

「うるせえよ。おまえはとにかく音程何とかしろよヘタレ！」

山上に蹴りを入られた岸は「部長に蹴られたんですけど」と大げさに痛みがりながら聡子に近づいたが「あつそ」とこれまた軽くあしらわれた。

何はともあれ色々あったが、今年も何とかそれなりにコンクールを迎えられそうなき坂高校なのであった。

*

「…というわけで、コンクールまでに本番をもう一回ほど増やしたいということで結論が出ました！つきましてはご検討をお願いします！」

瀬野川高校の教員室、いつものようにコーヒーをすすする田口と山之内の前で、足を肩幅に開き手を後ろに組み、滝本かえでが部員の総意を伝えた。ミニコンサートが明けた月曜日、練習終了後である。

「かえでつてさあ、進路は自衛隊か何か？」

「は？」

田口の思いがけない問いかけに、思わず山之内がコーヒーを嘔き出す。

「いやすまん、何でもない。あー、本番ね。山之内先生、出来そうです？」

「そうですね、ちよつと校長にも聞いてみましょう」

口元からこぼれたコーヒーを拭いながら山之内が答える。

「ま、そういうことだから。決まったらまた練習の時に伝える」

「はいッ、失礼しますッ」

姿勢を崩さず、かえでが答える。

「もっかい聞くけど、かえでの進路は自衛隊なの？」

「いえ、違いますが…」

「だよね。聞いてみただけ」

不思議そうな顔をして、失礼します、と再び答え、一礼をして滝本かえでは職員室を後にした。

「田口先生、聞きました？うちの生徒から全国大会って言葉が出てきましたよ」
半ば興奮しながら山之内が話しかける。

「ちゃんと聞いてましたよ。目標を高く持つのは別に悪いことじゃないです」

「今まではせいぜい都大会の本選が目標だったんですけどねえ」

「それでも十分凄いことですけどね」

田口はふと、けやき坂高校時代を思い出した。

「で、山之内先生はどう思います？本番一回増やして全国行けそうですか？」

「まあ正直全国は難しいでしょう。でも一昨日のミニコン、ガツチガチでしたからね。場馴れすれば本選は狙えるかもしれませんね」

「どんな場馴れさせるつもりです？」

「田口先生は学生時代、どんな場所が一番緊張しました？」

「うーん」

コーヒーをすすりながら、遠い昔、とはいってもそう遠くはないが、自分が高校生の頃

を思い返してみる。

「コンクールかなあ。吹奏楽知ってる人の前で演奏するのが一番緊張しましたね」

「やっぱりそうでしょう」

「でもコンクールは出来ないでしょう」

「疑似コンクールなら出来るんじゃないですか？」

ふふふ、と笑いを含みながら山之内もコーヒーをすすする。

「どういうことです？」

あまり運営には長けていない田口には、山之内の考えがいまいち掴めない。

「まあ、いずれにせよ校長の許可が必要ですので、ちよつと待ってください」

「わかりました。よろしくお願いします。にしてもそろそろアイスコーヒーになりませんかね」

湯気の立つマグカップの側面の模様を見ながら、田口がボヤク。

「うちの教員室にはそんな設備ありませんよ。自販機で買うしかないですね」

「世知辛いなあ」

「世知辛いすなあ」

ピッピッピ、とポットのお湯が沸いた合図が遠くで鳴った。二人の吹奏楽部顧問は顔を見合わせて苦笑した。

「田口先生、決まりましたよ」

「何がです？」

翌日の放課後、山之内が田口の下へ報告に来た。二人ともあくまでも本業は教員なのでそれぞれに忙しく、授業時間帯に部活の話をすることはまずない。

「今度の日曜日、体育館が使えます」

「そりやまた暑いですね」

「暑いですけど仕方ないですよ、お客さん入れれるのあそこしかないんだから」

「お客さん？」

自販機で買ったアイスコーヒーをズビツと飲みながら怪訝な顔で山之内を見る。この日は一気に気温が上がり、田口もさすがにホットコーヒーではしんどい。

「近隣の高校の吹奏楽部を招待して、体育館でコンクール前のお披露目をします」

「え、他校呼んじゃっていいんですか？」

「ええ、壮行会という名目で校長には了承もらったんで」

今更ながら、この山之内という男、侮れない。仕事も速い。

「むしろ田口先生、他校に手の内さらす形になりますけど大丈夫ですか？」

「それは問題ないですよ。今更うちの演奏聴いたからといってどうこうする時間は、他の学校にも残ってないでしょうし」

コンクールの東京都予選はもう約二週間後に迫っている。

「じゃあ、部員にはそのように伝えましょう」

そういつて山之内は部員が集まる練習場へと向かった。

「まあ時間がないのはウチも一緒だけどねえ」

うちわを扇ぎつつ、田口は呟いた。

山之内からの報告を聞いて、滝本かえでは思わずひっくり返りそうになった。

「今度の日曜ですか!!話し早すぎじゃないですか!」

「でも他にもうタイミングないよ。次の週だと本番一週間前だし、身体休めないよ」

「まあそうですね…」

部員たちが続々とやってくる練習室の入り口近くで、二人は立ち話をしている。

「それに校長の許可ももらっちゃったし、やらないわけにもいかないんだよね。やっぱり辞めますなんて言ったら俺と田口先生のクビが飛んじやうかも」

澄ました顔で言つてのける山之内なのであった。

「わかりました、それでは詳しい話は山之内先生から直接部員にお願いできますか」

「もちろん」

「無理を聞いて頂き、ありがとうございます」

かえでが深々と一礼する。この判断の速さと正しさは部長として得難い資質の一つだ。

二人は練習室内に入り、部員の点呼を取る時間まで待った。

やがて部員が揃い、点呼を行う。この暑さで体調不良になり欠席した部員もいたが、まあそれは仕方がない。今日の練習予定を確認した後、

「それでは先生」

とかえでが山之内を促す。それまで入り口に立っていた山之内が指揮者台の脇まで来て

「えー」と話し始めた途端に

「起立!」

と窓ガラスが割れるのではないかと思われるほどの号砲が鳴り、部員が一斉に立ち上がる。

「宜しくお願いします！」

「宜しくお願いします！」

かえでに続いて復唱した部員たちであったが、全員の力をもってしても、かえで一人の音量には敵わない。まったくこの子は本当に自衛隊クラスだな、と半ば恐ろしさを感じながらも、山之内は改めて話し始めた。

「えー、皆の要望どおり、コンクール前にもう一度本番を組むことになりました」

部員たちから「おおー」「よっしゃー」などと声上がる。

「次の日曜日、場所はうちの体育館。近隣の学校の吹奏楽部がお客様です。学校への名目は壮行会だが他校には我々のお披露目ということで伝えるからそのつもりで」

「早くないッスかあ!!」

先ほどまで無邪気に盛り上がっていた部員たちから、かえでと同じような反応が返ってくる。

「遅いより良いんじゃないの？ま、そういうことだから。体育館は暑いので暑さ対策を忘れずに。それじゃ」

簡単に告げると、山之内はサッサと練習室を後にした。すぐに近隣の学校に案内を出さなければいけない。

「ということだから、皆気合入れてくよ！」

かえでの声にも部員はざわつくばかりで反応がない。

「返事は——ッ！」

「はい——ッ！」

もはや軍隊そのもののようなだが、かえでに「返事は」と叫ばれたら「はい」と叫ぶ。それがここ最近の瀬野川高校吹奏楽部の日常になっていた。

そしてあつという間に日曜日。演目はコンクールの課題曲「交響的譚詩」と自由曲「幻想交響曲」のみ。真正正銘、コンクール前のお披露目会である。この地域で、この時期にこんな催しをする学校はない。唯一、同じ学区で「最強」の私立高校、七尾高校の吹奏楽部がサマーコンサートを行ったりもするが、運良く日程がずれていたためか、近隣からは中学校を含め、多くの学校の吹奏楽部員が集まっていた。瀬野川高校からも、一年生を中心としたコンクールに出場出来ないメンバーがこの日は客の中に混ざっている。

体育館の狭い舞台袖では瀬野川のコンクール選抜メンバーが落ち着きなくざわついていた。舞台下手と上手に分かれての入場で、下手には田口、上手には山之内の両顧問が付いている。予定の時間になったのを腕時計と体育館の時計で確認すると、上手の山之内が田口に向けて右手を挙げた。

「そんじゃいくぞー」

いつものようにぼんやりと呟きながら田口が下手の奏者を入場させる。それを合図に上手からも奏者が入場する。さすがに演奏会の勝手を知った者たちが客として集まっているので、入場とともに拍手が起きる。奏者が入場し終わる頃には、コンクールの本番と同じように、すでに田口も指揮者台の横に立っている。舞台上のチューニングも、コンクール同様、無し。集まった大勢の中学生、高校生、はたまた顧問や外部指導者と思われる大人たちを一通り見渡してから、田口は一礼した。再び拍手が起こる。拍手の間に田口は指揮者台へと登る。そして奏者たちを見渡し、小声で「楽しもう」と言って指揮棒を構えた。

「あーっ、やっぱかった」

「何がよ」

壮行会だかお披露目会だかの後、帰りがてらに篤子と大二郎は街の楽器店まで来ていた。楽器の簡単な調整をしてもらうためである。本格的な調整となると楽器店預かりになるため、今日そのまま持って帰れる範囲での最終調整だ。大きな調整はミニコンサートの前ですでに終わらせてある。

「体育館が響かないのは分かってんだけどさ、結構俺の音やべえなあ」

「まあ全国レベルではないでしょうね」

付き合い始めてちょうどいい感じの月日が経った頃合いのはずだが、二人の会話は付き合い初めとあまり変わらず、さほど甘くない。

「そりや自分でも分かっているけどさ。練習の時みたいな音が上手く出ねえ」

「単に経験不足でしょ」

楽器の調整を待っているだけのこの時間に愚痴られても困る。

「篤子は音変わんねえよな。なんで？」

「小学校から何回人前で吹いていると思ってるの。坊ちゃんとは場数が違うっての」

大二郎が楽器を始めたのは中学校からだ。確かに場数は篤子の方が多く踏んでいる。

「何か変えたほうがいいのかな。どう思う？」

最近、大二郎は篤子に意見を求めることが多い。二人で今の部活を引っ張っているという自信が、逆に不安に変わる時がある。だが表には出さないものの、篤子の自信は絶対的だ。大二郎にとっては誰よりも頼りがいのある彼女であり、姉御なのである。

「今更何も変えないでいいよ。特に今日気になったんだけど、無理に響き作ろうとしないだね。ホールに行けばちゃんと響くからさ」

「わかった。他には気を付けるところあるか」

「指揮に集中。アタシの音に頼らない。ビビらない」

ボコボコである。

「きつついな。まあでも心当たりはあるから、直すよ」

「まあ今日のはかなり緊張するイベントだったから。本番は大丈夫でしょ。田口先生見れば平気よ。振り始めるまでずっとのほほんだから」

それが田口の場数を物語る。そして指揮棒を振り始める瞬間、グーッと楽譜の世界に入っていく集中力。自分の感受性も高まったのか、それを昨年よりも多く感じられるから、篤子も今が楽しい。

「お二人さん、終わったよ」

楽器店のリペアマンが声をかける。ありがとうございます、と言って各々楽器を受け取る。

「そうそう、さっき来た学校の先生がさ、今年の瀬野川は面白って言ってたよ。俺も聴きに行くから。頑張ってたな」

楽器店の、特に学校と付き合いの多いリペアマンは地域のバンドの出場するコンクールには顔を出すことが多い。コンクールの現場で、本番前に壊れた楽器を直すという神技を繰り出す時もある程だ。

「はい！ありがとうございます」

篤子が丁寧に礼をして、二人は店を出た。

「アンタああいう時にちゃんとお礼言わないと、お得意様になれないよ」

「ああ」

大二郎の返事は上の空だ。

「何今のでまたビビったの？」

「そうでもないけど」

と言いつつも大二郎の目が泳いでいる。

「だから大丈夫だって言ってんじゃん。ちゃんと隣にいるからさ」

「そりゃそうだ、いきなりいなくなれたら困るだろ」

意外と子犬系なんだよなー、と思いながら大二郎の顔を見ていたら、だんだん犬に見えるてきた。

「ふっ」

急に篤子が嘔き出したので、大二郎も怪訝な顔をする。

「何だよ。人の顔見て笑うなよ」

「ごめんごめん。ワンって言ってみてよ」

「なんだよそれ。言わねえよ」

「いいじゃん別に。それすらビビってるわけ？」

意地の悪い顔で篤子が下から覗き込む。

「ビビってんじゃなくて恥ずかしいんだよ。なんで街中でワンとか言わなきゃならん」

「アンタって自意識過剰よねー。誰もアンタのことなんて見てないよ？」

「何だよそれ」

「いいから早く」

段々と面倒になってきたので、大二郎も観念した。篤子はしつこい。

「…バウ」

ぶはははははっ、と篤子が盛大に嘔いた。

「何よそれおっかしー。ワンだって言ってんじゃん」

「せめて大型犬ぼくさせろよ」

「どうでもいいわそのこだわり」

呟いて篤子は自転車にまたがった。

「じゃあまた明日」

篤子が左手にハンドルを握り、右手を挙げる。

「おう、気をつけろよ」

そう返して大二郎は身体を駆へと向ける。

「おまえもな！」

大二郎の背中に篤子の声がぶつかると、傍目にはなかなか恋人同士に見えるらしい二人なのであった。

*

拓也たち二年生にとって高校生活二度目のコンクールの日がやってきた。今年も昨年同様八月の中旬、数日間に渡って東京都吹奏楽コンクール予選が行われる。この予選で金賞を受賞した上位団体のうち六団体が東京都大会の本選へ抜け、そこからさらに二団体が全国大会へと抜けることができる。予選の会場は昨年と変わらず練馬区立練馬文化センター。今年も青い空が広がっているが、風はなく、朝から暑い。

今年もまた昨年と同じく、けやき坂高校と瀬野川高校は同じ日に演奏することになった。いた。けやき坂高校の出番は午後、瀬野川高校は朝一番である。出番まで余裕があるので、けやき坂高校の部員も皆、朝早くからホールの客席に陣取り、瀬野川高校の出番を今か今かと待っている状態だ。

「まだかよ、遅えよ」

髪を短く切ってもまだ金髪の中本が山上に不満をぶつける。この二人はだいたいどこでも隣同士に座っている。

「まだだよ。最初くらいはプログラムに書いてる時間通りに進むんだから」

コンクールのタイムテーブルは、一応各団体十五分で計算されている。しかし舞台上のセッティングの転換に時間がかかったり、演奏そのものが短かったり長かったり、計算通りにはいかないもので、朝から数団体目くらいからタイムテーブルは当てにならなくなる。それにしても。昨年は山上たちは他の団体の演奏を一切客席で聴かなかったものだが、今年のけやき坂高校は全員が客席にいる。出番の関係もあるだろうが、山上たちが異常だったのか、それとも今年の一年生が真面目なのか、それはわからない。自分の出番が終わったらもう客席に戻ってこない輩もいるかもしれない。

やがて開演のブザーがホールに響き渡り、吹奏楽連盟の役員らしき人物の長い話が始まる。中本はすでにキレ顔だ。役員の話が終わった後、まだ暗転しているステージ上に、瀬野川高校の生徒がわらわらと入場し始めた。セッティングが終わり、指揮者台の横に立つ田口がステージ下手の方に向かって何か頷くと、舞台が明転する。

「プログラム一番、都立瀬野川高等学校。課題曲五に続きまして、自由曲はベルリオーズ作曲、幻想交響曲よりワルブルギスの夢です」

アナウンス終了とともに田口が一礼する。朝一番、しかもこれまで特にこれといった結果も出していない瀬野川高校の出番だけあって客席に聴衆は少ない。パチパチ、と静かな

拍手が起きる。礼を終えた田口は指揮者台に登り、少し間を置いた。そして指揮棒を構える。指揮者の手が初めの拍を打ち始めてから自由曲が終わるまできっかり十二分が、各校に与えられた制限時間である。

田口の長い腕が素早く動き、課題曲の演奏が始まった。その瞬間、山上は息を飲んだ。けやき坂高校は二週間前にミニコンサートを見たばかりだったので、先週瀬野川高校で行われたお披露目会には参加しなかった。実に二週間ぶりに演奏を聴いたわけだが、二週間ですぐやったらここまで変わるのか、理解しがたい瀬野川の上達ぶりであった。

そして自由曲。ステージ上から風が吹いてくるような感覚に見舞われた。特に例のトランプेटのトップ。ミニコンでは少し頼りなさも垣間見えたが、今ステージ上から放たれる音は完全に田口の音楽と同調している。一点の曇りもない、色鮮やかな音色。彼がこの二週間で相当な自信を付けたことが聴き取れる。また変わりなく高いレベルを維持している宮内篤子の演奏と、彼のトランプेटが混ざった時、宮内の音がさらに輝いているようにも聴こえた。

「ブラボー！」

演奏が終わると同時に、少ない客席のどこかからか、ブラボーが飛んだ。良い演奏を聴くとブラボーが飛ぶ。コンクールでは何度か耳にすることが出来る叫びだ。客席の拍手は、演奏前と打って変わって大きな音に変わっていた。

「あーやりきった。我が生涯に一片の悔いなし！」

演奏終了後、舞台袖に引き上げる間に小さく「北斗の拳」の名台詞を叫んだのは、トランプेट・パートのパート・リーダーである。

「先輩、まだツスよ。本選がありますから」

そう答えたのは大二郎だ。正直、かなりの手ごたえがある。他にとんでもなく急成長したバンドが現れない限り、金賞は確実だろう。そして本選にも進めるかもしれない、と大二郎は感じていた。それだけ会心の演奏だった。練習以上の音が出せていた気がする。

「篤子、どう思う？本選いけるかな」

同じく近くを歩いていた篤子に、大二郎は声をかける。

「舞台袖では静かに。本選は微妙かな。審査員じゃないからアタシに聞かれてもわからないな」

静かに、と言われてそれ以上大二郎が話せずにいると、

「でも今日は良かったよ、アンタも皆も」

と軽く微笑んで、篤子はスタスタと先を歩いて行った。舞台では、次の学校のセツティングが終わり、アナウンスが入り始めた。それぞれの学校の悲喜こもごもに付き合っている時間はない。コンクールは淡々と、粛々と進んでいく。

「ゴメン！申し訳ない！」

演奏が終わり、楽器をトラックに乗せた後、ロビーの椅子に座って遅い昼食を取っていた山上に向かって頭を下げてきたのは笹野滋だった。

「スコアがなくても振れるようにしておけなかったのが悪い。本当に申し訳ない」

「いや、笹野さんそんなに謝らなくてくださいよ」

午後の早い順番で演奏をしたけやき坂高校は、これまでと同じく所謂「ヘタクソ」の一言で済まされるような演奏で終わった。部員の中では昨年よりいいかなという手ごたえはあっても、一般的に見れば特に変わりはない。ただ、それで済んだのは幸いだった。

アナウンスが入った後に一礼し指揮者台に登った笹野は、明らかに緊張していた。午後にもなると客席もだいぶ埋まり、聴衆の数もぐっと増える。こんなに大勢の前で、しかもコンクールで指揮をするのは初体験である。

「落ち着け」

自分に言い聞かせて振り始めた課題曲は、特に問題がなかった。ちよつとした事故が起きたのは自由曲の木星の途中のことである。自身、音大受験の準備もあって毎日のように学校に顔を出せない笹野は、細かい指示をスコアに書き込み、時折それを確認しながら指揮をしていた。しかし木星の途中で、うまくスコアがめくれず、次のページに進めなかった。かといって指揮を止めるわけにもいかず、今スコア上のどこを振っているのかも段々わからなくなり、結局スコアをめくるのは諦め、記憶を頼りに指揮を続けたのだが、やはり自信のない指揮になってしまふのは仕方がない。結果、「なんとなく」な演奏になってしまったわけである。

ただ、スコアめぐりに失敗した笹野に気づいた二年生―指揮者の横で吹く橋本や、金管であれば山上、中本、木管であれば戸崎や西堀といった面々が身体を動かし強弱などを表現することで、何とか最低限のことは出来た、という塩梅であった。

「まあ元々、去年も最下位だったバンドなんですから」

山上がおにぎりを頬張りながら自虐的に言うと、

「まあそう言うなよ。須崎すざきさんにもこつてり絞られちゃった」

と苦々しそうに笹野は答えるのであった。今年もトラックの運転手はOBの須崎である。
「それはウザいっすね」

須崎に小言を言われる辛さを知っているのか、山上の隣で同じように昼食を取っていた中本も笹野に同情した。他に上条と拓也もいる。結局この四人はどこでも一緒だ。

「うん、さすがにムカついた」

ようやく笹野の顔に笑みが戻る。

「まあ、ゆつくり休め。一年生とか他の部員が変なこと起こさないように注意してくれよ」

そう言い残して、笹野は客席に戻るべく、山上たちの下を離れてホールの中を歩き去って行った。

「淳センパイ」

入れ代わるように近づいてきたのはホルンの一年生で淳に恋する林田尚江なおえだ。大勢の高校生が集まる場で改めて見ると、林田はやはりかなり美人の部類に入るようだ、ということを中本も認識した。中本に彼女がいなければ思わず手が出そうである。

「おまえ昼飯食い終わったなら次の団体から客席でちゃんと聴いとけよ」

昨年の自分を棚にあげて中本が先輩風を吹かしていると、背後からまたもや中本を呼ぶ声が聞こえた。

「淳、おつかれ」

聞いたことのない上品な声に、一同が一斉に振り向く。

「おー梓あずさ」

「梓？」

思わず山上が復唱する。知らない名前だ。誰なんだ。それにしても美人だ。美人すぎるにも程がある。けやき坂にはいないお嬢様系。淳の妹か？親戚か？しかしどこかで見たことがある気もする。

「あの一、すいません、どっかで会いました？」

同じようなことを考えていたのだろう、成功率0%のナンパ師上条がすかさず声をかける。
「いえ、皆さんとはお会いしたことがないですが…」

急に声をかけてきた上条の濃厚な顔面パーツに恐れをなしたのか、中本に声をかけた時

とは明らかに違うテンションで「梓」は答えた。

「あー、あのー、あれだよ。例の、ほら。あれつつたらわかんדר」

中本の歯切れが悪い。が、残る三人の男子は思い出していた。中本に彼女が出来た。しかも他校。このことか。

「ああ、秘密だったアレか？」

山上が一応確認する。

「秘密って何？」

秘密という言葉が不満だったのか、少し責めるような口調で梓が中本の頭に手を乗せる。

「おいハゲ余計なこと言うなよ」

中本もこの状況に困惑気味である。そこへ来てさらに、

「先輩、誰ですかこの人？」

林田の追及が始まる。なんでこんな場でカチ合ってしまうのだろうか。中本は神も仏も呪いたくなってきた。

「いい機会だから言っとけば？俺も紹介して欲しいし」

こんな場面で呑気に長槍を繰り出してくるのはやはり拓也である。ジロリと拓也を睨んだ後、観念したように中本は梓を紹介した。

「えっと、七尾高校の沢内梓^{さわうち}。うちらと同じ二年。なんつーかその、一応付き合ってる」

「え———！！」

叫んだのは林田だ。叫ぶのも無理はない。

「一応って何」

梓はさらに中本の頭を押し付ける。

「痛い痛い、やめろって。ちよつと向こう行こう、事情は後で説明するから」

中本は頭に乗せられていた手を掴み、強引に梓を連れて山上たちから離れていった。

「はー、あれだったのか淳の彼女。メツチャ美人じゃん」

上条は遠く離れた梓をまだ目で追っている。と、急に記憶が蘇ってきた。

「思い出した、七尾のフルーツだ！」

「ああ」

「そう言えば」

山上と拓也も思い出した。昨年の地区音楽会でソロを吹いていた、遠目にも美人とわかる美人。近くで見ると美人すぎて逆に繋がらなかったが。

「同じ学年だったのか。メツチャ上手かったよなあの子」

山上が当時を思い出す。と、どこからかすすり泣きが聞こえてきた。林田だ。

「淳先輩、彼女いたんですか…先輩たち、知ってたんですか…」

これは気まずい。残されたヘッポコ三人に何が出来るというのだろう。何も出来やしない。

「淳から聞いてはいたんだけど、ほら、アイツの言ってることだからあんま信用してなかったっていうか…なあ？」

とりあえずで口を開いてしまった上条がすがるような目で他の二人に同意を求める。

「ああ」

「まあ」

二人の返事はそっけない。二人とも慌てておにぎりに集中する。ここは上条に任せてしまおうという意図が見える。友情とはそんなものだ。

「なんで教えてくれないんですか！」

「いや淳から内緒って言われてたから…」

と林田と目を合わせた瞬間、上条の胸にずつきゅんと銃弾が撃ち込まれた。まっすぐに俺を見る泣き顔、反則級にカワイイ。元々美人の林田を良く思っていた上条だったが、今までは林田の気持ちの中本に向いていると分かっている以上、恋愛対象から外していただけのことだ。そして今、彼女は失恋したばかり。恋愛対象にカットインである。

「あんなに美人な彼女がいるとか知ってたら、もっと早く諦めたのに！頑張って楽器の練習だけしてたのに！」

「いや林田さん」

「いいですもう、放つといてください！」

何かを言いかける上条を遮って、林田は走ってその場から離れていった。

「良くない！」

追いかけてやうとする上条を、

「放っておけっていうんだから放っておけよ、別にいいだろ」

と拓也が制する。しかし上条は聞かなかった。

「良くないんだよ俺が！惚れちゃったの！」

「ナニ!?!」

「はあ!?!」

山上と拓也が同時に素っ頓狂な声を上げた時、すでに上条は走り出していた。

「あいつ…ある意味尊敬するな」

山上が呆れたように言うと、

「恋愛暴走特急だからな」

と拓也も諦めたように呟いた。笹野からも注意するようにと言われていたが、一番の要注意人物は上条だったかもしれない。

「ま、どうせ今日中にフラれるから。演奏聴くか？」

拓也の問いかけに、

「そうしよう」

と山上も応じて、二人は客席へと向かった。

その日の結果、大二郎の確信通り、瀬野川は久々となる金賞を取った。結果発表で「ゴールド金賞」とアナウンスされた瞬間、瀬野川の部員たちは叫びに叫んだ。泣き出す部員もゴロゴロいた。しかし本選には選ばれなかった。所謂「ダメ金」というやつである。それでも指揮者が変わって一年目でこの結果であるから、業界関係者や近隣の高校を相当驚かせた。また翌日出番を迎えた、梓が属する七尾高校も、同じくダメ金。それほど、東京都の高校の部は層が厚く、上の大会に進むのは厳しい。

ちなみにけやき坂は、順当に今年も銅賞であった。銅賞の結果を聞いても、部員にはさほど動じるところがない。万年銅賞バンドの伝統であろうか、堂々と銅賞を受け入れたものである。一応、笹野は天を仰いだ。山上は、下唇を噛んだ。中本はアヒル口になっていた。上条はまばたきを忘れた。それぞれ、どうしていいか分からない時に出るクセである。拓也は、会場で買ったプログラムのけやき坂高校の箇所「銅」と書いた。書いた後、少し虚しくなった。

こうして、拓也たちけやき坂の二年生にとって最後のコンクールが終わった。

*

夏のコンクールは、春の定期演奏会と並んでけやき坂高校吹奏楽部にとって年間の二大イベントの一つである。むしろそれしかないと言ってもいい。残る本番は秋の文化祭、地区音楽会だけである。昨年は文化祭のあたりから山上たちの学年の女子のうち、村田、小

島、光田と、上級生との仲が悪くなったりしてなかなか波乱万丈だったが、今年は落ち着いている。静かに淡々と時間が流れていく。それが山上には何だか怖くもあったのだが、平和であるに過ぎたことはない。部長としてはこのまま平穩無事に定期演奏会まで終え、颯爽と引退したいところだ。

もちろん他の部員にもそれぞれ思うところはあるし、特に二年生は部の伝統行事をまずはしっかりと行い、一年生に伝えていくという大切な役目もあり、なかなか忙しくはあった。

光田は自分の技術を何とか後輩に残そうと、まずは地区音楽会を目標にパートのレベル・アップに努めている。文化祭についてはほとんど捨てているようだ。

村田や上条は文化祭の演出準備に忙しい。今年も上条のソロをフィーチャーした楽曲を挟んでいくことになっているが、それ以外の曲順のバランスや、毎年恒例の一年生のダンスの演出も考えなくてはいけない。

指揮者の笹野も自身の音大受験に向けて忙しく、秋の二つの演奏会は部員で指揮をすることになった。学生指揮者に立候補したのは西堀で、その西堀は毎日次の合奏に向けて準備を進める日が続き、コンクールが終わってからというもののほとんど楽器を吹いていない。

コンクール直前で色々あった橋本は、以前よりも少し他のパートとの交流練習を増やしたりと、それなりに工夫を凝らしているようである。文化祭で演奏するようなポップスの曲はクラリネットにはほとんど休む箇所がない楽譜も多いので、パート全員でランニングをするなどスタミナ強化のためのメニューにも取り組んでいる。

コンクールの会場で中本の彼女の存在が発覚した後のホルン・パートは、微妙な雰囲気になることもなく仲良くやっている。林田は、あの後上条に「付き合いたい」と言い寄られていたが、返事を保留にしたままだ。それはそれでむごいが、林田のダメージも相当だったので、ここは上級生が待つてやるべきだろう。そのダメージと上条の告白が合わさってなんとなく感情のブレも中和されているのか、林田が中本に対して以前ほど積極的に絡んでいくこともなくなったが、かといってことさら冷たくなったわけでもない。普通の先輩と後輩の間柄に、ようやくなったというところだ。

低音族も、特にコンクール前と変わらない。少し関係が発展しそうな雰囲気ではあった。聡子と拓也の間にも、これといって変化はなかった。

そんなわけで、傍目で見ている山上からはこれといって何事もないように見え、特にすることもなく二学期に突入していた。

「皆進路どうすんの」

一番「進路」などという言葉が似合いそうにない中本がそう切り出したのは、文化祭が差し迫り、ちよつとのんびりしていた吹奏楽部がさすがにやばいんじゃないかと休日練習を行った日の昼食時である。

この日はミーティングも兼ねて、二年生が音楽室に集まり一緒に昼食を取るといふ、この学年にとっては初の試みが行われていた。中本からそんな質問が投げかけられたのは、文化祭から地区音楽会、そして定期演奏会までのおおまかな部の流れや、文化祭までの間に仕上げておくポイントなどをあらかじめ整理し終り、雑談タイムに突入した後だった。

「なんだよ淳ィ、似合わないんだけどー」

小島が笑い、周りも笑った。だが大方の部員は心からは笑えない。文化祭後には三者面談が待っているが、正直、進路などまだ考えていない部員が大半だったからである。

けやき坂高校は一応、進学校だ。受験への対策を練るのも早い。二年になってすぐに簡単な進路説明会があり、秋からは本格的に進路を決め始め、三年次は通常の授業に加え、進路別に特別クラスが設けられる。大学への推薦入試を狙う者には担当の教諭が面接、小論文と、マンツーマンで指導することにもなっている。

「いや俺マジで何も考えてなかったからよ、皆どうすんのかなと思って」

笑われた中本は、特に笑われたことに怒る様子もなく、心から知りたい、という雰囲気醸し出していた。

「でもまあオマエはアレだべ、単位取れなくて退学だべ」

「バカ言え」

中本に一方的に退学を告げられた山上が一蹴する。

「でもオマエ赤点だらけじゃねえかよ」

二年生から山上と同じクラスになっている上条が追い打ちをかける。

「オマエ、皆の前でそういうこと言うなよ」

「大丈夫、皆知ってるから」

割って入ったのは村田だ。一斉に笑いが起きる。村田は山上、上条とはクラスが違うが中本とは同じクラスである。情報の出所はこれで特定されたようなものだ

「橋本さんはやっぱり推薦？」

拓也が橋本に話しかける。おそらく入部してから、これがファースト・コンタクトに近

い。クラスも一度も一緒になったこともない間柄だ。

「それもありだと思っただけ、うちからの推薦ってそんなにいいところ行けないから、一般受験するつもり」

「間違いなく推薦取れるのに？もったいないな」

拓也が言うとおり、橋本は学年内でもトップクラスの成績を誇ることで有名だ。間違いなく推薦は取れるだろう。しかもけやき坂の推薦枠のうち、相当上位の大学への推薦が取れるはずだ。

「まあいいじゃない好き好きで。伊野君のほうこそ何考えてるのかわからない。授業中寝てばっからしいじゃん。赤点多多いらしいし」

橋本が逆に切り返す。

「俺は専門行こうかと思って。映画の」

「はあ、伊野君が映画？」

思わず小野田が身を乗り出す。

「いや小野田さん、こいつ実はかなりの映画オタクでさ。洋楽オタクでもあるけど」
普段から仲の良い上条がフォローを入れる。

「でもアンタ：伊野君ってアートの匂いが全然しないけど」

聡子が突っ込む。二人の時はアンタと呼ぶときが多いが、皆の前では何となく「伊野君」で通しておかないとまたあらぬ噂を立てられかねない。まあそれはそれで悪い気はしないのであるが。

「いいじゃん、撮りたいの、映画」

子供のように拓也が反論する。

「超いいじゃん、芸術系。どんな映画撮りたいの」

反応したのは西堀である。思わず冷めた目で彼女を見てしまう自分に気づいて、聡子は慌てて視線を拓也に戻す。

「そうだな、『リバー・ランズ・スルー・イット』知ってる人いる？」

拓也が全員に問う。誰もその映画を知っている者はいなかった。

「まあいいや、その映画は色彩が凄くてさ。光の色が凄いついていうか。そういうのかな。色とか光とか、そういうのにこだわった映画撮りたいな」

「何それ超かっこいいじゃん」

西堀が盛り上がってきた。

「そんなセンスがあるとは思えないけどなあ」

聡子は反対派だ。

「いいじゃん、伊野君がやりたいって言ってんだから。あたしも芸術系志望だし」

西堀が聡子に食ってかかるように返す。

「へーどんな系？」

中本が興味なさそうに、だが事の発端は自分なんだしまあ聞くしかないか、という態で西堀に尋ねる。

「実は音大受けようかと思ってんだよねーアタシ」

「はあ!？」

全員が驚いた。というか心の中で、無理無理、と思った。

「無理だろー」

心の声を心に閉まっておけない上条がズバツと返す。好きでもない女や自分が美人と認めていない女性にはこのうえなくデリカシーに欠ける男であった。

「いいじゃん別に目指したってさー」

西堀がふて腐れる。まあ当然だ。だが聡子は心の中で「こちらは心の声を表に出すことはほとんどないー、オマエごときに無理だろ、と思い切り突っ込んでおいた。

これまでもけやき坂から音大に進んだ者は、吹奏楽部かどうかを問わず何名もいるが、こと吹奏楽部においてはその学年でズバ抜けたトッププレイヤーぐらいしか音大には合格していない。しかも浪人したうえでようやくの合格だ。その先も、結局プロになることは叶わず、普通の会社に普通に就職するハメになる。

この学年で言えば、「音大を目指す」などと口に出来るのは、橋本と、せいぜい頑張つて聡子くらいのものだ。その橋本と目が合ったので、聡子は肩をすくめるジェスチャーで心の声を伝えた。どうやらそれは伝わったようで、橋本も同じジェスチャーを返す。

「戸崎はどうすんだ？」

「は？」

急に拓也から自分に振られて、とてつもない速さで拓也と目を合わせる。前に上条が「アイツほど分かりやすい目する奴はいない」とか言ってたけど、アタシには相変わらず何考えてんのか分かんねえなーコイツの目。

「アタシは、別に…特に何も考えてないよ」

本当は考えてはいるのだが、今ここでは言いたくない。特にお気楽に音大を受けるなど

とぬかしている西堀の前では。

「だよなー、あー安心した。これから考えればいいよなあ」

中本が本気で安心している。仲間がいると思っただろうか。そういう意味ではほとんどの部員が彼の仲間である。

「まあ進路の話は結構プライベートな内容だし、ここらにしとこうや。そろそろ時間だから、午後からも頑張りましょう。とりあえずは文化祭を成功させるように」

そう言っただけで山上が場を解散させた。正直、山上にとっては他人の進路などどうでも良かったというのもある。赤点取り放題出血大サーピス中の自分が大学進学を考えているというのも言いたくなかった。予備校に通っているのは周知の事実なので今更隠すことでもないのだが。

その日の練習終了後、楽器を部室へ片付けに行く道すがら、拓也は聡子に声をかけた。たった一ヶ月前にはよくある光景だったが、ずいぶんと久しぶりに感じる。

「戸崎さー、ほんとに進路決めてるだろ」

周りに聞こえないように、拓也の声は小声だ。

「考えてないって言ったでしょ」

聡子もつられて小声になる。

「音大は厳しいと思うけど、専門なら入れるかもしれないぞ」

「はあ？」

何でコイツが知っている。誰にも言っていない、っていうか親にもまだ相談していない。っていうか短大にいくか専門にいくかで悩んでいるのが正直なところだ。

「何それカマかけてんの？」

「いや、戸崎は音大行きたいんだろなって勝手に思っただけだよ。外れてたらスマン」

野生のカンか。おそろしい男だ。けどね、アタシには自分の楽器もないの。中学の時からずっと学校の楽器使ってるんです。そこがネックなんです。

「まあ、決まったら特別に教えてあげるから」

「そうか、じゃあいい」

満足気な顔をして、拓也は部室で楽器を片付けるとサッサと帰って行った。なんかさ、そこまで言うなら相談乗ってくれるとか愚痴聞いてくれるとかないわけ、などと聡子は思ったりもしたが、それは甘えだと気づいて「イカンイカン」と頭を振った。

とりあえず今日分かったことは、拓也とは進む道が違うということだ。自分が短大にせ

よ音大だか専門だかにせよ、拓也は映像の専門に行く決めてしまっている。少し寂しいものがある。違う道を選んだ二人が、同じ道を歩むことは出来るのだろうか。交差するところはあるのだろうか。そもそもアイツはどういうつもりなんだ。アタシはなんなんだ。ただのバリサクの女か。そんなどうしようもない苛立ちを抱えながら、靴を履き替え、校舎から出た。

駐輪場から勢いよく自転車を出して、強めにペダルを踏んだ。秋風が身体を吹き抜ける。風に乗った寂しい香りは、秋だからなのか、それとも自分が寂しいからなのか、聡子には良く分からなかった。まだ拓也のことを好きだと言える自信はない。自分にもこの気持ちは何なのか、判然としないのだ。強いて言うなら…母性ってやつか？違うな。

*

正直言えばもう少し戸崎と色々話したい気持ちもあつたが、悪友の誘いは断れない。今夜は上条のおごりで瀬野駅のカフェ。サシである。

「なあ俺よう、どうしたらいいんだよ」

入店から三分と経たないうちに始まった。まあ察してはいたが、要は愚痴を聞いてくれ、ということなのだ。愚痴の内容も想像が付く。林田の件だ。

「何の話か先に言えよ」

一応、念を押す。

「何ってよう、林田さんのことに決まってるじゃねーか」

「分かってたけどさ。一応、念のためだ」

九月も中旬に迫ることもあり暑さは柔らいているが、まだホット飲料を頼むほどではない。上条はアイスコーヒーのブラック、拓也はアイスマイルクティード。

「返事保留ってさ、いつまで保留なんだ？」

「俺に聞かれても知らねえよ」

「ああー林田さん、今日も可愛かったなあ」

テーブルに突っ伏すようにしながら、上条が呟く。

「おまえそんなことばっか考えてるとフラれた時のダメージが増すだけだぞ」

「縁起の悪いこと言うな！」

上条がバツと顔を上げる。子供の前でこいつが「いないいないばあ」をやったら確実に

泣くだらうな。パーツが日に日に濃くなっている気がする。もはや上条というよりフェルナンデス。

「早く返事欲しいんだけどよう、こっちから『まだか』って聞くのやっぱダサイ？」

「待って言った以上、ダサイだろう、それは」

「だよなあ」

「といってコーヒーをストローで吸う。」

「苦っ」

「いきがってブラックにするからだろ。シロップもらってきてやろうか」

「悪い、頼む」

こいつ正真正銘の阿呆だな。そんなことを改めて痛感しながら、シロップを持ってきてやる。

「で、オマエはどうなんだよ」

「何の話だ？」

「コイバナだっ！」

「何でそうなるんだ？」

「林田さんの話どうなったんだよ」

「もういい。コーヒーの苦みで吹っ飛んだ」

「めんどくせえ奴。」

「で、今度はお前の恋の悩みを聞いてやろうっていうやつだ」

「悩みねえよ」

自分で言うのも何だが俺は目移りが激しいんだ。それが悩みと言えば悩みか。

「ねえわけねえだろう、オマエの目は嘘を付かない」

「何言ってるんだオマエ。ジャポニカ学習帳か」

「ジャポニカ懐かしいな、ってそうじゃねえよ、何かあんだろ一つくらい」

「しつこい奴だな。」

「だからねえって」

「めんどくせえなあ。じゃあこっちから言うけど戸崎さんと実際どうなのよ？」

「は…どうって言われても」

「実名出されると困るんだよな。意識してしまう。」

「ほらなあやっぱり。オマエの目は嘘付かない」

「だからそれどんな目だよ」

「戸崎さんのことで悩んでるっていう目になってるぞ」

それはこの場から逃げ出したい目の間違いだぞ。

「別に悩んでねえよ」

「なんだよ順調なのか？」

「順調もクソもねえっての。ただの友達だろ」

「ただのではないだろ。他の女と明らかに扱い違うぞオマエ」

そうなのか？

「いやそんなことないだろ。ってか他に女の友達いねえもん」

「じゃあさあ、例えば戸崎さんが他の男と付き合うってなったらどう思う？」

「どう思うって…」

想像してみた。自分でも意外なほど、嫌だった。だがそれとこれとは話が違う気もする。というか戸崎に限らず、例えば橋本とか林田とかが他の男と付き合うのも想像したが、それも嫌だった。でも戸崎の場合とは少し違う。これは何と呼べば良いんだ？

「そうだな…少し寂しいかな」

「だろー！やっぱりそうだ」

上条の顔が輝く。うつとおしい。

「オマエ、戸崎さんに惚れてるんだぜそれ」

「だからさあ、んなこと言われても自覚ないんだけど」

それを無視して、上条が続ける。

「やっぱさあ、気持ちってのは伝えないとダメだよな。気持ち悪くないか？」

「成功率0%のオマエに言われたくはないけど」

「成功するかどうかじゃなくて、伝えたい気持ちを伝えるのが大事じゃねえか」

「そりゃ自己満だろ」

「どこが？」

本当に分からない顔をして上条がキョトンとしている。価値観の違いってやつか？

「相手だって迷惑かもしれない、って考えたことないのかオマエは」

「他人が何に迷惑するかとか、何が幸せとかって、俺にはわからねえじゃん。嫌な思いさせたら謝ればいいじゃん。だからそんなこと考えたことねえな。ってか他人がどう思うかこっちが勝手に決めるのって、失礼じゃね？」

なんだか凄い良いこと言われてる気がするが、上条だけに説得力に欠ける。

「まあいいよ、オマエの考え方は分かった気がする」

「そうか！じゃあ早速戸崎さんにアタックしようぜ」

「いやそれはだからちよつと違うんだよ。別に好きとかじゃないんだよなあ」

「いやオマエ絶対好きだから」

上条、さつき他人がどう思うか勝手に決めるのは失礼だとか言ってたじゃないか。俺に
関しては棚上げか。

「いや好きじゃない」

「好きだね」

「好きじゃない！」

そんな不毛な応酬を繰り返した後、なんとか上条には折れてもらって、ようやく解放された。帰り道、いつもより弱くペダルを踏んでゆっくりと自転車を走らせた。伝えるのが大事なのは結構グツと来るよな。でも伝えたいことがないんだよ。戸崎は好きな人ではない。もつと大切な気がする。壊してはならない関係というか。なんか難しいな。戸崎かあ。

結局その日は、上条に散々言われたせいとか、帰宅してからも戸崎のことばかりを考えるハメになった。だからダメなんだって。意識しちゃうから。

開け放った部屋の窓から吹き込む秋風が涼しい。だがその風が思考をまとめてくれるわけでもなく、澄ました感じのその風の匂いにすら戸崎を連想し、そんな自分に少々腹が立った。もちろん上条にはもつと腹が立った。

*

「ハッロー、ジャパ————ン！」

何がジャパンなのかわからないが、とにかく文化祭まであと三日と迫った時に、救世主が現れた。四月の定期演奏会でポップス・ステージを指揮したけやき坂高校吹奏楽部サックス・パートのOBにしてポップス大王、現役大学生、ファンクバンドも組んでいる滝本有理である。多忙のため指揮を振れない笹野が、部を心配して派遣したのだ。もちろんあらかじめ部には伝わっている。久しぶりに姿を現せた滝本は、以前の薔薇だのスパンコールだのと派手な服装と違い、全体的にモノトーンでキメており、少し見た目の印象が変わ

った。もちろんほとんどの一年生にとっては初めて見る人物であり、呆気にとられている部員も多い。

「滝本先輩、お忙しいところすみません。よろしく願います」

元氣いっぱいに音楽室に入ってきた滝本の下へ山上が駆け寄り、挨拶をする。

「おお山上、久しぶりちゃん！なんか部長っぽいねえ」

「いえいえ。先輩は相変わらずですね」

「そうか？今日は渋めでコーディネートしたんだけどな」

いや見た目の話じゃねえよ、とはさすがに山上も言えない。

「あと三日しかないんであんまりいじれないとは思いますが、宜しく願います」

「オッケー、大丈夫」

こうして滝本有理による特別合奏が始まったのである。

「金管もつとパリッとファンキーに！」

「ビートがねえぞパーカス！」

「上条エロさが足りねえ！」

相変わらずの指示ではあったが、時間がないことを知っているからか、簡潔に、なおかつ「カッコよくなる」ポイントをズバズバと指示していく。キャラはどうかと思うが、やはりええとこの大学生さんやなあ、頭ええなあ、と山上は思った。ちなみに山上は関西出身ではない。

正直、山上も、学生指揮の西堀も、たった一回の合奏でここまでサウンドが変わるとは思わず、滝本の凄さを再認識する形となった。やはり一つの方向を極めんとする者は強い。

「先輩、本当にありがとうございました」

合奏後、汗を拭きながら上条と談笑していた滝本に向かって、山上が礼を述べる。

「いやいやオッケーよ。にしても下手くそになったなあオマエら」

滝本は容赦ない。

「すみません」

山上にはそれ以外に返す言葉もない。

「いやいいんだよ、本番さえ上手くいきやオールオッケーだから」

それはさておき、と前置きをしながら滝本がカバンの中を探り、チケットの束を山上に渡す。

「明日ライブやるから。タダでいいから全員来いよ」

「はい？」

手渡されたチケットには「プラスロックナイト！」などと書かれている。いくつかのバンドが出るようだ。

「うちのバンドはメイプルシロップス」

「うおっすっげー、先輩トリじゃないすか」

いつの間にやら背後にいた拓也が興奮した声を上げる。

「まあプラスロックのバンドなんてそんなにいないから。うちもロックじゃなくてファンクだと思ってるし。うちのバンドだけ聴けばいいよ、他マジでクソだから」

「先輩ホントにバンドやってたんすね」

呆気にとられながら返す山上に、当たり前だバカ野郎、と蹴りを入れ、

「じゃりハあるから俺もう帰るわ。結構大事なライブだからマジで来れるヤツ来いよ」

そう言い残して滝本有理は去って行った。

「俺ライブ行きてえなあ」

「俺もー」

拓也と上条が、山上の手にあるチケットを覗き込む。

「バカ無理だろ。また今度にしろよ」

山上がチケットの束をズボンのポケットにねじ込んだ。

「えー、いいじゃんか別に」

なおも食い下がる拓也だったが、

「クラスの出し物の準備もあるし、文化祭に真面目に取り組んでる部員もいるだろ。上級生が夜遊びしててどうすんだよ本番前に。また分裂するぞ去年みたいに」

そう言われると、昨年の悪夢が蘇る。また中本が机を蹴り上げるハメになるかもしれない。

「先輩にはまたの機会にチケットもらってやるから」

山上に諭されて、拓也も上条も今回はおとなしく引き下がることにした。そして山上はチケットの存在を部員に公表することなく、こっそりと自宅に持ち帰り、捨てた。滝本に申し訳ないので、また機会があれば次は行ってみようか、と思いながら。

けやき坂高校の文化祭の日がやってきた。今年も校門には文化祭の運営委員と美術部の手によるウェルカムゲートが掲げられ、多くの地域住民や近隣の学校の生徒がその門をく

ぐった。その中には瀬野川高校の部員も多く、吹奏楽部の篤子と、同じく吹奏楽部でコンクール終了後から部長の座に就いている大二郎もいた。

ただ二人は今日には行動していない。特に別行動を取る理由はないが、初めに篤子に声をかけてきたのが同じトロンボーンの大城咲子だったからそうだっただけだ。篤子は咲子と一緒に見に行くことになり、その代わりと言ってはなんだが、けやき坂の野崎から誘われていたトランペット一年の佐藤が大二郎を誘い、それぞれ別行動となってしまったわけである。

篤子から、「けやき坂のポップスは一度聴いておいた方がいい」と言われているだけに、大二郎も今日のステージを楽しみにしていた。

瀬野川高校の文化祭は一週間前に終わっていた。二人の吹奏楽部顧問の間にはいつの間にか約束事が出来ていて、ポップスは田口ではなく山之内が振ることになっており、文化祭では全編山之内が指揮をしたのだが、これがなかなかひどかった。山之内も別にポップスが得意な訳ではない。そんなこともあり、瀬野川の吹奏楽部員は、今日のけやき坂の文化祭を、楽しむというよりも勉強気分を訪れていたのである。

ダンス部の前座扱いという吹奏楽部の立場は例年と変わらず、今年も吹奏楽部の出番の際には最前列は次のダンス部目当ての男子たちでビッシリと席が占められている。

今年の吹奏楽部のステージは、歌あり踊りありで昨年よりも賑やかだったが、篤子は何よりやはりサウンドに驚いてしまう。もちろん直前に滝本による集中合奏があったことなど知る由もない。

なぜけやき坂は、年度初めの定期演奏会から、急にポップスが上手くなったのか。定期演奏会の時には滝本有理という人物が指揮をしていてそれが影響しているのは分かったが、今日指揮をしているのは西堀だ。にも関わらず、やはりけやき坂のポップスは瀬野川のそれよりも数段良い。上条のソロも妖艶で、このような音を出すサクソフオーン奏者は瀬野川にはいない。

大二郎もまた、篤子と離れた席で驚いていた。コンクールではへっぴこだったバンドと同じバンドとは思えない。特にトランペットのファンキーさに耳が行く。この音は瀬野川には出せない。

だが、出せないからと言ってそのままにしておくことは、部長としてのプライドが許さない。そもそもそのファンキーなけやき坂のトランペットを率いているのは、自分と同じ

くトランプで部長も務めている同学年の人物なのだ。負けるわけには行かない。かといって自分たちだけではどうしようもない。大二郎は、悔しいながらも現状を受け止め、心を決めた。

*

「先生、ご相談があります」

けやき坂高校の文化祭が終わった翌日の放課後、大二郎は職員室の隅っこでホットコーヒーをすすする田口の下を訪れた。

「どうした部長」

冷やかすように田口が返す。

「部長はやめてください」

「やめないよ、部長オマエだもん」

田口先生は意地が悪い、そう思いながら大二郎は相談を続けた。

「けやき坂高校にポップスの合同練習を申込みたいと思うのですが」

「はあ？」

さすがの田口も何言ってんだコイツ、という顔で大二郎を見る。

「昨日、けやき坂高校の文化祭に行ってきました。吹奏楽部のポップスはうちより上です。それが僕には許せません。合同練習を申し込んででもあのバンドのエッセンスを取り込みたいです」

大二郎の目は本気度が過ぎるのか、血走っているような勢いだ。この部長は熱血の伝統なのか？フーツと溜息を付いてから、

「山之内先生エーツ」

と、離れた席で事務処理をしていた山之内に向かって田口は呼びかけた。

「何です？」

山之内は席上から応じる。

「すみません、ちょっとこっち来てもらえますか」

職員室には他にも多くの教員がいる。大声で部活の話をや取りする場ではない。はいはい、今度は何ですか、と眩きながら山之内が田口と大二郎の間に入る。

「部長が、うちはポップスが下手なのでけやき坂の練習を盗みたいと言いましてね」

「そ、そんな言い方はしてません」

ストレートすぎる田口の物言いに、慌てて大二郎が訂正する。しかし主張している内容に変わりはない。

「なるほど、山之内にポップスは任せておけないところかな」

山之内がひがんだように言う。

「いえ、そういう訳では…」

なんちゆう大人たちだ。高校生をいじめてそんなに楽しいのか。

「山之内先生、どうします？」

焦る大二郎を無視して、田口は山之内と相談を始める。

「今度の地区音楽会でも、次の定期演奏会でもポップスは外せませんしね。けやき坂ってそんなにポップス安定してましたっけ？」

確かに春の定期演奏会ではポップスが良かったが、それ以前は特にポップスが上手いという印象は山之内にもない。

「郡君、それって効果あるの？」

山之内が大二郎に問いかける。

「どれほど効果があるかは分かりませんが、生徒だけでやっているとしたらうちでも取り入れられる練習法があるのではないかと思います」

何しろ情報は昨日聴いた文化祭だけだ。大二郎としても情報量は不足している。

「田口先生はどう思います？」

「山之内先生さえ良ければ、良いと思いますよ。ちよつと僕の方から根回しが必要になります」

心なしか、田口の顔は嬉しそうだ。

「なるほど。で郡君、それって部の総意なの？」

痛いところを突かれた。勢いで来てしまったのでまだ部の意見は聞いていない。

「いえ…まだです」

「そういうのは部の総意を得てから来るもんだけどね」

山之内がチクリと刺す。まだまだ郡は部長としては駆け出しだ。色々と教えていかねばならない。

「すみません」

郡が痛恨の極み、と言わんばかりの表情で頭を下げる。

「まあでもこういうのはトップダウンで行った方が良いかもしれません」

田口が口を挟む。

「確かにそれもありますね。まあ不幸中の幸いという形にしてみますか
やれやれ、といった表情で山之内は郡を見やる。

「山之内先生にお願いしたい部分と、僕の方で手を回しておきたい部分があるのでまた後
程相談しましょう」

田口がまとめて、とりあえずここまでの話を郡から部に伝えることで話がついた。

「ご迷惑をおかけします」

と、さほど迷惑をかけているつもりでもない表情で言い放ち、大二郎は職員室を後にし
た。

「田口先生、良いんですか？地区音まであんまり時間もないですけど」

山之内が心配そうに田口に尋ねる。

「今のけやき坂のポップスの心臓部分は滝本って男が握ってましてね」

田口は楽しそうに答える。

「あいつさえ協力してくれたら、かなり色々学べると思いますよ。ぜひ山之内先生も引率
として参加して来てください」

「私ですか？」

面倒くさそうに山之内が返す。

「定期演奏会ではまたポップスお願いしますから。滝本から色々盗んでみてください」

「滝本さんは協力してくださいさるんですか？」

「滝本が指導しないんだったら、この話は無しにしましょう」

そんなに凄いのか、滝本という人物は。

「その滝本さんて、滝本かえでのお兄さんですよ。この前のけやき坂高校の定期演奏会
で指揮をされていた。まだ若いんじゃない？」

定期演奏会での滝本の指揮はただ踊っていただけのようにも見え、山之内にはまだ不安
が残る。

「大学生です。若いから生徒と相性が良いってのもありますね。ただあいつはキレ者です
から。状況に合わせてちゃんとやってくれますよ。妹に借りもあるようだし、たぶん都合
付けてくれるでしょう」

コーヒーをすすりながら、田口はのんびりと答える。

「取り急ぎこっちで滝本と連絡を取ってみますから、そのあとで山之内先生からけやき坂に練習の申し込みをお願いしますね」

「わかりました。ここは田口先生と郡に乗りましょう」

田口の頑固さはこの半年で結構身に染みている。

「ところで山之内先生、郡はどうです？部長として」

合同練習の話はもう終わりらしい。

「まだ代替わりして一ヶ月ですからね。まだまだわかりません」

「そういうもんですか」

「そういうもんです」

学生を相手にしていると、時の流れの速さを痛感する。もう部には滝本かえでたち三年生はいない。

「何だか久しぶりにタバコが吸いたくなってきました」

田口は随分と前にタバコを止めている。

「僕の吸います？」

山之内が自分のタバコをスツと差し出した。職員用の喫煙所の椅子に腰かけた二人は、黙々と煙を吸っては吐いた。それぞれに、代替わり後のこの時期、思うところは色々ある。沈黙もまた会話である。

*

「合同練習ですか？」

文化祭後に特にもめごと何もなく、地区音楽会へ向けて練習をしていたけやき坂高校吹奏楽部が集まる音楽室に、久しぶりに笹野滋が顔を出した。合奏の様子見もあつたが、本来の用向きは、瀬野川高校との合同練習についてだ。

「まあうちより格上のバンドから直々のお願いだからな。話を受ければこっちにもメリツトがあると思う」

「うちはまあ、上手いバンドと一緒に練習できれば色々効果もあるでしょうけど」

合奏終了後にその話を持ちかけられた山上だったが、どうも瀬野川の意図が読めない。

「ただし、指定はポップス曲で、滝本先輩の合奏付き、ということなだけだね」

自分はお呼びでないところが、そして何よりあの滝本を指名して来た辺りが、笹野にと

っても面白くはない。ただ滝本が振らなかつたときのけやき坂、特に学生指揮の西堀の出来具合がどうにも不満なので、是が非でもこの話には乗りたかつた。

「一応、滝本先輩はOKらしい。あとはオマエらが乗るかどうかなんだけど」

田口から前もって打診されていた滝本は、何か考えがあるのかないのか、渋々ながらも承諾したのだという。

「うちと練習したいって言うより滝本先輩の指導を受けたいってところですかね」

山上は勉強は出来ないが馬鹿ではない。情報さえ与えられればだいたいの状況は予想が付く。

「本音はそうだろうな。建前上は、この前の文化祭を聴いて感動しました、ってことになってるが」

文化祭については笹野も状況を把握している。実際にこっそりと吹奏楽部のステージだけ見に行ったが、明らかに滝本の指導がうまく入った音だった。そして指揮者の西堀とバンドの息は全く合っていなかった。誰も西堀のことは眼中にないような演奏で、それはそれでまとまっているという塩梅であつたから、地区音楽会をそのまま西堀に任せて良いものか、笹野にとつても悩みどころとなつていたのである。滝本の指導が無ければ、このバンドにポップスは吹けない。そんな不安がある。

「曲は何やるんですか？」

内容によっては、西堀の合奏では地区音楽会の合奏もなかなか上手く行っていないけやき坂にとつて、貴重な一日を潰してしまうことになる。

「一応話が回ってきたときに俺から田口先生に交渉してみたら、オーメンズ・オブ・ラブでいいってさ」

T・SQUAREの「オーメンズ・オブ・ラブ」の吹奏楽編曲版は、地区音楽会でけやき坂高校が演奏する曲だ。そして瀬野川が文化祭で演奏した曲でもある。

けやき坂にとつては再び本番前に滝本の合奏が入ることになる。瀬野川にとつても自分たちの改善点を見つけやすい。どちらにとつても都合の良い選曲だった。

「場所はうちでいいんですか？」

けやき坂高校から楽器を運び出すのはなかなか面倒なので、出来ればこっちの音楽室で練習できるのが望ましい。

「もちろんこっちでやってもらおうようにしたよ。楽器は向こうのほうが多いし場所も広いけど、なんか割に合わんだろ」

「だったら、いいんじゃないでしょうか。休日練にしますか？」

山上も話が早い。あまりこの手のことで悩む性格でもない。

「そうだな。滝本先輩のスケジュール次第だけど、休みの土曜か日曜がいいだろうな」

「滝本先輩には僕から相談したほうがいいですか？」

「まあその方がいいだろうね」

こうして意外とあっさり合同練習を行うことが決定した。山上と滝本の相談の結果、早い方が早いということで練習は次週の日曜日となった。また、合同練習には瀬野川からは山之内、けやき坂からは笹野滋が立ち会うこと、音楽室のスペースの都合上、瀬野川からは各パートの選抜メンバーで参加することが決まった。

またもや吹奏楽部の事情で休日出勤するハメになった顧問の笹野次郎にとってはいい迷惑だったが。

「おー見えてきた。なんか緊張すんなあ」

合同練習の日、瀬野川の一行はけやき坂高校の校舎が見える辺りまで来ていた。

「別に緊張する必要ないんじゃない、指導受けに行く立場なんだし」

篤子が大二郎に返す。瀬野川からは、引率の山之内以下、パートリーダーを中心に二年生のうち十数名と、それに加えて一年生からはトランペットの佐藤直弘ほか数名が選抜された。これがけやき坂高校の音楽室ではギリギリの人数だろう、と田口が選抜したメンバーだ。

「滝本さんって、かえで先輩のアニキなんだろ。やっぱ厳しいのかな」

「さあねえ。アタシも会ったことないからわかんない」

「でも滝本さんて渋谷とか下北沢でもライブやってるんだよ」

篤子と大二郎の会話に食い込んできたのは自称情報通の大城咲子だ。

「咲子ってなんでそんなことまで知ってるわけ」

まったくこの半年間、様々な場面で篤子は咲子に驚かされている。

「人脈って大事よねー。あ、バンド名はメイプルシロップって言うんだけど、かえで先輩の名前からとったらしいよ。かえでって英語でメイプルじゃん」

「ホント、何でも知ってるねアンタって…」

そしていつものように、篤子は段々と呆れ顔になってしまう。

「ライブ行ったらかえで先輩とたまたま遭遇してさあ」

「え何ライブ行ったの!!」

「行った行った。徹底的に調べないかね。実際に体験しないと得られない情報もあるわけよ」

平然と言ったのける咲子であった。

「ロックスターみたいだったよ。凄い人気で。ああ楽しみだわあ」

なるほど、実際にライブハウスに出ちやうような人がポップスの指導したらそりや上手くなるわな、と山之内の後頭部を見ながら篤子は考えた。山之内先生はクラシック一辺倒だからなあ。無理だよなあ。

やがて一行が正門まで来ると、二人の若い男性が彼らを待っていた。片方は私服で片方は制服である。

「瀬野川高校の吹奏楽部さんですか？」

私服の男が山之内に声をかけた。吹奏楽部の関係者だろう。まだ若い学生のようなから顧問ではなさそうだ。

「ええ、遅くなりまして申し訳ありません。顧問の山之内と申します」

「いえいえ、とんでもない。今年けやき坂の吹奏楽部の指導をしています笹野です」

「おや笹野さんと言えば顧問の先生も笹野さん…」

「顧問の笹野は僕の叔父なんです。僕はただの吹奏楽部のOBですよ。今日はよろしくお願いたします」

随分しつかりした若者だ。

「こちらこそ、お忙しいところ無理を聞いていただきまして、ありがとうございます。どうぞよろしくお願いたします。ところで滝本さんは…」

「滝本先輩、いや、滝本は音楽室にいますよ」

「そうですか。合奏前にご挨拶出来ますか」

「もちろん、構いませんよ。ちよつと変わった人間ですが、ご容赦ください」

双方の代表者が簡単に挨拶をしている間、山上は篤子を見つけて軽く声をかけた。

「よう宮内」

「よう」

なんだそのフランクな感じは！思わず嫉妬してしまう大二郎であったが、すぐにそれを恥じる。彼氏のくせに嫉妬とは器が小さい。平常心だ平常心。

「部長さんですね？」

急に自分に話しかけられ、大二郎は一瞬体を固くする。なかなか「部長」と呼ばれるのに慣れられない。てか何で俺が部長だって知ってたんだ。大城といい、情報持ってるヤツは怖い。

「あ、郡です。よろしくお願いします」

「部長の山上です。よろしくお願いします」

お互いに頭を下げる。てかこの人部長だったのか。まあ出迎えてくれるぐらいだからそうだよな。それにしても柔らかい雰囲気部長だ。ビシツとしてないというか。他人事ながら、大丈夫なんだろうかけやき坂。

そして一行は山上の先導で、けやき坂高校の校舎へと入って行った。

中から笑い声などが聞こえ和気藹々ムードの音楽室の扉を山上が開けると、声が止み多くの視線が一度に扉の方を向いた。

「じゃあ、えーつと、とりあえず、きりーつ」

山上の号令とも言えない号令に、ぞろぞろと部員が起立する。何とも言えない空気の中に、瀬野川メンバーが入れられる。

「はい、瀬野川高校の皆さんです。今日一日、お互いよろしくお願いします、れーい」

「よろしくおねがいします」

けやき坂の号令も挨拶も、瀬野川に比べると格段に緩い。思わず大二郎はこけそうになった。

「ではパート・リーダー、瀬野川さんの席を案内してあげてください。瀬野川の皆さん、各パートのところへお願いします」

「ソッコー！」

山上と違いスピード感のある大二郎の号令に、瀬野川の生徒は一気に散らばる。パート・リーダー同士が挨拶をしたり席決めをしたりしている間に、ピアノに寄りかかってその様子を半笑いで眺めていた男の下へ、山之内は急いだ。

「滝本さんですか？」

「はい？」

キャピキャピの女子高生鑑賞タイムから急に現実に引き戻された滝本は思わず変な声を出してしまう。

「先輩、瀬野川高校の顧問の山之内先生です」

笹野が紹介する。

「ああ、これはこれはわざわざどうも。妹がお世話になりました」

「いえいえ、妹さんは手のかからない生徒さんでしたので、むしろこっちがお世話になったくらいで。今日は滝本さんもお忙しいところ、ありがとうございます」

「いやいや僕はただの学生なんで、時間は余ってますから、ははは」

さすがの滝本も大人に向かって「ハロージャパン」などとは言わない。アルバイトもしているライブハウスのスタッフとのやり取りも多く、大人の世界にも慣れている。

「今日のメニューですが、僕は地区音の本番の指揮はしないので、初めは学生指揮の合奏でもいいですか？僕もこの曲の合奏見るのは初めてなんで」

「今日は滝本さんにお任せしますよ」

「ではそのようにします。まあガマン出来なくなったらすぐに出ていきますよ、ははは」
さて何分ガマン出来ることやら、と笹野は心の中で毒づいた。

やがてパート割も決まり「オーメンズ・オブ・ラブ」の合奏が始まった。大二郎は山の隣、篤子はけやき坂の一年生ながらトロンボーン・パートのパート・リーダー、さくら桜井さちの隣に座った。大城咲子はその二つ隣だ。一年生の佐藤直弘は、同じく一年生の野崎の隣で吹くことになった。

西堀があれやこれやと指示を飛ばしながら合奏を進めていったが、椅子に腰かけ笹野と山之内の隣で合奏を見守っていた滝本は、早くも貧乏ゆすりを始めている。そして西堀が指示を飛ばす度に、小さく「チッ」と舌打ちをするのであった。山之内も気が気ではない。まだ合奏開始から十五分である。

大二郎や宮内もまた、心の中で舌打ちをしていた。西堀から指示が飛んでも、全然サウンドが良くならぬではないか。これではわざわざけやき坂まで来た甲斐がない。正直、ポツプスに明るくない山之内の方が数倍マシンな指示を出す。また言葉のひとつひとつが何故だかカンに触る。西堀には指揮者適性が無いように思えた。

笹野もまた、同じことを考えていた。悲しいかな、色々とこれまで指導もしてきたが、西堀は圧倒的に求心力に欠ける。指揮法もスコアの読み方もなっていない。来年のことを考えると、学生指揮に関しては早めの代替わりを考えたほうがいいかな、とまで思ってしまうのである。

「スト————ッブ！」

皆がそれぞれ限界を感じた頃、滝本が立ち上がって叫んだ。部員も笹野も山之内も、一瞬ビクツとなって一斉に滝本の顔を見る。そこには先ほどまでの大人の世界向けの顔はなく、いつもの滝本の顔があった。

「西堀、クビだ！どけ！」

「えっ、あの」

抵抗しようとした西堀を右手一本で手荒く指揮者台から払いのける。山之内は軽く顔をしかめた。教師があんなことをしようものなら大問題だ。

「ただいまのタイム二十分」

笹野が時計を見て小さく呟いた。

「オッケー、エブリバディ！」

そしていつもの滝本の合奏が始まる。瀬野川の生徒は呆気に取られている。しかし滝本が指揮を振りだした途端に、けやき坂のサウンドが変わる。瀬野川の生徒は付いていくだけで必死だ。

「おい山上の隣のオマエ、たらっと吹いてんじゃねえ！」

滝本は声も大きい。思わずビクツとして、

「す、すみません！」

と大二郎は謝った。

「謝らなくていいからバシッと吹け！」

「ハイ、すみま」

「おしゃ今のところワンモア！」

そして滝本の合奏はスピーディーだ。二度謝る時間など与えない。その後はもう少し具体的に細かく指示を出しながら、ガンガンと合奏を進めていく。けやき坂のメンバーは滝本の指示に忠実に演奏を変えていく。そしてそれに瀬野川が喰らいつけば喰らいつくほど、全体のサウンドはまるで生き物のように躍動感に満ちてくるのである。

(すごい…)

冷房の効いた音楽室で、篤子はうっすらと汗を浮かべていた。ポップスがこんなに大変で、指示次第でこんなにもサウンドが変わるとは思っていなかった。これがけやき坂のポップスの秘密か。隣で吹いている桜井は、まだ一年生にも関わらず涼しい顔で見事なポッ

プスをキメている。ポップスの、というより滝本の求めるサウンドには、桜井のほうが篤子よりもマッチしている。何より滝本のポップスを理解して吹いているというのが手に取るように分かる。負けたくはないが、しかしポップスに関しては篤子は桜井に劣ると認めざるを得ない吹きっぷりであった。

笹野は目を閉じて、じつくりと二校の音を聴き分けていた。瀬野川はさすがに対応が素早い。技術的にけやき坂より上なのはすぐに分かる。合奏が進むにつれ、瀬野川はあつという間にけやき坂に追いつき、今では二校のサウンドはほぼ一つになり、パートによってはけやき坂が瀬野川を追いかける展開になっている。

そんな中でもズバ抜けて一人勝ちをしている音を笹野は聴き分けた。コンクールで聴いたあの瀬野川のトロンボーンよりも激しく躍動する桜井さちの音だ。クラシックな作品ではさほど目立たず、粛粛とこなしている印象の桜井だが、こんなにポップスで群を抜くとは思わなかった。

合奏開始から一時間が経過したところで、一旦休憩が入った。

「いやー面白いじゃん、合同バンドも」

汗を拭いながら滝本が笹野と山之内の下へ戻ってくる。

「相変わらず擬音が多すぎですね先輩の合奏は」

「ガキにはわかりやすいだろ？」

笹野の棘にもひるまない。それが滝本である。

「いやはや、刺激的でした」

山之内が感想を述べる。

「まあ違う学校とは言え同じ学生さんですし、いつも通りにやらないと公平じゃない気がしまして。参考にならない指揮で申し訳ないですが」

「いやいや、大変参考になります。生徒目線というのは大事ですな」

「ガキ目線、くらいの気分のほうが気楽ですよ？」

滝本が少し悪そうな顔をして山之内をけしかける。

「いやあ、何分これでも教員ですから。生徒をガキなんて呼んだら親御さんからクレームですよ」

「センセーってのは厄介な仕事ですね」

滝本の言う「厄介」には「つまらない」という意味も含まれていた。それを感じ取ってか、

「まあでも、面白いですよ、色々」と

笑顔で返す山之内は、やはり大人なのであった。

「一通り指示も出したんで、とりあえず僕の合奏はこれで終わりにしますね」
「え？」

滝本が急に違う話にもっていったので、山之内も一瞬状況が読めなくなった。

「うちは本番、学生が振るんですが、さっき西堀クビにしたんで新しい指揮者を試さないといけないので」

「あ、はあ…さっきの子はクビですか…」

冗談だと思っていたが本当にクビにするとは、ドライすぎないか。生徒の気持ちは。山之内はそんなことを考えてしまう。

「笹野ちゃん、どう？」

山之内を放置して、滝本は笹野に問いかける。

「まあ西堀には向いてないでしょうね。でも今この場で指揮者決めるのは難しいんじゃないですか？」

「いいじゃん決めちゃえば」

滝本有理はどこまでも自由である。

「誰がいいかなあ」

「ちよ、ちよっと待ってください！」

滝本が話を進めようとしたとき、当の西堀が三人の下に駆け寄ってきた。

「私、指揮辞める気ないんですけど」

「うるっせえな、オマエじゃ無理だっつってんの」

滝本は容赦ない。何かを言いかけた山之内を笹野が制する。

「うちの部のことですから」

そして西堀を音楽室の外へ引っ張り出した。

「なかなか…激しいですね」

強引に西堀を連れて行った笹野の後ろ姿を見送りながら、山之内が誰にともなく呟く。

「あ、大丈夫ですよ笹野は僕と違って理詰めでやっつけちゃいますから」

何とも言えない表情を浮かべる山之内に、滝本はそう声をかけた。

「年頃の女子生徒に理詰めが通じますかねえ」

「通じなかったことでもあったんですか？」

「そりやあまあ、若いころはね。しょっちゅうでした」

遠い目をする山之内の横顔を見ながら、

「センサーって厄介ですね」

と、もう一度滝本は言った。

「笹野先輩、滝本先輩に何とか言ってくさいよ」

「無理だな」

「なんでですか！」

笹野の突き放した態度に、思わず西堀も激高する。耳をつんざくような声が廊下に響く。

「なんでか自分で分からないからだろ。申し訳ないけどオマエに本番の指揮なんて任せられない。指示も的外れ、スコアも読めてない、指揮法もなっていない、おまけに上から目線で喋る。全然無理だね」

笹野はさらに突き放す。冷静に事実を述べているだけなのだが口調は優しくない。

「そんな、完璧にやるのは無理ですよ！私は私なりに一生懸命やってるんですよ！」

「本当に一生懸命やってアレなら、マジで無理だ」

理屈では意向が覆りそうもない。西堀は感情に訴えかけるしかなかった。

「私は、指揮者になりたいんです！だから今のうちから…」

「へえ、初めて聞いたなそんな話。音大でも行くつもり？」

「そうです！」

よし、笹野が少し喰いついてきた。

「音大ね。指揮科か。俺と同じ目標だな」

「そうなんです！私笹野さんみたいになりたいんです！」

笹野が露骨に眉をひそめた。

「なんでまだ音大生でもない俺を目指してんの」

「え…」

「そんな低いところ目指してるやつに、やっぱ指揮なんて無理だろ」

返す言葉が見当たらない。

「俺は客観的に見て、無理だと言ってるの。音大は止めたほうがいい。普通に進学でもしてろ」

もうこれしかない。言うしかない。玉砕覚悟で。

「私、笹野先輩のことが好きなんです！だから一緒に音大行って、一緒に勉強して…」
「ふざけんなバカヤロウ！」

廊下中に笹野の怒号が轟いた。おそらく音楽室内にも聞こえているだろう。

「そんなチャラついた理由で音大とか言ってるんじゃねえ、こっちはマジでやってんだぞ！」
こんなに感情的に怒る笹野を見たのはコンクールの練習以来だが、あの時とは怒りの種類が違う。西堀は足がすくんで何も言えなくなった。

「そんなヤツに好きになられても迷惑だ。忘れる」

再びいつもの冷静な口調に戻った笹野だったが、言っていることは酷い。

「そんな…どうしたら嫌わないでもらえますか」

もう他のことはどうでも良く、ただ笹野には嫌われたくなかった。チャンスは残しておきたい。

「俺とオマエが付き合うことは一生ない。ただ、嫌われたくないんだったらサックスの練習にもっと力を入れとけ。そっちはまだ見込みがある」

付き合うことは一生ない。正直、ぶっ倒れそうである。

「今日…もう帰ってもいいですか」

もう無理だ。やる気も何にも残っていない。

「駄目だ。合奏に参加しろ」

しかし笹野はそれを許さない。

「でも」

「オマエ二年のくせに甘えんなよ。頼むからもう怒鳴らせないでくれ」

疲れたように言い残し、笹野は音楽室へと戻った。

「…ざっけんなよ」

一人残された西堀は、そう呟くと駆け出していた。部室へ自分の楽器を取りに行くためだ。甘えてねえよ。オマエなんて二度と好きにならんからな、後悔させてやる笹野！

かくして危険分子が新たに生まれたものの、ひとまず指揮者降ろしは上手くいったわけである。

「笹野ちゃん、こっわーい」

「すみません、怒鳴るつもりはなかったんですが」

音楽室に戻ると、瀬野川とけやき坂の部員の視線が一斉に注がれるのが分かった。まあ仕方ないだろう。そしてその緊迫した雰囲気を変えようとしてくれている滝本には頭が上

がらない。

「大丈夫なんですか？」

山之内が恐る恐る尋ねる。他校の事情だけに踏み込んでいいものかためられるが、教員という職業柄、少々気になるところでもある。難しいところだ。

「これはとんだ醜態をお見せしてしまいました。でも大丈夫です。しばらくしたら彼女も合奏に参加するはずですよ」

「そうですか…」

まだ心配そうな山之内の表情を見て、笹野はつとめて冷静に、一言付け加えた。

「こういう部活なんです、昔から。問題児だらけなんですよ」

俺もそうだったしな。サックスから厄介者が生まれるのは部の伝統かもな。そんなことを思い、少し笑みがこぼれた。そんな笹野の表情を、山之内は怪訝な顔で見ている。

「で、指揮者どうすんべ」

滝本はもう何事もなかったかのように、サツサと話題を切り替えた。

「先輩はどうです？振ってて、コイツだ！つてヤツいたんじやないですか？」

「俺から先に言うの？そういうのは笹野ちゃん決めなよ」

と言いながらも、滝本の視線はトロンボーンに向けられていた。

「やっぱりそうですよね」

呟きながら、笹野は桜井さちを呼んだ。

「な、なんででしょうか…」

桜井はパート・リーダーではあるがまだ一年生でもあり、笹野と話すのも慣れていない。

「桜井、地区音の指揮、君にやってもらいたいんだけど」

「はいイイイ!!」

思わず大きな声が出て、背中越しに部員の視線を浴びる。やりづれえーよ、西堀さん降ろしてアタシって、それやりづれえーよ！

「ま、ものは試しでさ。ダメそうだったらまた変えるから気楽にやってみなよ」

滝本にそう言われるとまあそんなもんかな、とも思うがやっぱりやりづらい。しかしそんな桜井のやりづらさは無視して、笹野が指揮者台に登りパンパンと手を叩いた。生徒が一斉に笹野に注目する。

「滝本さんの合奏はさっきの時間で終わり。これから試しに桜井に指揮を振らせてみるから、皆、桜井の指示に従うように」

「ハイ！」

威勢よく返事をしたのは瀬野川高校の部員だけである。けやき坂の部員は呆気に取られている。

「オイ、大丈夫か」

中本が振り向いて山上に声をかける。

「わからん」

山上にとっても未知の世界だ。ただひとつ、何かまた気苦労が増えそうな予感がして、思わず「だりい」と言ってしまうそうだった。

「け、けやき坂のトロンボーン一年、桜井です。よろしくお願いします…」

おいおい大丈夫かよ。なんでそんなにオドオドしてんだよ。山上は気が気でない。しかし指揮棒を構えた瞬間、桜井の身体から強烈な熱風が吹いたような錯覚を覚えた。明らかに人が変わった空気がビンビンと伝わってくる。山上は慌てて楽器を構える。

冒頭、数小節の後、テンポが一気に上がる瞬間、その空気はバンド全体に伝わった。

「ワン、ツツ、スリッ、フォッ！」

今までけやき坂の部員ですら聞いたことのないハリのある声でカウントを出した桜井は、その後もビートの効いたタクトさばきでグイグイとバンドを引っ張っていく。

「そこー！パーカスたるまない！」

合間には滝本ばりの指示まで飛ばしてくる。こんな子だったっけ？山上は不思議でしよ
うがない。他のけやき坂の部員も驚いたのか、滝本の合奏以上に必死に彼女に付いていく。

「上条先輩もつと歌ってー！」

上級生にも容赦がない。そんな桜井を見て、思わず笹野と滝本は目を合わせ、二人して
ほくそ笑んでいるのであった。

「はあ…はあ…す、すみません、色々ご無礼を…」

指揮棒を置いた途端にこれである。けやき坂の部員も瀬野川の部員も、呆気に取られる
しかなかった。ただ、彼女のポップス特性は皆が認めるところであり、隠されていた才能
が見事に開花した瞬間でもあった。

「ブラボー！」

いつの間にか合奏に参加していた西堀が惜しめない拍手を桜井に贈る。その拍手にも表
情にも何の嫌味も感じられなかった。素直に負けを認めた、清々しい顔だ。他の部員も続

いて拍手を送る。

「さっさんすげー！」

などと一年生はとりわけ盛り上がった。

「なあ、オメエ桜井さんが指揮振れるって知ってた？」

再び中本が振り返り山上に尋ねる。

「知るわけねえだろう」

山上に限らず、おそらくけやき坂の部員、全員が知らなかったことだ。桜井がこんなにポップスの指揮が上手いとは。なんにせよ、部にとっては嬉しいオプシオンが増えたということだ。

その後の時間をまるまる桜井の合奏に割き、合同練習は終了となった。笹野、滝本、山上、中本、西堀、桜井の間で簡単な打ち合わせがあり、地区音楽会の本番も指揮者は桜井でいくことが正式に決まった。

「まじかよ…」

ポップスを振れるのは嬉しいが、どちらかといえば吹いているほうが楽しい。何より結構な重圧だ。楽器をケースにしまいながら思わず俯き呟いた桜井の目に、来客用のスリッパが映った。顔を上げると、合奏時に隣で吹いていた瀬野川のトロンボーン、宮内篤子が立っていた。

「お疲れ様」

「あ…どうも…今日はありがとうございました」

桜井は深々とお辞儀をしようとしたが、両肩を掴まれて無理やりに上体を起こされた。

「ありがとうはこっちだから。あんた、本当にポップス上手いねー！吹くのも振るのも」

篤子の顔はやけに嬉しそうだ。桜井は思わず「魔女の宅急便」に出てきたパン屋のおかみを思い出してしまふ。

「いえいえそんなことは…宮内さんのお話しはよく伺っていて…今日は隣で吹けて、色々勉強になりました」

「それもこちらこそ。正直あたし我ながら結構イイ線いってると思ってたんだけど、久々に打ちのめされちゃった。あたしはポップスはまだまだ全然ダメだなあ」

実際に桜井もそう思ったので、何と返していいか分からずアワアワしている、

「いいよ氣イ使わなくても。でも本当ありがとね、刺激になったから。今日は来てよかった」

優しい笑みを湛えて篤子が改めて礼を述べた。

「俺もそう思う」

「わっ」

横からのそつと女子の会話に割り込んだのは大二郎である。

「笹野さんたちにはさつきお礼を言ってきたけど、部長として君にもお礼を言わないと。

今日はありがとうございました」

大二郎は深々とお辞儀した。

(カッコイイ…)

桜井は思わずボオツとしてしまう。背良し、顔良し、声良し。

「アンタも相手が他校とはいえ一年生にそこまで言えるなんて、成長したわねー」

篤子が茶化す。

「うるせえな。そろそろ皆帰るぞ」

無然とした声だが、顔は怒っていない。

「オッケー。じゃあね桜井さん。また今度」

「ではまた」

振り向きながら揃って桜井に手を振り、二人は瀬野川の生徒が集まる一角へと去って行った。その二人が付き合っているということを、桜井はその日のうちに拓也から聞いた。

お似合いの二人だと思った。あんな感じの距離感が、うらやましいとも思った。

山上、笹野、滝本が瀬野川高校の面々を校門まで見送り、戻ってくるまで、けやき坂の部員は音楽室で待機となった。

「いやそれにしても桜井さんすごいな」

椅子を後ろにユラユラさせながら中本が呟く。すでに楽器はケースに片付け終わっている。

「マジですごいよ。名指しされたとき変な汗かいたって」

ピアノの脇にあるヒーターの上に座りながら上条が答える。

「車のハンドル握ると性格変わるとかいうのと同じじゃねえの」

ピアノにもたれかかりながら他人事のように拓也も返す。

「てか上条またストラップしまい忘れてるぞ」

「ぬお、またかよ」

心底かつたるように上条はネクストラップを外す。サックス・パートのネクストラップしまい忘れは日常茶飯事だ。一年生や上条、小島はともかく、しっかりしていそうな西堀や村田、そして聡子ですら忘れる。

そんな調子でなんとなくヒマな空気が漂っている中、山上が音楽室へ戻ってきた。一人である。

「あれ、先輩たちは」

中本が尋ねる。

「ああ、先帰った。荷物持って出て行ったの見てなかったのかよ」

「気付かねえべそんなの。それよか一言くらい欲しかったな」

「一言なら預かってるから大丈夫」

不満そうな中本をいなして、山上は指揮者台に登った。部員の視線が山上に集まる。

「えーと、とりあえずお疲れ様でした」

おつかれさまでしたー、と小さな声がさざ波のように返ってくる。ほとんどは一年生の声だ。二年生は最後の最後になるまでは山上に反応しなくなっている。

「滝本先輩と笹野先輩から簡単に一言もらったんで伝えておきます。まず滝本先輩からは、

『二年は一年に負けんよ』。笹野さんからは『精進しろ』とのことです」

「マジで一言じゃねえかよ」

「らしいっちゃあらしいじゃん」

中本と上条が小声で言葉を交わす。

「えーと、僕からは特にありませんが、まあ今日は色々刺激になったと思うけど、その分疲れていると思うので帰れる方は早目に帰ってゆっくりしてください。あと明後日、平日の夜なんです、滝本さんがやっているメイプルシロップスというバンドのライブチケットをタダで頂きました。隣駅のエーシーティー？とかいうライブハウスだそうです。いつもは渋谷とかシモキタあたりでやってるらしいけど今回は近場だし、滝本先輩には文化祭前も今日もだいぶお世話になってるんで、行ける人、行きたい人は僕のところまでチケットを取りに来てください。お酒も出る店ですが、お酒は禁止でお願いします」

あつたりめーだろ、と小島の茶々が入る。

「では以上、きりーつ」

小島を無視した山上の号令で各自わらわらと立ち上がる。

「では、お疲れ様でした」

「さーしたー」

一年生のようにちゃんと「お疲れ様でした」と返している部員も当然いるのだが、二年生の声の大きい面々の挨拶と平均するとだいたい「さーしたー」に聞こえる。今日来ていた瀬野川の規律を見てもなお、けやき坂には影響がない。それがカラーと言えばカラーだが、さすがに山上も郡の威厳ある部長ぶりを見た後だと、もうちよつとさあ、と思わずにはいられない。

「エーシーティーじゃなくてアクトだろ」

「は？」

指揮者台を降りた山上にまず絡んでいったのは拓也である。

「エーシーティーって書いてアクトって読むんだってば。結構有名だぞそこ」

「そう…なのか…」

英語はからつきしの山上だがさすがにこれは読めておきたかった。他の部員は気づいているのだろうか。穴があったら入りたいとはまさにこのことである。アルファベット三文字だぞ。

「二枚」

「は？」

「は、じゃなくて。行くからさ、そのライブ。チケットくれ」

「お、おお、まさか本当に行くやつがいるとは思わなかった」

ブレザーの内ポケットからチケットの束を取り出す。

「上条と行くのか？」

「いや決めてない」

実は決めているのだが。

「そっか。まあ酒だけはくれぐれも頼むよ」

「分かってるよ」

そんなこんなで拓也はチケットを二枚、受け取った。

*

「今日空いてるか？」

「え？今日？今から？」

拓也がようやく聡子を誘ったのは、メイプルシロップスのライブ当日の、部活後である。例によって部室へ楽器を戻しに行く途中だ。

「空いてるっちゃあ空いてるけど何」

「いや滝本先輩のバンドのチケット二枚もらってるから、一緒に行くかなあとか」

やけに押し弱い誘いだ。

「上条と行けばいいじゃん」

「アイツと行ってもはぐれちゃうだろ、アイツすぐナンパに出かけるからな」

さすがの上条もそんなことはしないとと思うのだが、他に上条を避ける適当な理由も拓也には見つからない。

「あのさあ」

楽器ケースを一旦床に置き、呆れたような顔をして、聡子は俯きがちな拓也の顔を下から覗く。

「はい」

拓也も楽器を床に置く。

「これって何、デートのお誘い？」

「デ、デート…」

拓也の顔に動揺が走る。

「だってそうじゃない？アンタがアタシを吹奏楽とか関係ないライブに誘ってるわけですよ、今まで特に二人でどこかに出かけたこともない女をさあ」

「うん、まあ、そういう、状況ではある」

確かにデートに誘うという状況であることは拓也も重々承知で、それだからこそ誘うのが当日まで遅れてしまったわけで、だがしかしそこで先方から「デートの誘いか」とストリートに訊かれるとそれはそれでこつ恥ずかしいわけで、拓也の歯切れも悪くなる。

「あああもう、男らしくないなあ、こうなんつーの、真正面からドーンと来れないわけ」
聡子も行く気はマンマンなのだが、なんだかこう、男らしく来てほしいところである。

何といっても初めて拓也にちゃんとしたデートに誘われているわけだ。最初くらいバシーンと決めてほしい。しばらく俯いて「ああ」だの「うう」だの、坊主頭が伸びて無造作短髪になった髪をガシガシといじくっていた拓也だが、やがて意を決したように顔を上げた。耳は真っ赤に染まっている。

「いや、ゴメン、悪かった、俺は戸崎とデートがしたい」

真正面の方向がやや曲がっている。そんな言い方をされると聡子まで恥ずかしくなってくる。

「ちよ、まあ、いいよ。初めからそう言えばいいのに」

「言えるか」

「なんでよ」

「訊くな」

なんだこの恥ずかしい展開。少女漫画か。そう思いながらも聡子はどこかやっぱり嬉しい。

「じゃあちよつと親に電話するから。先に楽器かたして待ってて」

「おう」

とりあえず誘いが上手くいったので意気揚々と拓也は部室へ向かう。橋本エリとすれ違った。

「おつかれ」

「おつかれ」

拓也と橋本の会話はこんなものである。ちようど親に電話をしようとPHSを取り出した聡子の横を、橋本が通り過ぎる。

「あつちよつとエリ！」

聡子は急いで橋本を呼びとめた。

「ん、何？」

橋本は何か嬉しいことでもあったのか、思い出し笑いのようにニヤけていたが、すぐに顔を真顔に戻して反応した。

「あのさあ、今日伊野君と滝本先輩のライブ行くことになったんだけど、ちよつと親に言いくいから、エリと行ったことにしてくんない」

「はあ？そんなの巻き込ま」

「お願いします！」

被せるように手を合わせて拝む聡子を見ると、なかなかに断りづらい。滅多に他人を頼ることがない人だけに。

「まあ…いいか…」

何故かかなりバツの悪そうな顔をしていたが、それでも橋本はOKを出した。

「あくありがと〜！この埋め合わせは必ず」

「必ずね」

いやに念押しをしてから、橋本は去って行った。聡子は母に電話をし、友達と寄ってから帰る、と簡潔に用件を伝えた。気を付けてね、とだけ言って、母は許してくれた。とりあえずはこれで問題ない。再び楽器ケースを持ち部室へ向かうと、ちょうど拓也が戻ってきた。

「親は？」

「大丈夫だった」

橋本を替え玉に使ったとは言えない。それはさすがに拓也も傷つくだろう。

「じゃあ、とつとと行くか」

そういつて拓也は聡子の楽器ケースを奪い、再び部室へと戻って行った。その後ろ姿を見ながら、まだ彼氏面するのは早えぞ、と聡子は心の中で呟いた。

隣駅とはすなわちけやき坂や瀬野川の生徒が良く出かける「街」のことである。電車で一駅だが、拓也も聡子も自転車通学なので、長い坂を立ちこぎで登りながら街へ向かった。ライブハウスであるアクトの場所は拓也が知っていたので、二人は駅近くの駐輪スペースに自転車を停め、アクトへ向かった。一階の受付でチケットを渡し、地下のライブスペースへ向かう。扉を開けると、轟音が二人の耳をつんざいた。そしてタバコ臭い。

「何これ！音でかい！臭い！」

聡子が叫ぶ。叫ばないと声が聞こえないような曲の演奏中だった。

「こんなもんだよ！ライブって！」

拓也も叫びながら返す。チケットにはドリンク一杯無料も付いていたので、二人はコーラを頼んだ。

ライブハウス内は、ステージには照明が当たっているが客のフロアは暗い。この日は客も多く、なかなか頭がポーツとしてくる光景だ。

「滝本先輩いないじゃん」

音量に慣れてきた聡子が、拓也の耳元に声をかける。

「まだ出番じゃないみたいだな。今何バンド目かわかんないけど、メイプルはトリだから」拓也も同じように聡子の耳元に話しかける。

「じゃあ曲も別に面白くないからちよつと出ようよ」

「え、もう？まあいいけど」

二人は一階に戻った。アクトはリハーサルスタジオも兼ねているので、一階のロビースペースには、練習に来ているアマチュアバンドマン達がソファに腰かけていたりする。空いているソファに、二人は並んで腰掛けた。

「ああ、死ぬかと思った」

聡子の顔は早くも疲れている。

「マジかよ。ライブハウス初めて？」

拓也の方は慣れたものだ。

「初めてだよ」

ふー、と息をついて聡子はソファに身体をうずめる。

「じゃあ仕方ないか。でもロックバンドの時はもつとうるせえぞ」

コーラを少し飲んで、拓也は聡子が落ち着くのを待った。やがて落ち着いたのか、よしよ、と体勢を正して聡子が話し始めた。

「伊野君ってさ、映画の専門行くなって言ってたよね」

「え？ああ、そのつもりだよ」

デートなのになぜ進路の話。でもいいのだ、会話の内容は何だって。

「あたしやっぱフツの短大にするわ」

「そっか。なんで」

並んで座っていることもあり、二人は顔を合わさずに会話をしている。まあ話の内容的にもあまり面と向かってふむふむ、という感じの話でもない。

「なんでって言われても。まあ色々考えて。家庭の事情とかもあるし」

「家庭の事情かあ。考えたこともないな」

大したことでもない、とでも言うように拓也は答える。

「マジで？映像の専門って学費高そうじゃん。それに親がよく映像系なんて許したね」

「親？まだ話してねえわそう言えば」

「話せよそこは！」

思わず聡子も突っ込まざるを得ない。どこまでマイペースなのだこの男は。

「そうだなあ。そろそろ話しておかないとなあ」

自分のことながらどこまでも他人事である。

「うちの親ってまあ普通でさ」

聡子から何も尋ねてはいないが、拓也は自分からとつとつと話し始めた。

「芸事みたいのは無縁なんだよね。普通に大学行くもんだと思ってると思うから、話したら反対されそうでさあ。そもそも予備校通っちゃってるしな俺。何か切り出すタイミングもないんだよな。今まで映像系の部活に入ってたとかそういう下地も無いし。どうすっかなあ」

どうすっかなあと言われても聡子には何とも言い難い。他の家の事情だ。

「まあいつかは話さなきゃいけないだし、普通に相談してみればいいんじゃないの。大行かせる気があるだけありがたい親だとは思うけど」

聡子の場合は家庭の経済状況の問題もあつての短大だ。もちろん楽器を買うなどともなく、音大はあきらめざるを得なかった。四年制大学に行かせるだけの資金繰りが出来る家庭はそれだけで恵まれていると思う。

「まあそうだな。別に裕福な家庭とか言うわけじゃないんだけど、学費用に貯金しててくれてたみたいでさ」

うらやましい話だ。都立高校に通っている時点で拓也が決してボンボンだとは思わないが、この「のほほん」とした空気は両親がある程度不自由なく育てあげた結果なのだろう。何でも自分でつかみ取りながら生きてきた聡子とは少し事情が異なりそうだ。

「なんか光とか色とかの映像がなんちゃらって言ってたよね」

「そうだね」

以前、二年生の雑談タイムにそんな話をした。

「それってさ、専門行ったら教えてくれるもんなの」

専門学校に行ったからといって映画監督になれるわけではない。大学で経済学を学んだからと言って経済学者になれるとは限らないのと同じだ。聡子はそう思う。

「わかんねえな。どっちかっていうと色彩心理学を応用したようなの作りたいから」

「それってさあ…」

夢に向かってまっしぐらモードの拓也に水を差すようで、少し聡子は次の言葉が続けるかどうか迷ったが、結局言うしかなかった。見ていてヒヤヒヤしすぎる、この男は。

「大学で心理学やってからのほうがいいんじゃないの」

「んーまあ、それもアリ」

「なんかさ、せつかく予備校まで行かせてもらって、もったいない気がするんだけど」

ちよつと踏み込み過ぎな気もするが、気付けば普通の四年制大学に拓也が進学してくれることを、心のどこかで望んでいる自分がある。

「まあそれはちょっと俺も引っ掛かってるだけだね。まあ、早いうちに親と相談してみるよ」

「うん」

「そろそろ戻らない？」

拓也は少し疲れた様子で、進路の話を切り上げた。もうこれ以上特に進路について話すことはない。

「そうだね、ごめん」

聡子も拓也がこれ以上この話を引っ張りたくないということが分かり、ここは素直に従うことにした。

再び地下のライブスペースへ向かい、重い扉を開く。ちょうどバンドの転換時だったようで、客側のフロアは明転し、来ている客の顔がハッキリと見えた。室内には洋楽のBGMが流れている。有線か何かだろうか。聡子が客層をざっと見わたしてみたところ、高校生のような若い客は少なく、ほとんどが大学生か、その年代の人たちのように見えた。学生服で来ている客なんてうちらぐらいかな、と思いつつ再び目を走らせたとき、視界の隅に見慣れた制服が飛び込んできた。けやき坂の制服である。しかもその人物は。

「エリ！」

聡子が大声を上げたので、フロアの客も一斉に何事かと聡子を見る。しかしすぐに聡子がエリと呼ばれた女学生の下へ駆け寄るのを見て、「ああ友達か」ぐらいな感じですぐに興味を失い、各自また元の状態へ戻る。

「橋本さん!!と、山上!!」

拓也もその二人を見つけて面食らう。予想の斜め上に行く展開ってこういう感じか？

「なんでなんで？」

「なんで二人？」

固まっている山上と橋本を、拓也と聡子が詰問し始めると、

「うおー!!」

と今度は横から別の声が聞こえてきた。

「うおっ淳!!」

中本淳である。制服を着ていなかったのが聡子も拓也も気づかなかった。傍らには彼女の沢内梓がいる。こちらも制服を着ていないので拓也は一瞬誰だか思い出せなかったが。

「なんで!!なんでおまえら二人で来てんの!!」

今度は拓也と聡子が詰問される番である。

「ちよつと待って、ちよつと待って。整理しよう整理」

まずは山上と橋本である。友達としての組み合わせとしてもあり得ないと、拓也も聡子も踏んでいたが、しかし実際には二人でいるわけである。

「まず山上と橋本さんは何だ？ 淳たちとたまたま一緒になっただけか？」

拓也は中本に話を振ってみた。

「へっへっへ実はな、こいつら付き合ってたんだよ」

「バ、バカおまえ言うなつただろ！」

急いで山上が中本を制するが時すでに遅しである。

「あ、わりい、言っちゃった」

してやったりの満面の笑みを浮かべる中本は心から楽しそうだ。恐ろしい男である。

「あー、マジかよ」

天を仰ぐ山上に、

「そりや同じ時間に同じところいや見つかんべ。アホかオマエ」

と中本が返す。

「うわあ。マジでビックリした。エリ、マジ？」

今度は聡子が橋本に念のために確認をする。にわかには信じがたい展開だ。

「うん…マジ」

「マジなのか——！！」

隣で拓也が叫ぶ。うるせえなオマエ、と聡子が言いかけた時、中本がありがたくも解説を始めてくれた。二人が付き合いだしたのはコンクールが終わった後からだということ。

今日は中本組とのダブルデートだということ。山上と橋本は観念したように微動だにしない。

「ちよつと待ってこれ知ってるのって他に誰がいる？」

聡子にとっては、橋本は同じクラス、同じ部活でありながら一ヶ月以上も気づいていなかったことになる。なんたる失態。

「知ってるのはここにいる俺たちだけ。今日おまえらが増えたけどな」

中本が心底愉快そうに教えてくれる。

「マジか。なんでそんな秘密にすんだよ」

今度は拓也が山上に突っかかる。

「いやー部活の雰囲気とか色々あるから。部長浮かれてんじゃないね、とか思われたら厄介だろうが。それよりオマエらは何なんだよ。いつから付き合ってたんの」

見事な返りで今度は山上が拓也を突いたが、

「付き合ってたないから！」

と強烈に聡子が否定をする。

「そうそう、付き合ってたない。オトモダチデス」

拓也も微妙な表情で追従する。そこまで強く否定しなくても、という思いがよぎった。

「なんだオマエらはこれからかあ。楽しいなあオイ！」

中本が拓也の腕を突つつく。そんなに簡単なことではないんだよ淳君、と言いたくもなるが、「うっせえほっとけ」と返すのが精一杯だ。

「まあ戸崎さん落とすのは難しいと思うけどなあ、頑張れよ」

中本はなおも拓也を突つつく。

「だからそういうんじゃないって」

「そんなに簡単に伊野君には落ちませんから」

聡子も否定する。その後「またまたー」「結構お似合いだけど」などと中本、山上、橋本から執拗に吊し上げを喰らっていると、フロアが暗転した。

「おっ出てくるぞ」

中本の声が聞こえる。しばらくして、ギンギラギンのスーツを着た滝本が、総勢十名ほど、ギター、ベース、キーボード、ドラムにホーン・セクションを加えたバンドを従えステージに登場した。室内に流れていた洋楽の音が止まる。

「ハロー、エエブリバアディイ！」

滝本の雄叫びとともに、ノリのいいファンキーな曲が始まった。その場に固まっていた六人の高校生は、ビリビリッ、と何かが身体を突き抜ける音を聴いた。それが、滝本が人生を賭けている「メイプルシロップス」のサウンドなのである。

*

やがて十一月になり、地区音学会の日が訪れた。同じ学区に属する学校の合唱部や吹奏楽部が大挙して出演するイベントで、この学区で一番上手いとされる七尾高校吹奏楽部が毎年のトリを務めている。ほとんどの吹奏楽部がけやき坂よりも上手い。毎年けやき坂で

は、自信を失った一年生から退部希望者が続出するという魔のイベントである。昨年はイベント前に一・二年生の間でもめぐりがあつたり、イベント後には宮内篤子が抜けたりと散々だったため、今年も何かあるのではないかと部長の山上は警戒していたが、結果から言えば、それらはただの杞憂に終わった。昨年から大きく演奏順を上げた瀬野川とトリの七尾高校の演奏を聴いた後に泣き出す一年生がいたり、ということは例年通り起こったが、特に自信を失くして部活を辞めたいとか、そういったことを言いだす者はいなかった。今年の一年生は、山上の代に比べ、総じて神経が図太い。もしくは鈍感なのか。

ただしやや困ったことが起きたのは、山上たちの代が呪われているのか何なのか、まあそういう運命だったのだろう。

地区音楽会が終わり、帰り際、演奏を聴きに来ていた笹野滋に山上は呼び止められた。二人で話したいとのことだったので、他の部員を中本に託し先に帰らせ、山上と笹野は会場近くの喫茶店へと入り、窓際の席に腰かけた。

「忙しいところ悪いね」

「いえ、大丈夫です」

簡単な用事なら、他の部員もいるところで立ち話でもすればいい。わざわざ喫茶店に入るということは、厄介な話が待っているということ、山上にも分かる。

「まあ君らにとってはあまり良い話じゃないんだけど」

笹野はバツの悪そうな顔をしながら、運ばれてきたコーヒーをすすった。

「何となく分かります」

山上も神妙な面持ちで答える。

「まあそのなんだろう。俺の問題なんだけど、引き続きちょっと指導に入れそうにない」そんなことだろうとは察しがついていた。山上は無言で話の続きを待つ。

「情けない話なんだけど、音大の受験、このままだとちよつと間に合わないペースになってきててね。もちろん定期演奏会は振ろうと思うし月に一回か二回は合奏出来るんだけど月に一回か二回。正直なところ、ほとんどは月に一回といたところか。山上の顔が少し険しくなる。

「いや本当、申し訳ない、俺の個人的な問題だからね…」

「いえ、先輩が音大を受験されることは前から分かっていたことですし、それについて対策をしてこなかったのは僕らにも責任はあると思いますので」

沈んだ表情を浮かべる笹野を気遣うように、山上が応じる。別に綺麗事を言っているつ

もりもない。事実を述べているだけだ。それを受けて「本当に部長らしくなったなあ」と窓の外を眺めながら笹野は呟いた。山上も「いえ」とだけ答え、同じように窓の外を眺めた。しばらく二人の間に沈黙が流れた。

「でまあ、正式に学生指揮者を立てて下振りをお願いしたい」

笹野から提示された案はこうだ。定期演奏会の本番は笹野が振る。合奏も数回は行う。その下振りのために、学生指揮者を急いで用意する。二部のポップス・ステージについては昨年同様、別の指揮者を立てる。ちなみに滝本は定期演奏会の日とライブイベントが重なったため今年は無理。そこで二部の下振りは地区音同様、一年の桜井に任せ、本番の指揮者は別途誰かを急いで笹野が見つけてくる。アテはあるらしい。

「合奏の度に誰か部員が指揮するわけだからそのパートは人が減っちゃうけど、仕方がない。ちなみに西堀はNGだ」

「うーん」

口に手を当てて山上は唸った。唸るしか出来なかった、というのが正しいところだ。

「でも、そうするしかないっすよね…」

そう言ったとき、また山上は視線を窓の外に戻した。様々なパターンを思案しているようにも見えるが、何も考えていないようにも見える。

「何とか出来そうか？」

笹野も今回は自分に引け目があるので話し方も冷たくはない。

「まあ何とか、それでやってみますが、学生指揮者の決め方で揉めそうで…」
とにかく揉め事は避けたい。このまま穏便に引退したい山上なのであった。

「それについては、何人か候補を出してもらって、俺が実際に合奏を見て決めようと思う」「それだったらまあ、部員の反対もないかと思えますが…」

実際のところ何人かは反対するかもしれないが、笹野が決めればまあ従うだろう。

「じゃあそういうことで頼む。申し訳ない」

「いえ、大丈夫です。何とかします」

言ってしまった。何とかしますとか言ってしまったよ俺。山上の若干の後悔には気付かず、笹野は話題を進めた。

「定期の曲はいつ決まるんだ？」

それによって笹野の行動スケジュールも変わってくる。

「明日から一年生に次期役職決めに入ってもらおうつもりなので、それが終わってからですね。」

僕らはちょっと揉めたんで役職決まるまで一週間くらいかかりましたけど」

揉めたというより山上自身が部長になるのを拒んでゴネただけなのだが、その事実は伏せた。

「なるほど、じゃあ二週間くらい間を見ておこうか。学生指揮じゃ合奏もそんなにうまく進まないから、早目に曲目を決めてくれ。それから実際に候補者に合奏をやらせてみて、学生指揮者を決めよう」

「分かりました」

こうして今後の大まかな方向を決め、二人は喫茶店を後にした。少し離れたテーブルに、瀬野川の制服を着たおさげ髪的女子生徒が座っていたことには、二人とも最後まで気付かなかった。

「えー、昨日はお疲れ様でした。練習前ですが、大事な話があるので聞いてください」

翌日の月曜日、山上は早速練習前のミーティングで昨日の笹野の話の切り出した。直前までガヤガヤとうるさかった音楽室が一気に静まり返る。

そして山上がすべてを話し終えると同時に、室内は再び喧噪に包まれる。部員たちは大混乱である。

「落ち着いて、おーい、落ち着いて」

山上が相変わらず張りのない声で何度か呼びかけ、ようやく皆静まった。

「去年の田口先生の時と同じくらい、また今年も大変なことになっちゃいましたが、去年も何とか無事に本番まで出来たんで、今年も大丈夫です。執行部はちよつと大変ですが、皆これまで通り練習してください。何か不安なこととかあったら、パート・リーダーや淳、もしくは僕のところまで相談に来てください」

「なんでお前の前に俺が出てくるんだよ！」

中本が不満気に突っ込む。

「まあまあ」

「まあまあじゃねえ！」

「ま、そんなわけで一年生は役職決めがあるので、今日は練習後そのまま残ってください。各役職の二年生から説明をしますので。では解散、練習に移ってください」

山上は中本を無視してミーティングを締めた。

「先輩、あの」

「あ？なに？」

権田が拓也に質問してくるときは大抵厄介だ。やれピストンが動かないだの、やれマウスピースが抜けないだの、やれ運指が分からないだの。それだけに拓也の対応もぞんざいになる。

「役職決めてどんな感じなんスカ」

「え？いや別に変ったことはねえけど」

かなりどうでもいい質問だが、昨年の役職決めを思い出して、少し拓也はげんなりした。

「そうスカ。なんか緊張してきたなあ」

「なんでテメーが緊張すんだよ」

権田の顔は見ずに、メトロノームのスピードを調整する。

「いやあ部長になったらどうしようって思って」

「ない！オマエに限ってそれはないから！絶対ないから！」

「そんなの、分かんないじゃないッスカあ！」

「分かるわボケ！」

こいつは一体何を言い出すんだ。勘弁してくれ。そう思いつつも、一年生は総じて何を考えているか分からない。まさかのまさかもあり得る。想像するだけで憂鬱な気分になってくる拓也であった。

「どのくらい時間かかるんですか、役職決めて」

無然とした表情を浮かべながら、なおも権田は拓也に質問してくる。

「さあ。その代によるんじゃないやねえの。こちらは一週間くらい？」

「え、一週間も！」

権田が信じられない、と言った顔をする。

「わかんね。どうだったっけ？」

拓也は同じ部屋で練習をしている小野田に問いかけた。

「四日ぐらいだったと思うけどなあ」

「あ、そんなもんだったか。そんなもんだってよ」

今度は権田に返す。

「四日でも十分長いッスよ…」

「長くて悪かったな」

「あ、いや別に責めてるわけじゃないッス！」

「当たり前えだ、責められる筋合いねえよ！」

慌てて取り繕う権田を一蹴し、拓也はリップスラーの練習を始めた。まだ定期演奏会の曲も決まっていないので、とりあえずはひたすら基礎練習である。基礎練習が嫌いな拓也からすると、早く一年生には役職を決めてもらって、とつとと定期演奏会の曲決めに入りたいなあとも思うのであった。

その日の練習後、一年生は音楽室に居残ることになった。二年生の何人かは「おつかれー」などと言って先に下校して行く。昨年同様、これから役職の説明会なのだが、昨年と違うのは、既に二年生の役職の主だったメンツが勢ぞろいしていることだ。一年生と正面に対峙するように横一列に腰掛ける二年生は、なかなかの迫力だ。他の二年生が帰るのを確認して、山上が立ち上がり改めて説明を始めた。

「えーと、じゃあ始めます。今日の初めに言った通り、次期役職を決めてもらいます。一人必ず一つは役職についてください。今日この後各役職から説明がありますが、それが終り次第、今日から早速生涯教育センターでミーティングを始めてください。センターの会議室は空いていると思うので、申請は…岸、お前がやれ」

「えっ、何で俺なんスか！」

「うるせえな、サックス男子の伝統だ、やれよ」

会議室申請マスターの上条がここぞとばかりに後輩にも同じ道を歩ませようとする。

「そ、そうなんスか？なんか嘘くさい…」

「いいからやれ！ナメてんじゃねえぞデメエ！」

中本に一喝されると、誰も逆らえない。岸も「す、すみません」と吹き、シユンと俯いてしまった。

「まあまあ。とにかく軽い気持ちでやることではないので、各自真剣にやってね。じゃあまず部長について俺から…」

こうして山上から順に、各役職についての説明が行われた。中本の一喝があったため序盤こそ一年生は皆緊張しながら聞いていたが、最後に打ち上げ係の説明を拓也がしている頃には、例年通りもはや話半分で聞いている、という態であった。

「以上だね。じゃあ皆大変だと思うけどこれを機に意見をぶつけ合って、皆で納得できるような役職決めをしてください。では、解散！」

山上の号令とともに二年生はバラバラと帰り始める。上条と帰りかけていた拓也の下に、権田が駆け寄ってくる。

「あの、先輩」

「あ？なに？」

「役職って立候補制でしょうか」

「それも含めてオマエらで決めるんだよ」

そして権田に背を向けて拓也はサッサと歩き出した。

「まあ頑張れ」

上条もそう声をかけ、拓也の後を追う。こうして、一年生の次期役職決めが初日を迎えたわけである。権田はこれから何が起きるか想像も出来ず、やや肩を落として一年生の群れの中へと消えた。突然学年での話し合いを強制的にさせられるこの行事は、大抵の一年生にとって憂鬱である。それもまた伝統というものだ。音楽室の鍵を閉め、校舎を出た一年生一行は、秋風の残る中を葬列のように歩いて行くのであった。

*

「篤子オ、もう限界だよオ」

「わ———っ！」

地区音楽会の翌日、瀬野川高校吹奏楽部の練習後である。突然背後から抱きついてきた大城咲子に、篤子は思わず大声を上げた。丁寧に楽器を磨いていた郡大二郎は篤子に何かあったのかとすぐに目を走らせたが、大城がじゃれているだけだと分かり再び楽器に目を落とし、黙々と楽器を磨き始めた。

「ちよつと咲子何なのよ！」

こんなじゃれ方をされるのは初めてで、慣れていない篤子の頬は紅潮している。

「話し聞いて。もうキャパ超えた。これ以上抱えきれない。一回吐き出させて」

大城の表情には疲労の色すら浮かんでいる。

「聞く、聞くからちよつと落ち着いて」

「ここじゃなんだからモス」

モスと言えば瀬野駅そばにあるモスバーガーである。

「いいよ。一応大二郎に言ってくるから、楽器片付けておいてくれる？」

篤子の楽器はもうケースに収められて、足元に置いてある。大二郎が楽器を片付け終えるのをボーツと待っていたのである。わかった、といって大城は自分の楽器ケースと篤子の楽器ケースを練習室の奥へと運んで行った。

「ああ、どうせ噂話だろうけど聞いてやれば」

篤子から今日は一緒に帰れない、と話を受けた大二郎の反応は冷静だった。大二郎も部長としての成長は著しい。事情というほどの事情は分からないが、部員が何かに悩んでいるのであれば、その解決が最優先であるという判断を下せる位にはなっている。それに、篤子と一緒に帰るのはいつでも出来ることだ。サンキュ、と言い残して篤子は大城の下へ戻った。

「オッケー、じゃあ行こうか」

「情報料…」

並んで歩き出した大城が小声で主張する。

「はい？」

何のことかわからず篤子も聞き返す。

「すごい特ダネが特盛なのよ〜おごってよ〜」

要は、モスを指定してきたのは大城だが食事代を払うのは篤子ということだ。

「なんでアタシがおごらなきゃいけないのよ！咲子が聞いてくれて言ってきたんでしよ
うが」

「すごいこのよ、けやき坂のすごい情報なのよ〜」

大城の目が血走り始めている。

「それって…聞いて後悔するような情報じゃないよね」

篤子は一応念を押す。もうすでにコンクールも地区音学会も終わり、けやき坂と同じステージに立つ機会はない。とはいえ、彼らのゴタゴタや外に漏れてはいけないような情報を得るのは、フェアではない気がするのだ。

「大丈夫、半分恋バナだから」

「なんでそんな情報持つてんのよ!!」

部活の話ならまだしも、完全にそれは個人情報レベルだ。この女の情報網は一体どうなっているのか、身内ながら恐ろしい。

「なんででしょう？まあどうせ篤子にしか分からない情報だから、安全よ」

確かに、昔の仲間とは言っても、その辺りの話はやはり気になる。野次馬根性だが。

「うーん」

「モスバーガーポテトLセット」

「ちよっと！せめてフィッシュでしょ！」

「フィッシュにポテトL！」

「Lとか！せめてモスのS！」

「よし乗った」

「あー！結局おごるのかよー！」

交渉に乗せられてしまった自分を恨む。

「お買い上げどうも〜」

大城は爽やかな笑顔を浮かべ、足取りも軽く篤子の先を歩き出した。

「ちよっと何それマジで!？」

篤子は飲みかけたアイスティーを嘔き出しかけながら叫んだ。他に客は一組しかいないせいか非難がましい視線を感じることはなかったが、すぐに声を落として続けた。

「なんであんたがそんなこと知ってるのよ」

「メイブルのライブよく行ってんのよ、完全にプライベートな趣味だけど」

「で、見ちゃったってわけ」

「偶然よ偶然、マジで」

あの山上とあの橋本さんが付き合ってた？中本の彼女は七尾の美人フルートで？伊野と聡子がお忍びデートで？そりゃ一気にそれだけ情報拾っちゃったら吐きだしたくもなるわ。うん。

「はあー、なんか狭い世界で色々あんのねーこの年になると」

「篤子と郡だつて似たようなもんでしようが。あんたらに比べればショッキング度は全然ないけどね。私は良く知らない人達だから」

ひたすら情報を吐き出し続けていた大城は、ようやく辿りついたSサイズのポテトの最後の一本をくるくる回しながらスカッとした顔をしている。

「でもよく名前と顔一致するね」

篤子にはそれが不思議でならない。

「え、だって合同練習やったじゃん」

「やったけど全員他のパートじゃん。しかも一人は七尾だし」

「そりや努力はしたよ。全員の顔と名前覚えられるように耳ダンボにしてたもん」
それだけで覚えられるのが不思議だというのだよ咲子君。

「あと七尾の沢内さんはその筋では有名人だからね。上手くて美人だから噂に事欠かなそうってんで一年の時から目つけてた」

その筋って何だおい。どんな裏組織に属してんだアンタは。

「恋バナは以上ね。次行くわよ」

「えええもう結構十分なんだけど」

「頂いた情報料の分はキツチリお返しいたします」
なんなんだその生真面目さは。

「でも残りは部活の話なんでしょ？他校の話聞いてもなあ…」

「あそこ来年指揮者変わるよ」

篤子のけん制を無視して、大城はサラリと爆弾を落とす。もちろん篤子も乗る。

「え——！マジ！てかまた変わんの！てか何でそこまでディーブな情報持ってるの！」

「いやこれも偶然…でもないんだけど」

そして大城は地区音楽会の日「偶然」入った喫茶店で山上と笹野が話していた内容をかいつまんで説明した。

「咲子、それ偶然じゃないでしょ。『あたしちよつと寄りたいところあるから』なんつって帰りの輪から外れてったやつでしょそれ。尾けたってこと？」

「偶然を装っている以上、それは偶然なのよ、この筋では」

だからどの筋だつての。

「いやさすがにそれはスパイじゃないの」

「いいじゃないアタシと篤子の間だけで黙っておけばこれ以上は広がらないわけだし」

「まあそうだけど…」

あんまり気分良くないなあ。

「まあさすがに誰に変わるかは分からないけどね。もしかしたら来年のコンクールは大化けってこともあるかもねえ」

「うちみたいに、ってこと？」

「そう」

さすがにそれははないのではないかと篤子は思う。今年の瀬野川の躍進は、篤子ですら予想していなかった。いくら田口といえども彼のやり方を侵透させるのに一年以上はかかる

と思ったし、伸びるとしたら来年、篤子が三年になってからだと踏んでいた。けやき坂の指揮者が再び変わるからといって、瀬野川と同じように一年目で躍進するなんてことがそう頻繁に起きるわけではない。

「それはちよつと考え過ぎじゃない」

そんなわけで、篤子は大城の言う可能性を否定する。

「まあそうだといいいんだけど。でも備えておいて損はないと思うけど」

大城の顔がただの情報屋から瀬野川高校吹奏楽部の一部員としての顔になる。

「それはまあ、そうだね。備えておくに越したことはないよね」

来年のコンクールでは、けやき坂にはもう山上達はいない。指揮者も変わる。それはもう篤子の知っているけやき坂ではない。何が起こつても不思議ではないが、田口と瀬野川の音楽を超えることだけは許せない。何故だか、胸の奥が熱くなるように篤子は感じた。

*

「先輩、役職決まったんすけど」

「は？」

火曜日の放課後、部員が続々と音楽室にやって来る。

「うーす」

「うーす」

握りこぶしを突き合わせているのはサクスの小島と上条だ。今年の小島の出席率は変則的だが、二日前に地区音楽会があったこともあり、その流れで今のところ連続出席記録更新中である。

「うーす岸君おはよう」

山上に話しかけていた岸のこめかみあたりに握りこぶしを当てる。

「ちよつと！小島先輩やめてくださいよ、今部長に」

抵抗しかけた岸であったが、その刹那に小島はぶいっつと違う方向を向いて他の部員に握りこぶしを当てる。猫のような自由奔放さである。

「部長、小島先輩どうにかしてくださいよ」

といいつつも岸の顔はまんざらでもない。

「ああどうにかする、それよりもう一度、『は？』」

山上は信じられない、といった表情で岸に詰め寄る。

「あ、いや、決まったンス、役職…」

何だか責められているようで語尾が消えかかる。

「決まったってオマエ、一晩で？オマエらちゃんと考えてやったのか？」

「考えましたよう、ただ立候補も多かったし結構すんなりと」

正直、考えて決めたというよりほぼ立候補で決まっちゃった、という感じなのである。

「ほんとかよ…」

自分たちの代がすんなり行かなかったので、山上は不思議で仕方がない。まあすんなり行かなかった原因は自分なのだが。

「で誰が何やんの」

山上はななかば捨て鉢のような言い方で、さほど興味なさそうに尋ねる。

「えっとまず部長が俺で」

「ちよつと待てマジか！おまえらの学年、正気か？おまえが部長って正気かそれ？」

一発目から地雷か。思わず山上は身を乗り出した。

「いやなんか立候補制にしたら権田が部長に立候補しまして」

「それは…きついな」

「でしよう？そしたら他の部員から僕が推薦されました」

その二人以外に選択肢はなかったのか。

「桜井さんは」

「さっさんは学生指揮と金管セクションがあるので…」

ああそうか。学生指揮も決めるって言ったんだ。それなら兼務は無理だろうなあ。

「そんでまあ僕もさすがに権田が部長はやべえって思っって、多数決に持ち込んで、そんで僕が部長に」

まあ、よく権田の野望をブロックしたよ岸君。

「で権田は」

「副部長です」

「そうか…」

まあ仕方ないか。部長に立候補するような稀有な人材を打ち上げ係などに回すわけにもいかない。しばらく考え込んでいた山上に岸はさらに追い打ちをかけた。

「それで、あと、副部長を二人にしました」

「は？オマエなんで勝手に人数増やしてんだよ」

なんなんだこの学年は。何がしたいんだ。

「だって権田一人で副部長じゃあ何かのとき危ないじゃないッスか！」

「まあそうだけど…で、誰がやんの」

「林田です」

ほらあ。爆弾二つ用意しただけじゃんかそれは。山上は大きいため息をついた。それには構わず、岸は大まかな他の役職の長について報告をした。

「ああそう…まあ自分たちで決めたんだから責任もってやれよ」

一年生が決めたことに口を挟むのも良くないような気がして、山上はもう半ばさじを投げている。とにかく定期演奏会が終れば晴れて卒部である。あとはただ穩便に済ませたい。

「もちろんです！責任持って頑張ります！」

なんか嘘くせえんだよな、岸って。

「じゃあ点呼終わったら次期役職発表するから。黒板に役職名書いておいてくれ」

「初仕事ですね！」

嬉しそうに岸が去っていく。そして早速黒板に役職名を書きだしている。

「まあ仕事が早いのは…いいことだ」

誰にともなく呟いて、山上は窓の外を眺めた。まだ点呼までは時間がある。陽が落ちるのが早いこの時期、眼下のテニスコートではすでにテニス部が練習を始めている。あの中に本格的にテニスをやりたいと思っているヤツは何人いるんだろうか。ナンパ部と呼ばれているような部活である。そして本格的に吹奏楽をやりたいヤツはうちに何人いるんだろうか、それもまた怪しいなあ、などと考えながら、山上はラリーを目で追った。

「えー、では皆さんよろしいでしょうか。次期役職決めが終わったそうなので、今から発表してもらいます。一年生は黒板の前に集まってください」

点呼の後、山上がそう告げると、二年生はざわめいた。

「もうっ？」

「はやくね？」

浮き足だっていないのは小野田、伊野、戸崎の低音組だけだ。三人とも腕組みをして黒板を睨み付けている。何なのこのパート。怖いってば。山上は低音の三人から目を逸らし、野崎一郎を呼んだ。

「部長の発表が終わったら、黒板の役職名のところに皆の名前書いてって。後で戸崎さんに整理してもらって、先生に提出してもらおうから」

「わかりました」

やや緊張気味に野崎が答える。

「じゃ、岸君、やっちゃって」

山上のゴーサインで、岸が一年生の群れの真ん中に立ち、話し始める。

「ええと、一年生の次期役職が決まりましたのでご報告します。まず部長ですが、僕です。よろしくお願いします」

「なにィ——！！」

思わず叫んだのは上条だ。

「上条、静かに聞け」

山上がたしなめる。野崎が黒板の「部長」の欄に「岸」と書いた。

「えっと僕以外ですが、けっこう兼務が多いので、フルートから順番に言っていきます」
そうして各自の役職が二年生に発表される。その都度、野崎一郎が黒板に名前を追加していく。普段はおっとりとしているが字を書くのはめっぽう速かった。岸からの発表が続く。

「続いてサククス、本田は演奏会実行委員と広報兼務、岸は部長のみ」

「続いてホルンです。林田は副部長と演奏会実行委員の兼務」

「続いてトロンボーン行きます。桜井は学生指揮、金管セクション兼務」

「続いてテューバ、権田。副部長です」

野崎が副部長の欄に既に書かれた「林田」の文字の下に「権田」を追加する。

「マジかよ」

中本が呟く。山上は今は指揮者台を降り、中本の隣に座っていた。

「まあ林田さんいるからいいじゃねえかよ」

「余計複雑だろうが！まあ権田一人よりはいいか…」

中本の引き継ぎは難航しそうだ。

「以上です、よろしくお願いします」

岸が頭を下げると、他の一年生も頭を下げた。二年生からは希望と不安が入り混じった拍手が贈られる。

「ま、そういうことなんで。今日は一時間くらいで練習を切り上げて、各役職、二年と一

年で改めて仕事の説明や、役職によっては仕事の実践に入ってください、以上、解散」

山上の号令で部員が散らばる。

「あの、戸崎先輩」

野崎一郎が恐る恐る聡子に近づく。

「ん」

「黒板に役職と名前書き出しておりますので」

女子力高めの野崎君でも聡子は苦手である。なんというか、怖い。

「野崎君渉内だよね？」

「は、はいっ」

思わず声がうわずる。

「じゃあ君に任せる。後で一緒に先生のところ行くから、先にあれルーズリーフに書き写しておいて」

「あっ、はい！」

部長は戸崎先輩にやってもらおうって言ってたけど、やっぱそんなに甘くないよなあ。

「決まりました。はい。そうです。早かったですね。まあ僕らが教えますから大丈夫です。はい。はい。明後日。木曜日ですね。わかりました。よろしくお願いします」

皆が練習に散らばった後、山上は笹野滋に電話での報告を終え、今後の段取りを相談していた。結果、定期演奏会の選曲会を、早速二日後の木曜日に行うことが決まった。もちろん笹野滋が学校に来る。

「明後日!!」

皆への発表前に報告を受けた演奏会実行委員長の村田は思わずスリッパを探した。こいつをぶっ叩きたい。だがスリッパが見当たらない。

「そんなに早く音源用意出来ないよ！」

「まあ多分三部決めるだけでタイムオーバーだと思うし、笹野さんも三部だけはとりあえず決めたことだったから。笹野さんも曲持つてくるとは言ってたけど」

村田の勢いにやや怯みながら、山上は要点を伝えた。

「あ、そうなの」

村田もやや拍子抜けする。

「そう。一日で全曲決めるとかさすがに無理だから」

「そりやそうだよ。あービックリした。じゃこっちからも適当に音源用意しとくわ」
「よろしく」

こうして昨年よりは早く、選曲に取り掛かれることになった。一年生様様である。

*

かくして木曜日、練習開始のミーティングが終わる頃、笹野滋が音楽室に顔を出した。
「おーす」

「こんにちはー」

笹野がどれだけ合奏で恐ろしくても、こういう時にはだらだらつと挨拶を返す。けやき坂の悪い伝統だが、笹野ももう慣れた。そして多くの生徒の視線は、笹野に続いて入ってきた見慣れない男に注がれた。

「あつ…」

「うおお早田先輩！」

山上が何かを言いかけるよりも早く拓也が反応する。

「久しぶり」

右手を軽くあげて拓也に声をかけ、早田はそのまま笹野の後ろに付いて行く。

「もうミーティングは終わった？」

笹野が山上に声をかける。

「はい、終わってます。選曲の準備も出来てます」

「了解。じゃあ先にこいつ紹介するわ」

授業で使う机を選曲用に教室の前側に移動させ、空いた後ろ側に椅子を円形に並べて座っている部員たちに向かって、笹野は早田を紹介した。二年生の一部は知っている人物だ。笹野の同期でチューバ・パートだった早田隆則^{たかのり}。現在大学生。拓也は何度か指導を受けたことがあるのももちろん知っていた。そして彼が定期演奏会の二部の指揮を担当することが告げられた。

「お手柔らかなによろしくお願いします」

早田が頭を下げる。声も物腰も柔らかい人物だ。背は二メートルとは言わないまでもかなり高い。そして肩幅も広い。全体的に細見でありながらチューバに回された理由がなんとなく分かる骨格だ。

「よろしくおねがいしまあす」

部員たちも緊張感のない挨拶を返す。

「まあ今日は三部のメイン曲決めで終わっちゃうと思うので、早田はまああれだ、挨拶に
来ただけって感じだ」

「だったら今日じゃなくてもよかったのになあ」

「まあそう言うなよ」

笹野のリラックスした顔を、おそらく初めてけやき坂の部員たちは目にした。そもそも
同期とは言え友人っぽい人物がいたことが驚きだ。

「じゃあ早速始めるか」

そう言うとき笹野は手近な椅子を探して円陣の外に置き、腰掛けた。同じようにして早田
も腰掛ける。

「ではこちらでいくつか候補に絞ったものを流します」

村田がCDをラジカセにセットする。昨日の間に、二年生の実行委員の間で三部のメイ
ン候補を何曲かに絞ってある。メイン曲は伝統的にクラシック作品の編曲モノだ。長いク
ラシックの曲をひたすら聴き続け、最も反応があったのはプロコフィエフの「ロメオとジ
ュリエット」だった。

「こちらからは以上です」

村田がラジカセから最後のCDを取り出し、笹野に告げる。

「んー。これも一応聴いてみようか。リストのレプレだ」

そう言って一枚のCDを村田に渡す。村田はそれをラジカセにセットし、再生ボタンを
押した。リストの「前奏曲」。通称「レプレ」だ。

「地味だなあ」

拓也はそつと隣の上条にささやいたが、反応がない。顔を見てみると、上条は見事に寝
ていた。昨年もそうだったが、とにかくメイン決めは眠い。だからといって二年生が寝る
か？拓也は肘で上条の脇腹を小突く。

「うお」

と低く唸り、上条が目を覚ます。

「どこまで行った」

「おまえらが選んだ曲はもう終わったよ。今は笹野さんが持ってきた曲」

「マジか、やべえ、つうかもうわかんねえ」

「頭から聴いてた俺でもわかんねえよ」

けやき坂の面々、特に初心者組には少々よくわからない曲のように聴こえた。だがそれ以外の部員にはウケが良かったらしい。結果的に多数決を取ってみたら、「ロメオとジュリエット」と僅差ではあったが「レプレ」に軍配が上がったのである。こうして拓也たちが迎える二度目にして最後の定期演奏会のメインは、リストの「前奏曲」に決まった。この日はひとまずここまでにして、選曲会は解散となった。練習終了のミーティングをし、全員で机と椅子を元に戻す。山上と岸は笹野と早田と一緒に、音楽室の隅で合奏の日程の調整などについて打ち合わせをしている。

机を運びながら、拓也は聡子に声をかけた。

「なあ、俺あの曲全然よくわかんなかったんだけど」

「レプレ？」

両手に椅子を持ちながら聡子が答える。

「そう」

「まあちよつと一回聴いただけじゃアンタには難しいかな」

「上条も寝てたしな」

「寝るのも仕方ないか。でも低音、途中で死にそうなくらい難しくなるからね」

拓也が置いた机の脚元に椅子を放り込みながら、聡子は笑顔で話す。

「死にそうなくらい難しいのに何で笑ってんだよ」

次の机を持ち上げ、拓也が返す。

「最後の定期だもん、骨がないとね」

そういつて聡子も次の椅子をまた両手に持つ。

「穏便に済ませたかったよ」

「嫌だよそんなの。低音セクション、鬼練するからね」

「鬼って戸崎のことか」

聡子は無言で右手に持った椅子を拓也のスネにぶつける。

「うごっ」

「ほら早く机持ってきてよ」

聡子はうすぐまりそうになる拓也を急かす。

「鬼じゃん…」

聡子に聞こえないように呟きながら、拓也は一旦その場に置いた机を再び持ち上げた。

何はともあれ、定期演奏会のメインは決まった。メインさえ決まれば、けやき坂の選曲は早い。新しい曲を探してくることも滅多にないからなのか、実行委員が優秀なのかはわからないが、その後の一週間で定期演奏会の演目全てが決まった。

*

あつという間に月日は流れ十二月。お隣の瀬野川高校はというと、すでに定期演奏会が終わっていた。瀬野川高校吹奏楽部の定期演奏会は毎年十二月である。定期演奏会が終わったあとは部内アンサンブルコンサートなどの小規模なイベントはあるものの、部活はおむねヒマになる。部員はただひたすら個人技を磨いたり、勉強の遅れを取り戻したり、といった塩梅だ。

「あー、ヒマ。てか寒っ」

「楽器ふいてりや身体暖まるんじゃない？」

ヒーターのそばでスライドをシャラシャラと伸び縮みさせている大城咲子に、篤子は音階練習をしながら答える。定期演奏会が終わって一週間の休みを経ての、久々の部活である。アンサンブルコンサートの割り振りもまだ決まっておらず、まさしくヒマな一日なのだ。

「あそううちの親が撮った写真あるけど見ない？」

大城はもはや練習する気などさらさらない。

「写真って定期の？撮影禁止じゃなかったの」

「フラッシュ禁止でしょ。フラッシュ使わずに撮ったから全部ボケてるけど」

そう言っただ城はヒーターから離れ、自分の鞆から写真の束を取り出す。

「なにこんなに撮ったの!!」

「らしいよ」

おおよそ五十枚ほどだろうか。撮っていないで聴いてよ、と篤子は思わなくもないが、我が子の姿を写真に納めたい大城の親の気持ちもわからなくもない。なんといつても一応最後の定期演奏会なのだし。

「うわっ何これ」

篤子が驚いたのは、おそらく部間の休憩時間になった瞬間に撮ったと思われる客席全体の写真だった。どうやら大城の両親は一番前の席に座っていたようで、客席すべてが写真

にほぼ納まっている。

「良く見たら満席じゃんこれ」

「そうなのよねえ。ステージからだど客席の奥の方までは見えないから気付かなかったけど」

篤子の言うとおり、写真で見ると限り空席は一つもない。客席が明転した瞬間に撮ったのだろう。ややボケてはいるが、間違いなく満席である。

「やっぱコンクールで本選行けなくても金賞取るとこんなことになるのかね」

「創部以来最多の入場者数だったらしいよ。立ち見の人もいるしね、ほらこの辺」
やや分かりづらいが、確かに客席最後尾のさらに後ろに人影がいくつも見える。

「なんか申し訳ないな」

「なんでよ」

苦笑いしながら写真から目を離れた篤子に対して、大城はキョトンとしている。

「演奏がコンクールより良くなかったから」

「まあ、それはね…毎年のことなんだけどね…」

八月のコンクールを最後に三年生が引退し、定期演奏会は一年・二年中心で臨む。受験に差し支えない三年生は有志で参加出来るが、時期が時期だけにその数は少ない。演奏は総じて昨年までの瀬野川とさして変わらないレベルのものであった。

「コンクールは選抜のベストメンバーだけど、定期演奏会はそうじゃないからね」

大城の顔にはやや諦めた感が漂っている。

「でもこれだけの人が聴きに來てるんだからやっぱりね…コンクールも大事だけど定期つてもっと大事な気がするんだよね」

「もう何を言っても後の祭り。うちらにはもう定期ないから」

そう言っただ城は写真を鞆にしまい、再びヒーターの傍らに戻った。よほど寒がりらしい。

「もう定期ないか…」

「まあ来年有志で出るなら別だけど。篤子出るの？」

「わかんないな」

呟いて篤子は練習を再開した。

「あんた来年定期出る？」

「いや決めてない」

練習終了後、瀬野駅に向かって篤子と大二郎は歩いてきた。大二郎は電車通学、篤子は自転車通学なので篤子は自転車を引きながら、大二郎のお見送りをしているようなものがある。

「今日咲子が定期の写真見せてくれたんだけど、満席でさ」

「知ってる。ホールの定員が八百。来場者数が八百五十近く。今までのほぼ倍」

「改めて数字聞くと凄い数だね」

「だな」

大二郎も寒がりなのか、マフラーに口元をうずめているので篤子には声が少し聴き取りづらい。

「でまあ、そんなに人が来てくれてんのに演奏があんまりさ」

「だな」

かろうじて見える大二郎の顔の上半分が、やや険しくなる。

「気持ち的にはリベンジしたいっつーか、ここの定期変えたいんだよね」

「うん」

大二郎の返事が短いのは、とにかく寒いからだろう。背中が丸まって視線の高さは篤子とほぼ同じところまで降りてきている。

「で、アンタが出るなら出ようかなって思ったの」

「篤子が出るなら俺も出るよ」

震える声で大二郎が答える。歯がカタカタと音を立てそうである。

「何よそれ。それじゃ決まらないじゃん」

「だな」

「あーもうどうしよう」

苛立ったように、篤子は自転車のベルをジリジリと鳴らした。

「コンクールだろ」

「何が？」

「定期の前にコンクールがあるだろ。まずそれ片付けないと」

「わかっているけどさ…」

「集中した方がいい。来年はもうスーパー二年生はいないぞ」

同じ高さで篤子にぶつかった大二郎の視線は、もう三年生のそれになっているような気

がした。

「いつも見てるとわかんないけどさ、いつの間にか頼れるアニキっぽくなってきたね」
「どうだろう」

この人が部長なら来年も大丈夫かな。多分定期も二人で出られるよね。出ようね。

「はあ…」

「まだダメージ抜けてないんですか？」

職員用の喫煙所の椅子に座りタバコをふかしている田口の下へ、山之内がやってきた。田口は数年ずっとタバコは吸っていなかったが、三年生が引退した後の寂寥感から山之内にもらいタバコをして以来、再びタバコを吸うようになった。とは言っても家では禁煙だし、生徒に「田口くせえ！」と言われるのも嫌なので生徒が帰ったあとに数本吸う程度なのだが。

「なんとかありませんかねえ」

田口は首だけを山之内に向けて、恨めしそうに呟く。

「にやにをでふか？」

タバコに火を付けながら山之内が訊ねる。新しいタバコの臭いが狭い部屋に広がる。

「なんで定期演奏会十二月なんですかあ」

今度は視線を元に戻し、誰もいない正面の壁に向かって田口は呟いた。

「まあ昔からそうなっちゃってますからね。学校側もそれで予定組んでますし」

山之内は椅子には座らず、田口の側面の壁に寄りかかり田口を見下ろすようにして立っている。

「けやき坂の四月ってのも理由がよくわかりませんでしたけど、うちの十二月ってのもねえ。なんとか三月になりませんかね。三月。三月がベストだと思っただけだなあ」

「それは難しいですよ色々…」

と言いながら山之内は煙で輪っかを作って遊んでいる。

「ホントにい？」

「ホントに」

山之内も珍しく「何とかしましょう」とは言わない。すでに来年のホールも押さえてある。

「コンクール終わって三年生が抜けた状態で練習期間四か月ですよ！」

田口の語気が荒くなる。それだけ納得いかない演奏会だったということでもあり、瀬野川の部員たちに期待をかけていたということでもある。

「分かっていますよ。でも難しいんですよ……」

「難しいってことは不可能ではないわけでしょう」

「まあ……」

山之内の歯切れが悪くなる。

「なんとかしましょうよ……再来年くらいから……ねえ？」

突破口を見つけた時の田口はいたずら小僧のような顔になる。そしてその顔をされると、何故か逆らえないことを、山之内は自分でも分かっている。この男が赴任してきてからの九か月で、それは嫌と言うほど痛感している。

「まあ再来年なら何とか……してみましようか……」

山之内は頭の中で色々と計算を働かせているのか、煙を見上げて呟いた。灰が足元に落ちる。

「あつ先生落としましたよ」

「あ……落ちましたねえ」

「ええ落ちました」

そして二人は同時にフーッと煙を吐きだした。二人の周りの風がふわりと動く。山之内が転任で瀬野川を去るまでの残り数年間、この二人の奇妙な関係は、そのふわりとした風のような雰囲気を保ったまま、最後まで続くことになる。

*

「よし、一部は桜井、三部は橋本で行こう」

笹野滋が下振りを決めたのは、年末最後の練習日である。十一月から十二月の間、橋本と桜井以外に二年生の聡子、光田、村田にも一部と三部から数曲合奏をさせてみて、最も優秀だったのが橋本と、来年の学生指揮者である桜井だったというわけだ。二部に関しては早田が比較的多く合奏が出来るとのことで、すでに何曲かは早田の合奏が始まっており、結局下振りは不要、ということとなった。

「というわけで笹野さんは試験が二月にあるから、それまでは合奏に来れません。橋本さんと桜井さんの指示に従って、皆で協力して合奏を進めて行きましょう」

山上の締めにはあ、と部員が答える。

「じゃあ今日の練習は解散にします。お疲れ様でした」

昨年よりも選曲は早かったにも関わらず、下振りの問題で結局今年は二部以外の曲は通し演奏を出来ていないが、それも仕方ないことだった。年内に下振りが決まっただけでもよしとしなければならぬ。

「橋本さんと桜井さん、ちょっとおいで」

これから音大受験のラストスパートに入る笹野は、スコアを見ながら下振りの二人にそれぞれ曲についていくつかのポイントを指示している。

なかなか長い打ち合わせになりそうだ。山上はまだ部員が多く残る中、誰に何を言うでもなく音楽室を後にした。ほとんどの部員は部室に楽器を置いているが、万が一に備え、山上は毎日楽器を持って帰るようにしている。学校の備品ではなく、高校入学時に親に買ってもらった自分の楽器である。

自転車の前かごに楽器を入れ、校舎を出た後はたらたらと瀬野駅方面へ向かう。駅へ向かうルートはいくつもあり、山上は未だどの部員にも遭遇したことのない道を今日も選び、えっちらえっちらと坂道を登って行く。坂道を登り終わり、やや遠くに駅が見えてくる辺りに、ちょうど自動販売機とベンチがある。山上はそこで一旦自転車を置き、ホットココアを買い、ベンチに腰掛け橋本を待った。橋本エリと付き合っていることはまだ公表していない。いつも時間差で学校を出て、このルートで落ち合うわけだ。とはいえこの時期は、かなり寒い。今日のように山上が先に待っている時もある。逆の時もある。なるべく寒い中待たせたくはないなあ、毎回先に出る方法は無いかなあ、などと山上は考えたりする。

「よっ」

聞きなれない声に驚いて、弾かれたように顔を上げると、そこには橋本エリではなく聡子がいた。

「えっなんで戸崎さんこんなとこいんの」

それはどちらかというと聡子のセリフなのだが、これまで部員遭遇率0%の秘密のルートである。山上はかなり動揺した。寒いはずなのに汗が出てくる。

「なんでって、ここアタシのルートだもん」

「うそ？今まで会ったことないじゃん」

「音楽室の鍵締め、最後アタシになることが多いからね」

確かに。聡子は渉内として音楽室の鍵の管理もしている。他にも渉内担当はいるが、長

は聡子であるから、たいていの場合、聡子が最後まで残ることになる。

「今日は野崎君に任してきたから。早上がり」

「ああ、そう…マジか…」

山上は痛恨の極みといった面持ちで下唇を噛んだ。次に来る質問は分かっている。まあ聡子も知っていることだから別に構わないのだが。

「もしかしてエリ待ってんの」

来た。やっぱりそうダイレクトに訊ねられると気恥ずかしい。

「まあ…そう…だね…」

自分で耳まで赤くなっているのがわかる。なんか俺、恥ずかしい——っ！

「あらー、ケナゲだねえ。でも何もこんなところで待たなくても学校で待てばいいじゃん」

「そんなことしたらバレンじゃん」

「バレンじゃんって、もう皆知ってるじゃん」

「は!?!」

何故に。何故にそのようなことに。

「だって無理だよアンタら伊野君に見られてんだもん」

「内緒って約束しなかったっけ？」

「してないと思うよ。してもアイツは忘れるけど」

悔った。伊野のバルサンなみの拡散能力を悔っていた。まさしく痛恨の極み、そして今

までのこの密やかな苦労は一体何だったのか。

「まあでもこの調子だとエリとは上手くいつてるみたいだね」

「さあ」

はいそうです、とも言えないだろう。そんなキャラでもない。

「ねえ休日とかどんなデートしてんの？」

「どんなんて…アイツも休日は勉強してることが多いからそんなに出かけないし」

「でもたまには行くでしょうよ」

喰いつくなあ戸崎さん。

「まあ出かけるときは…買い物してマックとか寄って、とかそんな感じだよ」

「ふーん。意外と普通。楽器屋巡りとかしちやってるのかと思った」

「しないよ」

ふっ、と笑いながら山上は答えたが、思わず目を伏せた。まあ実際、そういうデートの

時もあるのだ。

「あれからメイブルのライブとか行った？」

「あー下北とか吉祥寺とか行ったよ」

「へえ意外」

「すげえ上手いトランプペットの人がいてさ。結構楽しいよ」

「ふーん」

なんだ、振ってきた割には反応悪いな。

「ま、いいや。そろそろエリも来そうだし、アタシ行くわ」

「あ、うん」

「でもこんな寒い時期に待ったり待たせたりは切ないから、これからは学校から一緒に帰りなね」

そう言い残して聡子は自転車のペダルを踏み込み、去って行った。

「なんだ、もう皆知ってたのか」

これからはコソコソとしなくて良いという安堵感と、密会気分が味わえなくなった寂しさで、山上はどうにも微妙な気分になった。

ふと聡子がやって来た方角を見ると、橋本エリがもうすぐ登り坂に差し掛かるうとしているのが見えた。山上はココアの缶をゴミ箱に捨てて自転車にまたがり、さつき登ってきた坂を下り始めた。とりあえずもう、密会をする必要はない。誰に見られても構わないわけだ。だったら少しでも、一緒にいる時間を長くしたいと思う。吹奏楽部の部員として一緒に過ごせる時間は、あと三ヶ月しかない。

*

年が明けてからの練習は、特に問題がなかった。学生指揮者の橋本と桜井も良くやっていくし、早田の合奏も順調だ。不安材料があるとすれば、笹野がやはり今年はまだ一度も部活に顔を見せていないことぐらいか。このままなんとなく練習して、なんとなく本番を迎えて、なんとなく引退するんだろう。山上はそんな風に考えていた。残された時間で何を後輩に託していけるかだとか、充実した日々を過ごすだとか、そんな熱い思いは正月のコタツの中で消えた。何より音楽室や教室の暖房が眠気を誘う。そんな部長の雰囲気は、部活全体にも伝播していて、雰囲気こそ悪くはないのだが皆なんとなくだった。四月の定

期演奏会に向けて確実に練習は進んでいるのだが、その歩みはどこかのほほんとしていて、かといつてたるんでるわけでもなく、皆それぞれそれなりに、なんとなく、淡々とといった様子であった。まるで風が止まってしまったかのような一月が過ぎ、やがて二月を迎えた。

そんな二月の初週、音大受験を間近に控えた笹野がひよつこりと音楽室に顔を出した。ちようと橋本がレプレの合奏をしているところだったが、笹野に気づいた橋本はすぐに指揮を止め、笹野に軽く会釈した。それを見た部員が一斉に橋本の視線の先を振りかえる。

「あつ、きりーつ」

山上の変わらぬ号令で、これまた部員も変わらぬバラバラ具合で立ち上がる。

「よろしくおねがいしまーす」

「よろしくおねがいしまーす」

この日に笹野が来ることは知らされていなかったこともあり、とりあえず山上としては「よろしくおねがいしまーす」以外の言葉が浮かばなかった。ただのOBJじゃあるまいし「こんにちはー」では妙である。

笹野とはいえば、

「うん、続けて」

そう言つて手近な所に余っていた椅子に腰かけ、手持ちのスコアを開いた。どうやら合奏を見物する様子である。なんといっても年末最後の練習で橋本と桜井に指示を出してから、笹野が部活を訪れたのは初めてである。なのに自分で指揮を振ることもなく、これといった一言もなく、無言で椅子に座り、合奏が始まるのを待っている。なんとなく演奏していた部員たちの緊張は否が応でも増した。

中でも下振りの橋本が最も緊張しただろう。指示された通りに合奏を進められているかどうか。年が明けてからの部員の空気をみると、どうにも何か、熱のようなものが欠けているのが気がかりではあった。

指揮棒を握り直し、つい山上の表情を伺ってしまう。山上は無言で頷いた。橋本もそれに頷いて返す。

「じゃあ、お忙しい中笹野さんにも来ていただいたので、一旦アタマに戻します。通すつもりでやるのでよろしくお願います」

はあい、と部員たちから返事が返ってくる。アタマは低音パートのピアノシモから始まる。本来ならコントラバスのピッチカートが入る部分だが、けやき坂にはコントラバス

がない。

ブン、と音が鳴る。まともに音が鳴ったのは聡子のバリトンと、一年生のバスクラリネットだけである。橋本が下振りをしていて何が怖いかと言えば、レプレに関してはこのアタマである。テューバはピアノシモの指定に慎重になりすぎているのか、この一ヶ月、「ぷすう」と音にならない空気だけが飛んでくることがほとんどだ。まともに音が出た試しがない。暖房の熱と緊張が入り混じって、橋本のこめかみあたりにジワリと汗が浮かぶ。木管低音だけでもなんとか音は出たので、そのまま曲は進んでいく。元々なんとなくやって来た一ヶ月だが、笹野の突然の訪問で急に緊張に襲われた影響もあって、奏者それぞれ何の抑揚もなく拍車がかかる。速いパッセージは乱雑に。ゆったりとしたメロディには何の抑揚もない。もう限界だー橋本がそう思った時、合奏の音を切り裂くように「パン」と大きな音がした。手を叩いて合奏を止めたのは笹野である。

「橋本さん、無理に通さなくていいから。いつものように合奏をして」

笹野はスコアに目を落としたまま凍てつくような声でそれだけを言った。

「は、はい」

橋本も慌ててスコアを一旦冒頭部分に戻す。

「アタマの低音が気になるのもう一度アタマからやります。他のパートも、全体的に速いパッセージが雑なのでしっかりと吹くこと、長いメロディもフレージングを考えて、集中してください。では」

橋本が改めて指揮棒を構える。低音パートも楽器を構えた。

「ビビんなくていいからとりあえず音出して」

拓也のほうを振りかえり、聡子が小声で注文をつける。拓也は無言で頷く。

ブン。

今度は拓也も権田も音が出た。しかし如何せん音が大きすぎた。

「そうそう、テューバもとりあえずは今みたいに音が出るようにして。後はパート練習なんかでピアノシモで発音できるようにひたすら練習しておいて」

「はい」

橋本の指示に権田が返事をする。拓也は返事をせず何やら譜面に書き込みをしている。

「今日は多少音が大きくてもいいから、今の感じ忘れずに。じゃあ全員でもう一度アタマから」

こうして橋本の合奏が進んでいったが、笹野が来ていることもあって少しは集中したの

か、これまでの合奏に比べやや多くの改善はみられたものの、全体的には学生主体の限界が見えてしまうような合奏だった。続いて行われた桜井による第一部の合奏も同様である。「では時間になりましたので今日はこれで合奏を終わりにします。ありがとうございました」

「さーしたー」

桜井が指揮者台を降り、部員たちからは「ドッ」と音が聞こえてきそうな程の疲労感が音楽室中に放出される。拓也はベルを下にしてテューバを脇に立て、座ったままで「ぬふああ」と伸びをした。聡子もさすがに疲れたようで、ストラップを外し楽器を膝の上に置き、虚空をボーッと見つめている。

山上がそのまま練習終わりのミーティングをするために席を立ちかけた時、背後から笹野が肩を叩いた。振り向いた山上の目に映った笹野の顔は能面のように無表情で、彼が苛立っていることがその表情から分かる。見続けたら石になってしまいそうな目に氷の炎を燃えたぎらせながら、笹野は一言「二年生、全員残れ」とだけ山上に伝えた。これはヤバイことになった。瞬間的に危機を悟り、「はい」と返す声がかすれる。

「えー、お疲れ様でした」

「さーしたー」

さーしたーはマズインだよ今日は。と山上が焦ったところでもうどうしようもない。簡単に学生指揮の橋本と桜井から次回への改善点などの指摘があり、他には特に誰も発言を要する者がいなかったの、山上はそのまま締めに入った。

「では今日の練習はこれで終りです。が、二年生は全員、楽器を片づけた後もう一度音楽室に集まってください」

「ええー、だりいよー」

部内一、愚痴が多く口の悪い小島がすぐさま不満を口に出す。

「笹野さんからお話があるので」

しかし山上がそう言うと、マズった、という顔をして小島は黙り込んだ。そんなわけが年が明けて早々、二年生は笹野からお説教を喰らうハメになったのである。笹野は時に突き放すように冷たく言い放ち、時に烈火のごとく叫び、都合一時間ほどキレにキレまくった。二年生一同は生きた心地がしなかった。合奏中に注意されるのとは次元が違う。しかも説教が長く、いちいち痛いところを突いてくる。なんとなくこの一年近くで笹野にも慣れて来ていた二年生たちだったが、本来笹野はこういう怖ろしい男なのだということ

久々に思い出していた。

「まあ、今日の説教は以上だ。各自悔いを残すな」

「すみませんでした」

山上が謝るのに続いて、他の二年生も同じように謝罪した。

「謝るんなら俺じゃなくて適当にやってた自分自身に謝っとけ」

「すみません」

謝り倒す以外に何と返したら良いのかわからない。山上は再び謝罪するしかなかった。

「よし、じゃあここからは別件なんだが」

笹野の声から怒りの色が消える。少し安堵した二年生たちはそれぞれに俯いていた顔を

上げ、笹野の顔を見る。

「音大の受験まであと十日くらいだ。それが終わったら練習に顔を出す」

おお、と誰からともなく声上がる。

「だけど試験の結果がどうあれ、俺は今度の定期で指導を辞める」

は。全員の口が何かを言いたそうにポカンと開かれる。笹野は皆の顔色を伺うことすらせずに話を続けた。

「俺にはこの先二つのパターンがある。試験に合格した場合と、落ちた場合。まず合格した場合だが、もちろん音大の授業を優先する。適当にやるつもりはないから、相当忙しくなる。ってか休みはないと思う。だからここには来れない。次に落ちた場合。この場合はマジで来れない。さすがに何年も浪人でできないからな。落ちたら来年がラストチャンスだ。だからメチャメチャ忙しくなる。もちろん休んでるヒマはない。だからここには来れない。ということはどう転んでも来年はここには来れない」

今年の田口に引き続き、笹野滋よお前もか！と拓也は心の中で毒づいたが、仕方がないのも分かる。そもそも来年は自分だって引退しているわけで、まあどちらかと言えばどうでもよい。

「来年はどうすべきでしょうか」

どうでも良くない立場なのは山上である。部長として、はいそうですか、といって後輩に判断を任せるのはさすがに酷だ。

「音楽の先生に顧問をお願いするか…」

「音楽の先生は合唱部の顧問になっちゃってます」

山上が答える。この選択肢はボツ。

「したら学生指揮か…」

「学生指揮だけは難しいと思います。どうしてもパートに抜けが出ますし」
 今度は橋本が答える。この選択肢もボツ。

「じゃあ外部講師使うか」

「プロの指導者に来てもらうということですか」
 再び山上が答える。

「そうだ」

「いやでもそれだとお金が…」

「部費いくらだったっけ？」

「月五百円です」

「俺んときと変わってないな。都立だから仕方ないか…」

あごをさすりながら、笹野はしばらく思案する。拓也たちはひたすら黙って笹野と山上の会話が再開するのを待つ。

「それでもやっぱり誰かプロ呼ぶしかないだろうな。OBじゃ心許ないし」

「部費を上げるのは部員の親と学校の許可が要りますが…」

渉内を担当している聡子が口を挟む。

「いや、部費を上げずに、何とか安くやってくれる人を探す。まあ安かろう悪かろうかもしれないけど、アマチュアに振らせるよりはよっぽどいいだろ。試験が終わったら俺が探してくるよ。アテがないわけじゃない。どうだろう」

「どうだろう、と言われても急に振られた話で、そうですね、とも言い難い。」

「来年僕たちはいませんで、一年生の意見をまとめます。それからでもいいですか」

そう山上が答えると、

「もちろん」

と笹野もあっさりと答えたものである。なんだか、部長としての対応を試されていたような気がしないでもなく、山上は複雑な気分だった。こうして笹野に始まり笹野に終わったショックな一日が幕を閉じ、二年生一同は真っ暗な夜の道を、寒さに震えながら帰って行った。

「本当ですか！やった！皆どう？」

最初に盛り上がったのは次期部長の岸である。笹野から提案があった翌日の練習後、山

上は早速一年生を集め、指揮者の件について意見を求めていた。

「良いと思う人、挙手！」

岸が挙手を募ると、全員が手を挙げた。

「ええ〜…」

山上としてはかなり拍子抜けだ。

「オマエらもうちよつとこう、反対意見とかないわけ？不安とかなんとかさ」

「皆挙手したんでいいんじゃないっすか？プロの指導者いいじゃないですか」

岸はこの話に乗る気マンマンである。

「桜井さんはどう」

どうもノリだけで生きているような岸を無視して、山上は桜井に声をかけた。

「そうですね部費も上げないってことなのであんまり指導には来てもらえないとは思いますが、足りない部分は学生指揮の合奏とか分奏で補えると思います」

「あ、そう…」

桜井からも反対が出なければ、これ以上特に言うこともない。

「じゃあその方向で笹野さんをお願いするけど、本当にいいの？」

山上は最後にもう一度念を押したが、「はい」という間の抜けた返事が返ってきただけだった。だりいなあコイツら、と思ったが口には出せない。

「じゃあそれで進めます。お疲れ様でした。解散」

山上の号令を受けて、一年生が散らばる。「すっげー、プロだつてよ」「楽しそう」

「燃える〜」など様々な声が聞こえる。そんな彼らのお気楽な声を背中に受けながら、山上は音楽室を後にした。まずは今後の方針を顧問のほうの笹野に伝えるに行かなくてはならない。まあ、すでに甥っ子から聞いている可能性もあるが。

山上が久々に部長らしい悩ましい仕事をこなしていたその時、こちらも久しぶりに瀬野駅近くのレストランに聡子と拓也の姿があった。はたから見れば学校帰りの恋人同士のように見えるが、本人たちにそのつもりはない。一度だけとは言えデートもしたわけでお互い少しそういった気持ちはあるのだが、互いの気持ちに確信がない。よくある話だ。

「中は暖かいなあ」

紅茶をすすりながら拓也はぼんやりと声をかけた。

「眠くなるね」

聡子も返す。

「やっぱ暖房のせいで合奏眠いのかな」

山上の正月ボケから伝播した独特の気だるさに最も早く染まったのは拓也である。

「まあそれもあると思うけど、昨日の笹野さんの怒りっぷり考えるとそれだけじゃないと思うよ」

似たようなシチュエーションが前にもあったなあ、と聡子は思い出していた。あれからまだ半年くらいだが、長かった半年でもあり、あつという間の半年でもあった。

「なんか夏前に雰囲気が似てるんだよなあ」

拓也も当時を思い返していたらしい。

「そうだね、なんとも気合の入らない感じ」

もちろん聡子は不満があつたが、当時と違うのは自分も雰囲気に吞まれていた点である。

「また山上に一席やつてもらうか」

「山上君自身がダメなんだから今回はダメなんじゃない」

「それもそうか」

拓也も聡子も、年が明けてからの山上には期待していない。

「そう言えばアンタって初めはパーカッションで入部しようとしたんだよね」

聡子が話を入部時にまで戻す。

「え？ああ、そうだけど」

話が急に飛んだので、拓也は上手く付いて行けない。

「あつという間だったね」

「そうだな」

そしてまた話が現在に戻る。聡子の時制はどうなっているのか、わけが分からない。

「あと二ヶ月だよ」

「分かってる」

聡子はちよつとセンチメンタルな気分になっているのだろうか。拓也はそうも考えたが、聡子の性格を考えると多分そうではないだろう、という気もした。

「部長は部長で変わっていくとは思うんだけど、昨日笹野さんが言ってたみたいに、アタシたち一人一人、もう一度考え直した方がいいとは思うんだよね」

「はあ」

やっぱりセンチメンタルではなかったか。

「アタシはさあ、バリサクの後輩いないから、バスクラも含めて低音の一年生全体ちよつと鍛えたいんだよね」

「今から？」

「まあ一から鍛えるわけにもいかないけど。なんていうのかな、何か残していききたいのよね」

「残すねえ」

昨日の笹野の言葉にもあった、「残す」。いまいち拓也にはその感覚が分からない。自分がいなくなったら、ただ何も残らないだけだ。先輩の広田から何かを残されたり託されたりした感覚がないので、余計に「残す」という感覚がわからないのである。

「アンタは直属の後輩いるんだからしっかりしないと。権田君、どうするの」

「どうするって言われても、もう放置しちゃってるからなあ」

「放置しちゃ駄目じゃん。先輩として色々言っておきたいことあるでしょう」

「ないわけじゃないけどさあ…」

正直、権田と関わるのは面倒だ。何よりあのキラキラの瞳が苦手である。

「じゃあやっぱ残していつてほしいわけよ」

「その残すっていうの、よくわかんないんだよ」

まあ聡子もその気持ちは分からなくもない。抽象的である。形のないものを残す。それは伝統とかそういうものかもしれないし、でも伝統っていうのはもつと根深いものかもしれないし。

「じゃあさあ、残すじゃなくて伝える、っていう風に置き換えてみれば」

「伝える」

拓也がオウム返しをするということは、まだ分かっていないということだ。

「だからあ、アンタが早田先輩とか広田先輩とかから教わったこととか、自分が二年間で感じたこととか。ただでさえアイツ副部長やるんでしょ？運営についてもアンタも一枚かんでた時あるんだし、色々あるんじゃない、伝えられること」

「運営にかんだのは戸崎の謀略じゃないか。そもそもアイツと会話が成立しないんだよ」

「それだ！会話だ！」

聡子が身を乗り出して顔をグツと拓也に近付ける。勢いでやってしまったが聡子自身も恥ずかしい。もちろん拓也も恥ずかしい。

「ちよつと、顔、近いから…」

「ゴメン…」

微妙な空気が流れる。ヌフン、と咳払いをしてから拓也が口を開く。

「つまりその、もっと権田と会話をしろと」

「まあ会話つっても指導の範囲内がいいと思うんだけど。別に無理に仲よくなれとか言うてんじゃないから」

今まで拓也の放置主義のおかげで緊張感のある中で権田は自分なりに精いっぱいやれていた。逆にここで馴れ合いの関係になってしまっただけはそれでもつたいない。

「それはつまり放置をやめるってことになるな」

「そうなるね、っていうか後輩放置してるの部内でアンタだけだからね」

「そりやおまえ、他のパートには権田いないからこの気持ちわかんねえだろ」

「まあアタシは低音セクシオンで権田君見てるからなんとかくわからなくもないけど。でも最後の二ヶ月ぐらい、放置やめてもいいんじゃない」

「うーん」

拓也は考え込むように口元を押さえた。

「うーんじゃなくて。やって。アンタがこの部活にいたってこと、残したいのよ」

アンタとアタシがこの部活にいたってことを、残したい。一緒に悩んで一緒に吹いてたってことを。

「わかった、やるよ」

戸崎の依頼は断らない。期待には背かない。失望させない。内なる密かな誓いである。

「小野田さんにも言っておくよ。ユーフォとチューバのパーリーは俺だから」

「よろしく、リーダー」

「茶化すなよ」

「ホント、リーダーって柄じゃないよね」

「うるせえよ」

二人の顔にようやく笑みが浮かぶ。お互いの笑顔に幸せを感じちやったりする瞬間なのだが、絶対に口には出せない。そんな二人なのである。そして翌日以降、拓也は久々に権田への指導を再開した。拓也から話を受けた小野田も、たぶん聡子に言われたんだろう、と薄々気が付きながらも、自分も何か残していけないかと考えながら後輩への指導にあたった。

*

「あら、久しぶり！」

田口由紀絵が玄関のドアを開けると、笹野滋が寒そうに立っていた。

「ご無沙汰してます」

「寒いから早く入って入って」

「お邪魔します」

音大受験が終わった数日後の平日夜、笹野は田口の家を訪れた。来年のけやき坂にプロの指導者を招くことは、すでに部内で決まり、顧問の笹野次郎の承諾も得たと、山上から報告を受けている。アテがあると山上たちには言ったが、実際には笹野自身にそのようなコネはない。そんなわけで田口の出番、ということなのである。田口には既に先日電話で事情を伝えてある。

「ゴメンね、まだあの人が帰って来てないのよ。もうすぐ帰ってくるはずなんだけど」

「いえ、こちらこそお忙しい中すみません」

そう言いながら笹野はテーブルの椅子に腰かけた。

「いいのよ！私も久しぶりに笹野君の顔見られたしね」

久しぶりに会う由紀絵は相変わらずだ。笹野も相変わらずなのだが。多分田口も相変わらずだろう。

「なんかプロの人呼ぶんだって？」

たつぷりとコーヒーが入ったカップを笹野の前に置きながら由紀絵が話しかける。

「もう聞かれましたか」

いただきます、といって笹野はそのコーヒーを慎重にすする。暖かい。

「もちろん！あの人がすぐに言っちゃうから」

「瀬野川高校にも伝わってるんですかね」

「それは知らない。瀬野川に伝えても意味ないし、伝えてないんじゃない？」

「確かにあまり意味ないですね」

ふっと笹野が笑う。どうもこの家に来ると落ち着く。居心地が良いのだ。

「ただいまー」

やがて田口が帰ってきた。

「おうスマン、ちよっと遅れちゃった」

立ち上がった笹野に座るように手で指示を出し、マフラーを外す。

「ちよつと着替えてくるから待ってて」

そう言うと田口は寢室へと向かった。その間に由紀絵が田口用のコーヒーを淹れる。やがてジャージ姿の田口がリビングに戻ってきた。自分の席に置かれたコーヒーに目をやり、妻に「ありがとう」と言いながら腰掛ける。「どういたしまして」と言いながら由紀絵も自分の席に着く。由紀絵は関係者ではないが、かといって席を外すということもない。

「見つけてきたぞ」

コーヒーをひとすりした後、唐突に田口が笹野に話しかける。

「え？」

「えってオマエ、指揮者だよ」

「もうですか？」

「さつき会って話つけてきた。正式な依頼があり次第、契約スタートだ」

「早いですね…」

早すぎる。笹野としては今日いろいろと注文を出そうと思っていたのだ。

「オマエらの状況はだいたいわかってるからな。条件かなり厳しいから大御所は連れて来れないけど」

「いえ、特に金銭面の条件が悪いのでそれは期待していませんから。で、どんな方ですか」

田口はそれには答えず、もう一度コーヒーをすすった。

「ああーうまい。ところでオマエ、本当にもう振れないのか」

想定外の質問だった。もう振れないから田口に話をもちかけたのだというのに。

「ええまあ、試験の結果がどう転んでも、やっぱり無理ですね」

「そうか。残念だな」

笹野は何とも返しようがない。

「安い条件で引き受けてくれたのは俺の学生時代からの友人だな」

田口は話しを戻す。外部講師の話である。

「はい」

笹野は一言も聞き漏らすまいと真剣に耳を傾ける。この条件を山上に伝えなくてはいいない。

「吉田^{よしだ}ってやつだ。吉田^{たけお}武雄。全国的にも無名、さらに支部レベルでも無名。まだまだ駆け出しだが、中学と高校の吹奏楽部を中心に指導してる」

「吉田さん、ですか」

知らない。誰だ。

「まあこの学区では指導してないからな。知らなくて当然だ。で条件だがレッスン一時間で五千円」

「それって安いんですか、高いんですか」

「アイツの指導を見たことは何回もあるけど、指導力からすれば安いよ」

「けやき坂の今のスタイルだと合奏二時間だから…」

「一日一万円ってことだな」

「うーん」

笹野が考え込む。部費は月五百円。部員数はだいたい毎年四十人。月に二回の指導で部費がすべて吹っ飛ぶ。出来ればもう少し指導に入ってほしいところだ。

「でもこれ以下の条件で探すと、下手するとオマエよりレベル低いプロが来るぞ」

「そんなプロいるんですか」

「ゴマンというよ、胡散臭いのが」

田口は吐き捨てるように言った。

「だからまあ、学生指揮で乗り切れるときはなるべくそれで乗り切って、溜めた部費でリンクールと定期演奏会前だけ集中的に指導してもらうのが良いと思うがね」

「まあ、そうなっちゃいますよね」

「あと一つだけ条件があつてな」

「なんでしょう」

まだ条件があるのか。

「そいつ住んでることが遠いんだけど、交通費…まあガソリン代だな、それは指導料に込み。となると実質あんまり良い金にならないわけよ」

「はあ」

プロだもんなあ。そら金にはシビアだよなあ。

「で、期間限定なら、つてことで」

「え」

そんなに頻繁に指導者を変えていては部員が混乱するのでは、と笹野は心配になる。

「期間は、笹野が音大卒業するまで」

「え」

「つまりだな、卒業したら、まあ他の仕事もあるかもしれないが、やっぱりオマエがけやき坂の指導者になれ」

それはちょっと厳しい。留学だつてしたい。そのレベルに達するかどうかは不明だが。「それが吉田の条件。正直他にも何人か当たったけど、これ以上の条件の人材は俺も知らない」

「そうですか…」

音大を出てまで、金のない母校の指導。それでは食べていけない。何より目指すべき目標はもつと先にある。

「ま、わかんないけどな。吉田がけやき坂に愛着持てば安いままで継続してくれるかもしれないし」

「そうですね」

願わくばそうあつて欲しい。笹野はコーヒーをすすった。その気難しい横顔を、由紀絵は心配そうに見つめた。母校に縛られるのもちよつと可哀想な話よね。

「笹野君、夕飯食べてくでしょ？」

「え？いやそこまでお邪魔するわけには」

「いいじゃん久しぶりなんだし。いいでしょ？」

由紀絵は今度は田口に問いかける。

「ああ、いいよ。俺も久しぶりだから色々話したいし」

「じゃあ決まり。もう匂いで分かつてると思うけど今日カレーだから。元気出るよ」

ああ、この人たちは何でこんなに優しく、なんで俺が弱ってる時に力になってくれるんだろう。将来のけやき坂とのことはひとまず置いておいて、今夜は甘えてみようか。昔みたいに。学生時代みたいに。

「じゃあ、頂いて行きます」

結局この日は夜遅くまで語り、笹野は終電で帰った。翌朝田口が寝坊したのは言うまでもない。

*

「分かりました。うちなんかをその金額で指導いただけるなら本当にありがたいお話しです。ありがとうございます」

「ありがとうございました」

山上に続いて頭を下げたのは次期部長の岸である。田口家でカレーをご馳走になった翌日、早速笹野は山上と岸に来年の指導者についての報告をした。早速とは言っても、試験が先週末に終わってから毎日部活に顔を出しているから、その流れの中で伝えたままで、特別な日というわけでもない。

「じゃあ学校経由で正式な依頼を出しておいてくれ。これが吉田先生の連絡先。叔父さんじゃあ対応できないだろうから、一応山上と岸、二人の連絡先も先方に伝えておいてくれ」
「わかりました」

吉田の名前と住所、電話番号が書かれたメモを受け取り、山上はそれをポケットに突っ込んだ。

「じゃあそろそろやるぞ。五分でチューニング終わらせて集合」

そう言うとき笹野はカバンからスコアを取り出し、指揮者台に登った。山上と岸は教室で練習している他の部員に合奏開始を知らせるために音楽室を飛び出て行った。

そんな調子で入試が終わってから笹野の合奏は毎日続き、やがて二月末に音大の合奏発表の日を迎えた。その日は平日だったが、さすがに笹野は学校には来ない。その日はパート練習だけにして、終わりのミーティングの最中に、顧問の笹野から、部員たちは笹野滋が無事音大に合格したことを聞かされた。

「うちの一族から音楽家が出たぞ！」

と顧問の笹野は小躍りするほどに上機嫌だったが、そこまで活力のある笹野先生を見たのは部員にとっても初めてで、それはそれで面白い光景であったが、何より自分たちを一年間指導してくれた先輩が音大に受かったというのは、自分たちのことのように嬉しく、また誇らしくもあった。

それから一週間は色々準備しなければいけないこともあったのだろう、笹野は学校には来なかった。代わりに早田が毎日顔を出し、おかげで集中的に二部の合奏を進めることが出来た。

そして三月の二週目、少し落ち着いた笹野はけやき坂校の正門をくぐった。今日からまた合奏を再開する旨は山上に伝えてある。かつては生徒だった自分が来賓用のスリッパに履き替えて校舎内を歩くのは、未だに不思議な感覚だ。それにもまして不思議な感覚がしたのに気付いたのは、二階の踊り場に差し掛かった辺りだった。楽器の音が聴こえない。まさかあいつら俺がいない間にまた元に戻っちゃったんじゃないやねえだろうな、と思いながら

四階まで登り、音楽室の前まで来た。それでもまだ楽器の音は聴こえない。

「嫌だな。そういうの苦手なんだけどな」

呟きながら音楽室のドアを開けると同時にクラッカーがスパパパンと立て続けに鳴り、続いてパーカッション・アンサンブルの演奏が始まった。そして西堀が「せーの」と大きな声で合図をすると、

「笹野先輩、合格おめでどうございまーす！」

と部員全員が叫んだ。続いて山上から花束が渡される。

「先輩、おめでどうございます」

「こんなことしないでいいんだけどな」

そう言いつつ花束を受け取る笹野の表情は、本人の自制も及ばず、ニヤケまくっているのであった。

続いて早田が近づいてきた。

「やったなあ」

「なんだオマエいたのか」

「いたも何も、世界初演だからさ、この曲」

そこでジャン、とパーカッションの演奏が終わった。部員からは歓声が沸き起こる。

「この曲ってパーカッションの今のやつか」

「そう」

早田は腰に手をやって胸を張る。

「オマエって曲書けたの？」

「今のが処女作だよ。なかなか良く出来てるだろ」

「いいね」

「だろ」

「独学にしては、だけどな」

「素直に褒めればいいのに」

笑いながら、二人の友人は拳を突き合わせ、笹野の音大合格をあらためて無言で祝した。

「先輩、一言！」

やや離れた位置から拓也が声をかける。

「めんどくせえな」

と早田にだけ聞こえるように呟いて、笹野は姿勢を正した。

「えー皆、ありがとう。パーカッションの演奏も素晴らしかった。ありがとう。以上」

「えっ終りッスか!？」

中本がコケそうなフリをする。他の部員も「えー」「もっとー」などとはやしたてる。

「本当にありがとう、だがこの件は以上だ!とつとと楽器出して準備しろ、十分後にレプレやるぞ!」

一瞬固まった後、笹野の声色がマジだと気づいた部員たちは「はい!」と勢いよく返事をして各々合奏の準備に取り掛かった。

「恥ずかしがり屋さんだねー」

早田が笹野の脇腹を突く。

「苦手なんだよ。ところでオマエどうする。今日振ってくか?」

「いや俺は今日は祝いに来ただけだから。見学してくよ」

「そうか。じゃあこの花頼む」

無理矢理に花束を早田に預け、早速笹野もカバンからスコアを出し、指揮者台へと登る。人の吉報に乗じて浮かれ騒ぎやがって。あと三週間、地獄を見せてやるぞ。そう誓ったどこまでも素直ではない笹野なのであった。

その後三月は、笹野か早田、どちらかが学校に来て合奏することがほぼ毎日になり、パート練習の時間が取れるのは週に一日ほどになった。もちろんその貴重な一日、聡子と拓也、そして小野田は低音セクションとして後輩たちと一緒に練習をした。主に一方的に拓也と権田が聡子にしごかれるハメになったのではあるが、聡子の指摘にすぐに対応できる拓也や小野田を見ていると、来月の今頃にはもうこの三人の先輩はいないんだな、と権田は今更ながら不安と寂しさを感じるのであった。そして定期演奏会まであと二週間を切った三週目、思わぬ人物が音楽室を訪れた。

いつものように音楽室を訪れた笹野の目に、見られない人物の姿が映った。なかなか恰幅の良い体格で、暖房が暑いのかセーターを肩にかけてシャツの袖をまくっている。

「よろしくお願ひします」

笹野に気付き、すぐに近づいて来て挨拶をする山上に、

「あれ誰?」

と笹野は尋ねた。

「あ、来年から指導をお願いした吉田先生です」

「あれが吉田さんか。なんでいんの？」

笹野の口調はやや不満そうだ。

「指導に入る前に見学しておきたいそうで…あ、僕と岸はもう挨拶済ませましたんで、先輩もお願いします」

「お、おお」

まあ確かに来月から契約期間に入るわけだし、見ておきたいというのもわかるが、事前一言あってもいいだろうに。そんなことを考えながら、あちあち、とハンカチで胸元を扇いでいる吉田の下へ笹野は向かった。

「あの、吉田先生…ですか」

「お、君が笹野君？」

笹野よりも背の低い吉田は、やや見上げる形で反応したが、特に愛想はない。なんだこのふてぶてしきは。まあ田口先生と同じ年なわけだしわからなくもないが、この人とは合わないような気がする。

「悪いね、急に来て。ちょっとどんなもんか見させてもらおうかと思ってさ」

「そうですか。よろしくお願いします」

どんなもんか見る？見たところで来年からこのどうしようもないバンドの指導をしなきゃならないのは変わりがないだろうが。そんなことを思いながら頭を下げる。

そして田口の合奏が始まった。曲目はレプレだ。合奏が始まって三十分ほど、何度か目に合奏を止めて笹野が指示を出している時に、吉田が口を挟んだ。

「笹野君、今のところその表現はちょっと違うんじゃないかな」

なんだと貴様。もちろん声には出さないが、笹野はスコアに手を伸ばしたまま固まり、吉田を凝視する。部員はどうしたものかと固まっている。そんな固まっている笹野と部員を、拓也は冷静に見わたす。これだから、少し首を回せば全体が目に入るチューバの位置は好きだ。なかなか面白い光景に出くわす。笹野の様子を伺う者。吉田の様子を伺う者。特に一年生は来年の指導者である吉田のほうを向いている者が多いようだ。

「まあそもそも、まずはちゃんと吹けてないとなんだけどね。今更言ってもしようがないとは思うけど、レプレは…」

「おっしゃる通りです」

話し始めた吉田を、背筋も凍るような声色で笹野が遮る。部員の目はいつせいに笹野に注がれる。

「吉田先生には先生なりの表現がおありだとは思いますが、おっしゃる通り、今更です。先生の音楽を伝えても間に合いません。来年から指導をしていただけることには僕も感謝しています。来年に向けて色々と思うところもあるとは思いますが、この定期演奏会だけは一切口を出さなくてくれますか。この演奏会は、僕と彼らとで作ります。本番まであと二週間ありませんが、コイツらはケツは合わせてきます。一年間…二年生に關しては去年の定期演奏会から、まるまる一年間、僕は彼らを見てきました。必ずケツは合わせてみせます。ですので…」

なんでこんなにムキになっているんだ自分。なんでこんな熱血教師みたいなことを言っているんだ？

「わかった、もういい」

吉田はまだ何か言おうとする笹野を制した。そして

「もともと僕は様子を見にただだったから。申し訳ない。今日はもう帰るよ。定期演奏会はじっくり聴かせてもらうから」

そう言い残して、吉田は静かに音楽室を去った。音楽室を出るとき、笹野に向かって軽く会釈をした。その表情には笑みが浮かんでいたが、嫌な笑みではなかった。

音楽室は静寂に包まれた。皆が笹野の言葉を待っている。

「あ…一年生、すまなかった。来年からあの人に指導してもらうのに、言い過ぎた。すまない」

笹野は頭を下げた。何故だか知らないが熱くなってしまった自分が愚かしい。

「だけど本当に時間がない。皆分かっていると思うけどな。もう誰も頼れない。俺たちだけでやるしかないんだ」

一年生はどうしていいものか、下を向いている。まあ仕方がない、なんだかんだでまだ一年生だ。で、部長と副部長のコンビはというと、山上は言葉を探しているのだろうか、下唇を噛んでいる。中本は…感動してんのか？泣きそうだ。仕方ねえなあ。

「だから…」

「せんばーい」

なんとか自分の気持ちを説明しようとする笹野の話を通り、拓也がわざと大きく声をかけた。部員の視線が一気に拓也に集中する。

「時間ないんすよー。続けましようよー」

拓也の間の抜けた声が、場の緊張を少し和らげたようだった。

「やりましょう、俺らケツ合わせますから！」

中本が目には涙を浮かべながら声を張り上げる。

「先輩、合奏の続きをお願いします」

山上が穏やかな声で促す。

「そうだな。でもオマエら吹けてねえくせに口先だけは一丁前だな」

笹野はそう言ってふっと笑みを漏らす。とそこで、スネアドラムのリムショットがパァンと室内に響き渡った。

「二年、集中！」

光田だ。

「そうだ、集中。さつき止めたところからもう一度行くぞ」

「はい！」

笹野の声に冷気が戻る。いつもの笹野に戻ったサインだ。それに呼応するように部員たちもいつになく気合を入れて返事をする。

聡子が振りかえって拓也に向かって親指を立てて見せた。拓也は「いやいや俺は何も」といったように手を左右に振って、すぐにチューバを構えた。やれやれだ。

*

「やっべ…」

朝、聡子が顔を洗うと、下唇のあたりに何かが出来ていた。ヘルペスだ。よりによってなんで最後の日にヘルペス出来るかアタシ。気づけばあつという間だった。今日はけやき坂高校吹奏楽部、定期演奏会の本番である。ついてないにも程があるが、最後だし、無理すればなんとか本番はもつか…。不安を抱えながら、カバンの中の譜面が揃っているかすべてチェックし、聡子は家を出て演奏会場となるホールへと向かった。昨年同様、前日のうちにトラックに楽器を積み込んだ。そのトラックは今朝、学校からホールへと移動してくる。ドライバーも例年通りOBの須崎なので、おそらく部員が集まる頃にはホールの駐車場に着いているだろう。

「おはよー」

「おはよー」

午前九時前、ホールには続々と部員が集まってくる。今日は午前中にゲネプロ、午後は

存分に口を休め、夕方から本番、という段取りである。

「聡子おはよ」

「おはよ」

聡子がホールに到着し、すでに群がっている部員たちの下へ向かった時、最初に声をかけてきたのは村田だった。

「どしたの元気ないじゃん。低血圧？」

「いや別にそうじゃないんだけど、ちよつと、ヘルペス…」

俯きがちに聡子は答える。あまり皆に見られたいモンでもない。

「は？ヘルペス？」

村田が聡子の顔を下から覗きこむ。

「あ、ほんとだ。しかも下唇じゃん。吹ける？」

サックスの口の構えは、下唇を少し歯の上に乗せるように巻き込まなければならない。

「まあとりあえず、やってみる」

やるしかないじゃん。今日で現役最後なんだから。痛くたって何だってやるしかないじゃんか。

やがて九時になり、点呼が始まった。さすがに一人の遅刻者もない。点呼の後、顧問の笹野次郎から

「えー、くれぐれも怪我には気を付けるように」

との一言があった。次郎はこの後、本番の受付まで出番がない。彼にとってはとてつもなくヒマな一日が始まったことになる。

「須崎さん、お願いします」

山上から指示を受けた岸が須崎の運転するトラックを搬入口へと誘導する。楽器の積み下ろしは主に男子部員の仕事だ。去年は男子部員が山上、中本、上条、拓也の四人だけだったので朝から相当へばったが、今年は倍以上の人数がいるので積み下ろしもサクサクと進む。

「よし、十時から始めるぞー」

積み下ろしの進み具合を見ながら笹野滋が指示を出す。

「早え！十時かよ！これから舞台セッティングもあるんだぞ」

噴き出す汗をハンカチで拭いながら、中本が愚痴る。それを聴いた上条がさらに愚痴る。

「いいだろお前らは楽器の準備も簡単なんだから。木管大変なんだぞ」

ホルンの中本、トランペットの山上、テューバの拓也は金管楽器、サクソスの上条は木管楽器である。木管楽器は楽器の組み立てもさることながら、特にクラリネットとサクソスはリードと呼ばれる木の板のようなものの選定が難しい。同じような形をしていても、吹く場所などによって吹きやすさや音色がコロコロと変わる。音楽室で調子が良かったリードでも、ホールで吹いてみたら全くの役立たずになる場合もあるのだ。そんなわけで金管楽器奏者が唇のウォームアップをしている間、クラリネットとサクソスはひたすら手持ちのリードの中から今日その日のコンディションにあったものを数本、探すわけである。

昨年はリードにもさほどこだわりがなかった上条ですら、今年はリード選びに慎重になるようになっていた。

ヤバイ。予想以上に痛い。舞台セッティングが終わった後、パーカッション・パート以外の部員は客席に降り、各自楽器の準備を始めた。聡子も客席に座り、大きなバリトン・サクソスを何とか手早く組み立てる。そしてリードをマウスピースに装着し、早速楽器を吹いてみようと思ったが、ヘルペスの位置に微妙にリードが当たり、擦れた。この時の痛みは聡子の予想をはるかに超えていた。だがやるしかない。やると決めたのだから。こうなるべく力を入れなくてもいいように薄いリードを選ぶしかなかった。それでも構えるだけで痛いことから、本当に自分の運の悪さを呪いたくなる。

やがて十時になり、舞台上に全部員と笹野が集まった。

「午後から休憩があるつつつてもそんなに口回復しないからな。ゲネは軽く吹け」

笹野が指示を出す。聡子にとってはラッキーだ。目立つところ以外はなるべく吹かずに、なんとか本番につなげたい。

「じゃあ一部から、本番と同じように通すぞ。まず舞台暗転で全員待機。パーカッションのアンサンブルが終わったら一曲目すぐに行くから、俺を見ておくように。よろしく」
 そう言うと笹野は舞台スタッフに舞台と客席の暗転を指示する。ただの通し合奏ではなく、すべて本番と同じように進行の練習をするわけである。

こうして一部からアンコールまで、部間の休憩時間までも本番通りに行くと、ちょうど正午を回る頃になった。笹野がゲネプロの終わりを告げる。

「よーしじゃあゲネは終りにしよう。昼にしてそのまま本番前のチューニングまで休憩。休憩中に楽器を吹きたい奴は吹いてもいいが、本番でバテないようにセーブしてくれ」

「きりーっ」

山上の号令で、全員が起立をする。さすがに疲れたのか、本番の日であってもやはり動きはバラバラだ。

「笹野先輩、早田先輩、本番よろしくお願いします」

「よろしくおねがいします」

本番をよろしくお願いするにも関わらず、やはり緊張感のカケラもない。笹野も早田もOBであるからその辺りも慣れたもので、

「よろしく頼む」

「振り間違えたらゴメンね！」

と言って舞台を降りた。

「えー、それではお弁当がロビーに届いていると思いますので、各自取りに行って食べてください。お手伝いの先輩がごみ袋を用意してくれていると思うので、弁当の殻はホールのごみ箱には捨てないように。ではチューニングまで、解散にします。お疲れ様でした」

「さーしたー」

腹減った：拓也はその場に楽器を置いて一番に立ち上がると、上条に声をかけて素早く客席に降り、客席前方の分厚いドアを開けてロビーに向かった。とにかく腹が減って仕方がない。スロープを登りロビーに出ると、久しぶりの人物に出会った。

「おー、伊野君！」

「あらー、緒川先輩！」

「ちよつと、先にアタシでしょうが」

「ううっ、広田先輩」

ロビーで弁当の見張りをしていたのはこの三月にけやき坂を卒業した、緒川小百合と広田裕子だった。まあ久しぶりと言っても卒業式の日二人には花束を渡したので、つい先日会っている。けやき坂高校吹奏楽部では、パートの先輩が卒業する時、クラスまで押しかけて後輩から何か贈り物をするというのが慣例になっている。トロンボーン・パートには二年生がいなかったので、桜井たちと一緒に拓也と小野田は緒川にも贈り物をしていた。そんなわけだから久しぶりでもないのだが、部活の場で会うのはほぼ一年ぶりだから、久しぶりと言っても良い感覚なのである。

「お手伝いの先輩って、広田先輩達だったんすね〜」

「え何？聞いてないの？ダメだなー山上君は」

「まあ山上ですからね」

広田と久しぶりに話をしていると、続いて上条が客席のドアを開けてスロープを登ってきた。

「おい上条、緒川先輩来てっぞ」

「お、マジか」

そう言つて上条は駆けると、おちゃらけて敬礼なんぞしながら、

「緒川先輩、久しぶりッス！」

と声をかけた。

「あー上条君久しぶり！髪伸びたねえ」

「切るタイミングなかったんスよー」

どうやら上条の失恋の傷はもう癒えたようだ。わだかまりなく緒川と会話を続ける。それよりも未だ林田から返事をもらっていないことが、悲惨と言えば悲惨である。

やがて続々と部員がロビーに集まり、昼食を取り始めた。二年生は各々、緒川と広田に挨拶をして行く。桜井たち、トロンボーンの一年生もちろん緒川の登場に盛り上がった。弁当を凄まじい速さで食べ終えた二年生男子四人は、相も変わらずロビーの隅っこにあるマット敷きのスペースを占領し、だらけきっていた。このスペースは腰ぐらいまでの高さの壁で周りを囲まれていて、各自壁に寄りかかって足を投げ出して座っている。腹が少し落ち着いてきたところで、

「マジだりーあと三時間もあんじゃん」

と腕時計を見た中本があくびをしながら愚痴る。

「しょうがねえだろ。ゆっくり休んどけよ」

そう返す山上も眠そうだ。

「じゃあ俺、そろそろ緒川先輩んどこ行ってくるわ」

何がそろそろなのかわからないが、サツと立ち上がり上条は離脱した。

「アイツいいのかよ。林田さんに見られたらマイナスポイントだべ」

中本がニヤつきながら誰にもなく呟く。

「どうしようもねえよアイツは。それより林田さん、実はもうどうするか決めてんじやねえのかなあ」

拓也が答える。

「山上どう思うよ」

拓也が山上を見ると、山上はいつの間にかマットに横たわり眠りに落ちていた。

「こいつもなんでこれで部長やってこれたんだろな」

今更な疑問を拓也が口にする。

「こんなんだからブクブク太るんだよコイツ。とはいえ俺も眠い。寝るわ。伊野も寝とけ」
そう言い残して中本も同じようにマットに仰向けになり、やがて静かに寝息を立て始めた。ガラ悪いくせに寝相は妙に真面目だな。中本を見ながら拓也がそんなことを考えていると、壁の上から小声で拓也を呼ぶ声が聞こえた。

「うおっ」

振り向くと、聡子の顔が近くにあった。

「戸崎、近いっ！」

「アンタが急に振り向くからでしょ！」

お互い思わず赤面してしまう。

「なんだよ」

やや落ち着きを取り戻して、拓也が問う。

「あー、ちよつと話しておかないといけないことがあつて。ちよつと来て」

「ええー今から寝ようとしてたのに」

「後にして」

聡子の口調には逆らえない凄みがあった。そもそも拓也は聡子に強くない。それは本人もわずかにしか自覚していないくらい小さな恋心のせいなのだが。

「マジで？そんなに痛いのか、そのペルヘス」

「ペルヘスじゃなくてヘルペスね」

多くの部員が寝息を立てている中、拓也と聡子は、ロビーのさらに奥、皆から死角になる革張りのベンチに並んで腰かけている。今ちよつと聡子からヘルペスが痛くて楽器が吹けない、という話を事細かに聞き終わったところだ。

「でもオマエ、最後の日に限ってなあ…」

「言わないでよ」

「ごめん」

少しの間沈黙が流れる。戸崎が楽器を吹けなくなった。本番はどうなるんだ？拓也はあれこれと考えてみたが、妙案なぞ浮かびようもない。けやき坂のバリトン・サクスは聡子一人で、同じ木管低音には一年生のバス・クラリネット吹きがいるが、音量、テクニッ

クとも心許ない。

「あのさ」

聡子が口を開く。

「うん」

拓也は相槌を打ち、次の言葉を待つ。

「別に青春ごっこでもなんでもなくて現実的な話なんだけどさ」

「うん」

聡子は考えながら話しているようで、少し間が空く。

「今日はもう、任せるから」

「任せるって…何を」

拓也は聡子の顔を見ようとしたが、聡子は俯いていて表情は読み取れない。

「だから…全部…低音は全部アンタに託す」

「いや楽器吹けないってのは分かったけど、託すって言われても」

「全部託すから。アタシの分のパートまで吹けとかそういうことじゃなくて。今まで必死に練習してきたとか。アタシの想いとか。この二年間、全部…アンタに…」

最後は涙声になっていたが、周りが静かなのでしっかりと聞き取れる。

「それは…ちよつと荷が重いなあ…」

ふーっと息を吐き出し、拓也は天井を見上げた。

「俺、自信ねえよ」

拓也の答えに、また沈黙が流れる。拓也は、言うてから後悔した。ここは嘘でも「任せとけ！」なんて答えるべきだったんじゃないだろうか。拓也がまた大きく息を吐き出した時、聡子が拓也の腕を強く掴んできた。

「そんなこと言わないで…アタシの全部、預かってよ…」

掴まれた腕が、だんだんと揺らされる。聡子が鼻をすする音が聞こえる。

「預かってよ…アンタじゃないと、ダメだから…」

拓也の腕をゆっさゆっさと揺らしながら、聡子は懇願した。

「アンタが、アタシの、分まで、最初から、最後、まで、一生、懸命、やってくれたら、いいから、それだけで、いい、から、」

聡子は初めて本物の涙を拓也に見せた。というか、泣いた。なんとか絞り出した言葉の後は、うえっ、とか、むぐ、とか、そんな声しか出て来なくなった。

「わかったよ。預かるよ全部。オマエの分まで吹くよ。オマエみたいに吹くよ。カッコよく決めるよ」

そんなこと自分に出来るはずもないと思うが、勢いで言ってしまった。もう取り返しはつかない。やや後悔しながら、聡子の顔を見ずにポケットからハンカチを取り出し、渡す。「うう〜」

そのハンカチで目元を押さえながら、聡子は拓也の腕に顔をうずめた。拓也は石像のように固まって、聡子が泣き止むのを待った。自分の心臓が激しく脈打つのが分かる。しばらくして、聡子の呼吸が落ち着いた。腕がふっと軽くなった。

「あー、泣いちゃった」

拓也の腕から離れた聡子は、赤くなった目で瞼をシパシパとさせて、少し笑った。

「危うく俺も泣きそうだったぞ」

「ゴメンゴメン、はー」

一呼吸おいてから、聡子は拓也のハンカチを自分のポケットに入れた。

「洗ってから返すね」

そういつて代わりに自分のハンカチを拓也に渡す。

「目、真っ赤だな。しばらくここにいろか」

ハンカチを受け取り、一応拓也なりに気を使う。

「いや何か言われても適当に切り返せるから大丈夫。もう行く。それよりさつき約束したこと、よろしく」

目こそ赤いが、言動はいつもの聡子に戻っている。

「わかった」

「じゃあ」

スツと立ち上がると、聡子は拓也をその場に置いて去っていた。アンタじゃないと、ダメだから。確かに聡子はそう言っていた。

「あー？」

やや混乱した頭で拓也は考える。もしかして戸崎って俺のことアレなんじゃないか？ いややそんなことは。まさか。調子に乗るなよ自分。後で痛い目を見るだけだ。

「よし、やるか」

何にせよ、正直今のままでは聡子の要求には答えられない。与えられた時間はわずかな時間だが、少しでも上達しなければ。拓也は雑念を振り払い急いで客席に戻り、練習を開

始した。今まで聡子に頼っていた部分は、すべてカバー出来る様にしておかなくてはいけない。

*

「さて笹野君のお手並み拝見だな」

「アイツは器用だからね。なんとかそれなりには仕上げてくると思うよ」

開場後、客席の二階席中央に陣取って話しているのは、田口と吉田である。田口の隣には山之内もいる。

「そうかなあ。この間練習見に行っただけど手こずってたぞ」

「オマエも手こずるよ」

田口が嫌な笑みを浮かべる。それを見て「うへえ」と吉田は舌を出した。とは言ってもなかなか楽しみにしている様子である。

「にしても田口が顧問やつときながらなんでこの学校ずっと銅賞だったんだ？」

社会人や、学校の部活動に入部していない学生たちから成る一般のバンドを振っていた時の田口を知る吉田には、不思議でならない。

「まあ色々あるさ。俺基礎作り苦手なんだよ」

「でも瀬野川は一年目でダメ金までいったろ」

「今年はメンバーに恵まれたな。まあ核になるやつらは来年もいるけど」

田口に核になるやつら、と言われた部員たちは一階席に陣取っていた。

「にしても客少ないな」

大二郎が手作り感満載のパンフレットを見ながら誰にもなく呟く。瀬野川高校吹奏楽部からは、けやき坂と合同練習をしたメンツを中心に「お世話になったバンドの演奏会だから」ということで多くの部員が演奏会を聴きに來ていた。

「毎年このくらいみたいだよ」

隣の隣から声をかけてきたのは大城である。

「そうなの」

「うちも今年はダメ金取ったから客数増えたけど、去年はこことそんなに変わらなかったじゃないの」

「そうだったっけ」

部長になる前のことは、大二郎はあまり良く知らない。部の運営や細かいことにはとりわけ興味がなかった。ちなみに大城とは、篤子を介してようやく最近話せるようになった。その篤子はもちろん大二郎と大城の間に座っていて、パンフレットを楽しそうに見ている。短い間ではあったが一緒に音楽をした仲間たちが、今日巣立って行くのだ。最後に彼らがどんな演奏を聴かせてくれるのか。上手いか下手か、そんなことはどうでもよかった。彼らなりの二年間を聴きたい。

やがて合図のブザーが鳴り、演奏会開始を告げた。演奏中の注意事項についてアナウンスが入った後、客席が暗転する。舞台も暗転したままで、ホールはしばらくの間、暗闇に閉ざされた。舞台上からパタパタと靴音が聞こえる。そして目が慣れてきた頃に、暗闇の中、突然パーカッション・アンサンブルの演奏が聴こえてきた。これまでのけやき坂高校の定期演奏会にはなかった演出だ。演奏している曲は先日早田が笹野の合格祝いに合わせて作った曲で、もちろん聴衆は誰ひとりとしてその曲を知らない。その未知の曲がジャン、と威勢よく終わった瞬間に、一部一曲目の「はるか、大地へ」が始まる。夏のコンクールでけやき坂が演奏した課題曲である。舞台が明転する。指揮台には燕尾服をまとった笹野滋がいる。「はるか、大地へ」の次は「アルメニアン・ダンス・パートⅠ」。パートⅠとパートⅡからなる作品だが、とりわけこのパートⅠは全国各地で演奏される機会が多く、吹奏楽の「定番」とも言える作品だ。アルメニア地方の民謡を題材に吹奏楽のために作曲されたこの作品は、中間部にアルト・サクスのソロがある。ソロは一年生の時からソロを務める上条の役目だ。西堀のほうがサクスは上手いのだが、どうも西堀はソロが苦手なようで、最後の舞台でもやはりソロは上条に任せていた。その上条はといえば艶のあるサウンドに磨きがかかり過ぎ、内なるリビドーがほとばしるかのようなソロを披露した。こればかりは笹野にもどうにも修正出来なかった部分で、曲中、サクスのソロ部分だけが異様な空気に包まれたのは致し方ない。

何はともあれ、特に大きな事故もなく、なんとか第一部が終了した。第二部はポップス・ステージ。滝本と桜井仕込みの強烈な演奏に、早田の出番はほとんどなかったに等しい。ちょいちょいと音量バランスや音の形を調整した程度だ。そんなわけで今日も早田は淡々と指揮を振る。然るべき時に然るべきパートに合図を出せば良い。

第一部から篤子が感じていた違和感の理由が分かったのは、第二部二曲目の「ドント・セイ・ザット・アゲイン」の演奏中だった。イギリスのフュージョン・バンド「シャカタ

ク」の曲を吹奏楽アレンジしたこの作品は、途中で低音パートのソリがある。ソリとはソロとは別物で、一つのフレーズを二人以上で演奏することである。このソリで、メインで音を聴かせていたのは拓也のチューバである。ソリの箇所だけ立って演奏しているので、低音パート皆で吹いているのは分かる。だが、聡子の音だけが聴こえない。確かに聡子は立ってバリトン・サクスを吹いているように見えるのだが、その音は一切聴こえなかった。聡子に何があったのか―篤子には知る由もなかった。

間にもう一曲挟んで、第二部の最後は「スパイ大作戦のテーマ」。第二部は全体としてこれといった派手な演出はなかったが、この曲だけは最後まで舞台背面の色とりどりのライトを駆使したり、ソリストが舞台前面に出てきたりとそれなりのことはやっている。この曲でも途中アルト・サクスのソロがあった。ここは上条と小島の二人で掛け合う。二人ともこの部活に入った時は初心者だった。小島にとっては初のソロである。ソロ慣れしている上条が引っ張る形になった。またトランペットの山上にもソロがあったが、こちらは高音をことごとく外し、練習不足が如実に現れた。

「面白いサクスだったなあ」

吉田が呟く。第二部と第三部の間の休憩時間、田口と吉田と山之内は揃って喫煙所でこれまでの感想なんぞを述べ合っている。

「あの学年は先輩にサクスがなくて、二年間独学で練習してきたようなモンでさ。しかもスパイの時に出てきた女の子も、アルメニからソロやっていた男の子も、二人とも初めは初心者だったんだよ。まあそれを考えるとよくあそこまで吹けるようになったよ」

田口は感慨深げに煙をふーっと吐きだす。

「特にアルメニの彼は初心者であそこまで艶のあるサウンドを出せるなんてなかなか頑張りましたね」

山之内も会話に加わる。上条のサウンドについては、彼が初心者だったということや、楽器を教えてくれる先輩がいなかったという背景を知ると、誰もが「どうやってあんな奏者に成長したのか？」と不思議に思う。上条のサウンドには二つの秘密があって、一つは滝本有理のファンクを追求した指導、もう一つは無尽蔵の恋愛エネルギーである。モテるためにサクスを始めた上条は、恋を成就させるためにサクスの練習を続けた。そこに昨年の滝本の指導をちよびっと配合したら、そんなサウンドが出来上がった、と

いうわけである。別に真面目な理由は一つもない。彼の求めるものはただ一つ、サクセスと言う名の惚れ薬が欲しかっただけである。

「それにしても聴けば聴くほど不安が募るなあ」

どうも吉田はこの定期演奏会後の指導を引き受けたことを、少々後悔しているようだった。

「生徒たちだけでやってる練習の質が低いのか、それとも何も考えてないのか」

「大丈夫だろ」

田口が他人事のように返す。

「音楽する気があるかどうかは知らんが、あいつら頭はいいからな」

「とてもそんな音は聴こえなかったぞ」

吉田が二本目のタバコに火を付ける。

「音じゃなくて運営の方かな。吉田は去年の定期見てないから分かんないだろうけど、今年は二部の演出かなり抑えてたんだよ。多分笹野もあんまり合奏に来れないし今回は滝本もないし、演出よりも合奏に時間割いたんだろうな。派手に演出付けると演奏が人手不足になるからな」

「ほー。やっぱ学校の先生は見てる所が違うわ。で、滝本って誰だ？」

「ポップスの申し子みたいな人ですよ」

山之内が昨年の定期や今年の合同練習を思い出しながら少し笑う。

「へえそうなんですか。結構なお年？」

「いえ、大学生ですよ」

「大学生…」

参ったな、という風に吉田は頭を振る。

「今日の二部の指揮も大学生だ。けやき坂ってのはそういうバンドだな。たまに才能のあるOBがあそこから出て、そいつらが何かと力を貸してくれる」

「そりゃあアレだな、俺はOBさんに睨まれないようにしないとな」

「それは大事だな」

吉田が二本目のタバコを吸い終わったのをきっかけに、三人は客席へと戻った。

客席では瀬野川の部員が演奏についてあれやこれやと騒がしい。

「やっぱ桜井さん、ポップス強いなー」

篤子は少なからずショックを受けた。ポップスに関してはまだ桜井に追いつけない。むしろ差が広がっているように思える。あの子は一体何なんだ。弟子入りたいぐらいだ。

「演出は特に面白いモンなかったけど、やっぱポップスは普通に上手いな」

大二郎もポップスではまだ瀬野川がけやき坂に劣っていると痛感した。

「まあそれはうちの課題として、今日なんか低音のバランス悪くないか」

近くに関係者が座っているとも限らない。大二郎は声を落として篤子に同意を求めた。

「あ、わかった？」

篤子はニヤリとして返す。なかなかこの男も耳が育ってきたではないか。

「そりゃわかるだろチューバ浮きすぎだもん」

心外だな、という顔をして大二郎も返す。

「どうも聡子が、あ、バリトンが音出でないっぽいんだよね」

先ほどまで聡子が座っていた舞台上の椅子を心配そうに見つめる。

「何かあったのかな」

「あつたんでしょね。咲子何か知らない？」

「いや何も情報入ってないね」

大城が知らないということは当人たち以外は誰も知らないということでもある。最後の最後に何があったのか知らないが、聡子のバリトンを聴けないのは寂しい。

休憩終了の合図となるブザーが鳴り、客席がやや静かになる。やがてゆっくりと客席は暗転して行き、逆に舞台は明転する。

第三部は二曲。まずは一曲目に一部と同じくアルフレッド・リード作曲の「第一組曲」より第一楽章。第一楽章しか演奏しなかったのは、これがけやき坂の限界だからであろう。二部の活き活きとしたポップスの演奏とは異なり、どうにも煮え切らない演奏になっていたことが、練習不足を伺わせる。

おいおい大丈夫か。こんなん最後の「レプレ」が仕上がっているとは思えない。篤子は他人事ながら気が気ではない。去年は田口が指揮を振り、ラストのシヨスタコーヴィチはとても面白い演奏になっていたのだが、今年は果たして。気が付くと篤子は膝の上で両拳を強く握っていた。

そして第三部の二曲目であり、プログラム最後の曲となるリストの「前奏曲」が始まった。笹野が聡子と拓也を順に見てから、指揮棒をゆっくりと振る。冒頭のピッチカートだ。

「すう」

しまった！ビビって音が出ない！拓也は全身の毛穴が開くような感覚を覚えた。聡子も同じような感覚を覚えた。無理してでも吹いておけば良かった！何もかもが終わったかのような錯覚に陥る。しかし笹野を見ると、ゆっくりではあるが指揮棒は確実に動いている。権田のテューバから「ポフツ」という音が聴こえたことに気付くまで、二人はとてつもなく長い時間が流れたような気がした。

どうやら笹野は一音目をその権田の音程のない謎の音から始めることにしたようだ。すぐに二発目の音に向けて指揮棒を降ろす。

「ブン」

今度は拓也の音がホールに響いた。どうやら権田はスカしてしまったらしい。まったく、本番に限って二人揃って音が出ないとはどういうことかと思うが、それが本番の怖さでもある。聡子はやはり吹けなかった。まだ吹く場所ではないという認識もあったが、ここは拓也を信用した。なんといっても自分の全てを今日は預けたのだ。曲の頭から見限るわけにはいかない。

拓也が発した低音から、徐々にメロディが高音楽器へと受け継がれる。緊張感の高い場面だ。同じフレーズがもう一度繰り返される。今度は二発とも拓也は音を当てた。権田も一発は当てたようである。こうしてなんとか無事に「レプレ」は出航し、難曲ながらにそれぞれ持てる力の精一杯をもって、笹野の指揮に付いて行く。「ケツは合わせる」。笹野の言葉が中本の頭をよぎる。そうだ。俺たちはケツを合わせるのだ。集中しろ。

やがて、低音パートが練習中に「嵐」と呼んでいた場面に差し掛かった。誰が初めに「嵐の場面」と言い出したのかは、皆もう忘れた。笹野であったか、聡子であったか。とにかくユーフォニアムも含めた低音パートが速いパッセージを吹く場面である。

来た。ここだ。聡子は痛みをこらえるよりもむしろ受け入れながら、マウスピースを本気でくわえた。痛い。痛い。やるしかない。テューバとユーフォだけでは、音がもごもごしていて細かい音符を聴かせることが難しい。というか、聡子の理想には程遠い。バスケットの一年生はまだ音量不足だ。ここだけは自分が入って行って音の形をしっかりと見せないと、曲の勢いが削がれてしまう。拓也には申し訳ないが、ここだけは預けるわけにはいかない。最後の演奏会。最後の舞台。最後の演奏は、たった十小節ほどの「嵐」だけしか吹けないが、それでも演奏したという事実は残る。このメンバーと一緒に音を出したという事実は残る。それが自分にとってはやはり重要だ。音の形さえ見せれば良い。

無駄な音量は必要ない。

笹野の指揮棒が素早く動く。次の拍から「嵐」は始まる。聡子はハッ、と短い瞬間に大量の息を吸い込み、それをそのままリードにぶつけ、楽器へと流し込んだ。

聡子だ！ 篤子の耳に、この日初めて、ようやくバリトン・サクスの音がハッキリと聴こえた。これ以上ないぐらいの音量で吹きまくる拓也の音にくっきりと輪郭を付けるように、聡子のバリトン・サクスが絡んでいく。嵐のような低音。何があったかはわからなけれど聡子―やっぱアンタの音は凄いよ。

聡子のバリトンは、舞台上の部員にももちろん聴こえた。今日は何かがおかしい。聡子のヘルペスのことを知る部員は少なかったため、多くの部員には原因がわからなかった。ただ、拓也のチューバが鬼神のごとくに唸っているのだけは分かった。そして今、ようやく違和感の原因が分かったのである。戸崎聡子に何かがあった。戸崎聡子は今まで吹いていなかったか、もしくは音量を相当セーブしていた。理由はともかく不満を覚えそうなところだが、普段の聡子が信頼厚い人物だったからかなのか、誰も不満には思わなかった。そうだよ戸崎さん。ケツ合わせなきやいけねえんだ。中本はさらに燃えた。「嵐」の場面が過ぎ去ってからさらに集中力を増したけやき坂の部員たちであったが、だんだんと演奏がヒートアップしてきた。どうやら燃えたのは中本だけではなかったようである。二年生が先にヒートアップし、一年生は必死でそれに食らいつく。

オマエら、ちよつと止まれ！ 笹野は心の中で叫んだ。本番は確かに緊張する。今までと違う感覚も味わう。だからといってこの爆走っぷりはなんなんだ。俺のレプレは―ほんの一瞬、バンドを制御しようとした笹野だったが、それをしようとしたところでもう止まらない、という事実を同時に悟った。バンドは、俺のものじゃない。大人のバンドならまだしも、彼ら、特に二年生にとっては高校生として最後の大舞台だ。このバンドは、彼らのものだ。彼らが作り上げてきたバンドだ。彼らの熱気を、良い方向に持っていけばいい。笹野は瞬時に判断し、後の流れをなるべくバンドに任せるように考えを変えた。もちろんそれが良い効果をもたらすように指揮をする。今までの合奏での組み立てを本番中にバラしながら再構築していくような作業だ。まったくこいつら、最後の最後にやってくれたもんだ。こんな本番、そうそうないぞ。思わずゾクゾクとし、気付けば笑みを湛えながら必死にスコアの先の先を読み指揮を続ける笹野であった。

後半、唸り、吠えるようなサウンドに会場の熱気も上がって行った。そしてそのまま、まるで吹き逃げでもするかのように演奏が終わった。

「ブラボーッ！」

人の少ない客席上方から、田口が叫ぶのを篤子は聴いた。次の瞬間、会場は大きな拍手に包まれた。緻密に、色彩豊かに表現される田口の音楽とは逆を行くようなレプレの後半。悪く言えば雑。だがそれも一つの結果だ。その熱気に、決して多くはない聴衆は拍手を送り続けた。演奏会は、その拍手の中、アンコールへと突入した。

「いやー、たいしたもんだね笹野君」

吉田がタバコに火をつける。会場を出ると外はほの暗くなっていた。外の喫煙所でたむろしているのはこれまた田口、吉田、山之内の三人である。

「レプレの後半急に燃えちやったからな。あれは大変だったろうなあ」

田口も他人事のように弟子を誉める。

「でもあそこで無理に火消しに走らない辺り、冷静な笹野さんらしかったですね」
耳は確かな山之内も同調する。

その後も演奏会の感想についてああでもないこうでもないとなつぷりと三人で語り、気が付けばホールから出てくる客の姿が見えなくなっていた。

「あつ、そろそろお開きだな。どうする？呑み行きますか」

吉田が提案する。山之内も、そうしましょうか、と言ったのだが、

「すまん、俺このOBの呑み会に呼ばれてんの」

そう言って田口は誘いを断った。

「んーじゃあその呑み会が始まる前にゼロ次会ってことで」

吉田も食い下がる。今日会ったばかりの山之内と二人で呑みを始めるのもなんだかぎこちない。搬入口の辺りから楽器をトラックに積む声が聞こえ始めた。演奏会を聴きに来ていた多くのOBが搬入を見守ったり手伝ったりもしているようだ。

「そうだなあ。なんだかんだであと三十分はかかるか。ゼロ次会行きますか」

「それでこそ田口。よし行くぞ」

吉田は意気揚々と先頭を歩き始める。チビとノッポとハゲ、なんだか不思議な組み合わせの三人はホールの敷地から出て、駅に向かって歩き始めた。

「よろしくお願ひします」

「よろしくおねがいします」

部員がトラックに向かって礼をする。

「あいよー。おいお前ら俺が戻ってくるまで先に酔っぱらうなよ」

運転席の須崎が他のOBに向かって呼びかける。

「おい滋、俺が戻るまでくれぐれも頼む、問題起こすなよ」

助手席の笹野次郎が甥っ子の笹野滋に呼びかける。

「わかつてるよ」

笹野が返す。学校にトラックを一晚置くために、顧問の笹野次郎は須崎とともに一度学校に戻らなければいけない。その間の学生の引率を甥っ子に任せたわけである。

「とにかく彼らは学生なんだからな。くれぐれも厄介事は」

「先生、行きますよ」

笹野次郎の話の途中で須崎はブレーキペダルから足を離し、トラックを動かした。

「よろしくお願ひします」

「よろしくおねがいします」

トラックの背に向かって再び山上が号令をし、部員がそれに続く。

「じゃあ行くか。幹事は？」

「あ、俺ツス」

笹野の問いかけに、拓也が一步前が出る。

「よし、先に行つてくれ。よーし皆行くぞー」

こうして拓也を先に店に行かせ、けやき坂の面々は昨年と同じ打ち上げ会場へと向かった。心地よい夜風が彼らの間を縫っていく。それぞれ決して上手くやれたという感触はない演奏会だったが、長い緊張からようやく解放されたわけである。それぞれの反省は打ち上げへと持ち越すことにして、部員たちはキャッキヤとはしやぎながら駅へと歩いて行く。

「えー、何はともあれ、お疲れ様。素晴らしい演奏会でした。だけど終わったからといって気を抜かず、くれぐれも事故のないよう、楽しんでくれ。じゃあいくぞ、かんぱーい」

「かんぱーい」

学校に戻っている顧問の笹野次郎の代役として笹野滋が乾杯の音頭を取り、定期演奏会の打ち上げが始まった。拓也たち二年生男子にとって昨年は退屈だった打ち上げだが、今

年は今日で引退ということもあり各自すぐにパートの後輩に取り囲まれ、その後も色々な後輩が入れ替わり立ち代わり最後の歓談をしに来るので、なかなか忙しかった。特に部長、副部長として一年間部活を引つ張った山上と中本は後輩からの人気が高く、二人の周りには大きな輪が出来ていた。

「おい、淳、淳ってば」

後輩との話に花を咲かせていた中本の輪の向こうから、当日になってようやく打ち上げ代の集金をしている拓也が声をかけた。

「なんだよ」

いささか不満そうに中本が答える。

「アレ見ろ、アレ」

そう言つて拓也が入り口付近を指す。ちょうど上条と林田と一緒に外に出て行くのが、中本にも見えた。

「おおーっとこれは！」

思わず中本も後輩たちを差し置いてそちらに興味が移る。

「最後の審判だな」

拓也は嬉しそうに笑うと、再び集金のために部員たちの間を練り歩き始めた。当日まで集金をしないのは何も拓也が阿呆なわけではなく、昔から続く打ち上げ係の決まりごとだった。一万円しか持っていない、などという部員に連続で当たって釣りがなくなったりと、かなり効率が悪いのだが、集めた打ち上げ代を無くしたりすることもないので確実と言えれば確実である。そんなわけで、部員全員の打ち上げ代を集め終わる頃には打ち上げは終了まで残り三十分に迫っていた。拓也は一時間半ほどまったく打ち上げを楽しめなかった計算になるが、まあそれはそれ、と割り切っている。

あとは後輩に任せてせめて残り三十分ほど雰囲気を楽しむかと、適当な場所に座りグラスにコーラを注いでいると、後ろから骨ばった身体に飛びつかれた。

「うおーいす！」

振り返ると、そこには上条の満面の笑みがあった。どうやら林田の件が奇跡的に上手くいってしまったようである。

「うおーい、遂に彼女出来たか！」

「おうよー！」

「うおお、おめっとさん！」

二人でハイタッチを交わす。

「これでうちら男子四人、あとはオマエだけだぞ」

「あー、そうかそうか」

上条がゆさゆさと拓也の身体をゆするので、未だにコーラが飲めない。

「そうかそうかじゃねえよ。今日ラストチャンスだぞ」

拓也の前に回り込み、いつになく神妙な面持ちで上条が詰め寄る。

「ラストの前にそもそもチャンスも何もないだろうが」

「バカだなーオマエ。戸崎さんいるじゃんよ」

「アイツそういうんじゃねえもん」

自分でも驚くほどの速さで否定してしまう。脈があるのかなのか判然としないまま今日まで来て、昼間にはあんなこともあったのでもしやとも思ったが、やはり脈はない気がする。

「ホント手がかかるなオマエら。まあ何でもいいけどさ、今日は戸崎さんと一緒に帰れよ」

「なんでだよ」

「それはちよつと言えないが、とにかく一緒に帰ればいいんだよ。そしたらわかるって」

謎の言葉を残すと、上条は勢い良く立ち上がりパンパン、と手を打った。場が静まり、皆の視線が上条に集まる。

「えー、皆さん、突然ですが、不肖上条英雄、本日より林田さんと不純異性交遊を始めることと相成りましたー！」

えええええ、と驚きの声上がる。男性陣からは手当たり次第おしぼりが投げつけられる。

「自分で不純とか言ってるじゃねーよ！」

笑いながら中本がおしぼりを投げる。

「上条先輩のアホー！」

と叫びながらおしぼりを投げるのは岸である。

「ああまったく」

と呟きながら、投げ込まれたおしぼりを回収するのは拓也である。それにしても、戸崎と一緒に帰れとはどういうことなのか。期待してはいけないと自分に言い聞かせるが、それでも何かを期待してしまう。上条は何かを知っているか、何かを画策しているか、それともいつもの勘違いか。このままフェードアウトしちゃおうかと考えていた拓也にとって

はややこしいことこの上ない。戸崎聡子のことを好きと言えるかどうか、自分でもよくわからないのである。もちろん付き合えるなら付き合ってもいい。だけど自分からいくような感じでもない。自分のことながらややこしいのである。自分でも「ヘタレ」だとは思わが。

上条の衝撃的な報告の興奮が冷めやらぬ中、頃合いを見て今度は拓也が立ち上がる番になった。そろそろ笹野や山上に締め言葉をもらわなければならない。もちろん岸に来年の決意表明してもらわなければならない。宴はもうすぐ終わりである。

「すいませーん」

立ち上がりパンパンと手を打って、拓也は場の全員を静かにさせた。二年生打ち上げ係の最後の仕事である。

「えー、宴もたけなわですが、そろそろお時間ですので、まず笹野先生から一言、笹野先輩からあらためて一言、それから岸君に来年の：といっても今年ですが、新しい体制での決意表明など、そして最後に一年間部長を務めた山上君から一言、頂きたいと思いません。ではまず笹野先生から、お願いします」

こうして一言では終わらない一言が続く。これを聞くと、ああ、このメンバーで演奏することはもうないんだな、という実感が二年生、一年生に段々と実感として染み渡っていく、ところどころすすり泣きが聞こえてきたりもするわけである。特に涙ながらに語った最後の山上の挨拶はなかなか感動的であり、あの中本も含め二年生の多くがもらい泣きした。拓也が聡子を盗み見てみると、聡子もまた、泣いていた。聡子が泣くのを見るのは今日二回目だ。

山上の挨拶が終わり拍手が鳴りやまぬ中だったが、拓也は仕事柄非情にならざるを得ない。

「はい皆さんありがとうございます。実はもう打ち上げの時間過ぎちゃってまして、お店にご迷惑がかかっていますので、とりあえず急いで出てくださーい」

そういつて手近なところから追い出しにかかる。

「なんだよ伊野君、どうでもいいところでカタイなー」

などと文句を言っているのは小島である。

「最後までお疲れ」

と声をかけてきたのは村田だ。

まだ一年生が泣き止まずへたりこんだりしている。そんな者にも容赦なく追い出しをか

ける。まったく損な役回りである。戸崎聡子は何も言わずに外に出て行ったようだ。まったくこれも、ややこしい。

全員を退店させ、会計を後輩の打ち上げ係に任せて先に拓也が外に出ると、案の定、まだほとんどの部員が店の前に固まっていた。顧問の笹野がなんとかそれを解散させようと「ほらほらオマエらもう遅いからとつと帰れ！」などと煽っているが、帰れと言われると帰りたくない。特に二年生は、本当の本当にこれが吹奏楽部員としての最後の夜である。なかなか踏ん切りがつかない。別に来年は三年生になるだけなのだから今生の別れというわけではないのだが、それでも今生の別れのような気がするのである。

至る所で抱き合って泣いている部員たちを遠巻きに見ながら、拓也は「だりい」と呟いた。山上と中本の影響もあり、この一年でこの言葉を何度呟いたか分からない。

別れを惜しむ部員たちから少し離れた所にいた拓也の傍に、気づくと聡子が立っていた。

「お疲れ」

「お、おう」

先程の上条の言葉が引っかけかり、何だかぎこちない対応になってしまふ。そのまま二人は無言で、気まずい空気が流れだした所へ、今度は打ち上げ係の後輩が駆け寄ってきた。

「先輩、終わりました」

「お疲れ」

拓也は軽くねぎらいの言葉をかける。同じ役職の後輩とは言ってもさほど絡んだことのない後輩だ。その後輩はカバンの中を何やらもぞもぞと探ると、小さな光るものを取り出した。

「先輩、引退の贈り物ツス。あんま話せなかつたですけど、お元気で」

「まだ学校にはいるんだけどなあ」

まるで卒業みたいじゃないか。後輩から受け取ったものをよく見ると、チューバの形をした小さなピンバッジだった。

「おお、ピンバッジ」

「先輩、集めてるって聞いたんで」

上条か。この密かな趣味は上条しか知らないはずだ。目を輝かせる拓也の横で、聡子は少しバツの悪そうな顔をした。

「ありがとう。コレクションに加えてくよ」

ピンバッジをブレザーのポケットにしまいながら、拓也は最後の指示を与えた。

「もうひと仕事、悪いんだけどそろそろ皆を店の前から移動させてくれないかな」

「了解ッス！ではまた！あ、戸崎先輩もお疲れ様でした！」

聡子は無言で右手を胸の前において、別れを告げた。それを見ると後輩は部員の輪の中に入って行って、何とか彼らを移動させようと奮闘し始めた。

「アンタは移動しないでいいの」

ようやく聡子が拓也に声をかける。

「一応見届けてからにする」

「じゃあアタシもそうする」

「そう」

上条の言葉が頭をよぎる。今日は戸崎さんと帰れ。まあ、戸崎もそのつもりなんだろう。その先どうなるかは…わからない。

しばらくしてようやく部員たちが移動を始めた。サッサと帰る者もいれば、他の店でもっと語ろうという者もいるが、とりあえずはこれで拓也もようやく仕事納めである。去り行く部員たちに何かと注意を与えていた顧問の笹野次郎が拓也と聡子のほうを振り返り、

「おまえらも早く帰れよ」

と言い残して自分も駅に向かって歩き出した。これをもって完全にお開きである。

「じゃ行くか」

拓也が歩き始めると、

「違う道で行こう」

と聡子は別の方向に歩き始めた。そっちは遠回りなんだけども、と思いつつも拓也は従った。繁華街から離れ、予備校が立ち並ぶ辺りを通った時、ふいに聡子が立ち止った。

「ちよつとあそこ座ってかない」

聡子が指差したのは公園のベンチだ。公園には人っ子一人いない。

「いいよ」

拓也は聡子に付いて行き、ベンチに並んで腰かけた。座ると一日の疲れがドツと押し寄せて来たようで、拓也は足を投げ出すようにしてベンチにもたれかかった。

「いやー、終わっちゃったな」

「終わっちゃったね」

聡子のほうもベンチに背中を預けてはいるが、さすがに足は投げ出していない。

「レプレの途中で急に吹いたからビックリしたぞ」

拓也が言っているのは「嵐の場面」のことだ。まあそこ意外、聡子は吹いていないわけだから当然のことなのだが。

「ああ、ごめん。やっぱ一音も吹かないで終わるってのは癪だからさ」

「別に謝ることないんじゃない。それよか唇大丈夫なの？」

拓也は首だけ横を向いて確認しようとしたが、公園の電灯の明かりが弱く、いまいち口元がよく見えなかった。

「吹いたときは痛かったけど今は大丈夫。てか見ないでよ」

「ああ、すまん」

拓也は首を元に戻す。正面に見えるブランコが揺れているような気もしたが、揺れていないような気もした。風は柔らかい。

「アタシ、フツの短大やめて専門行くことにした」

唐突に聡子が切り出した。

「そうか。美術か何か？」

「音楽」

音楽。拓也の耳にはちゃんと届いたが、頭までは届いていなかった。

「へー…は、音楽？音楽？いつ決めたんだよ」

「え…さつき決めた」

「は…専門って学費高いんじゃないの」

「でもこのまま終われないでしょ」

やはり聡子は割り切れていなかった。最後の最後で満足に演奏できなかったことを。

「んーそうか。まあいいんじゃない」

「元はと言えばアンタが音大無理でも専門なら、って言ってたんじゃんか」

「そうだったけ？」

拓也にはとんと記憶がない。

「そしたら俺も報告しとくけど、俺専門行くの止めたから」

今度は聡子が驚く番だった。

「うっそ？映画作るんじゃないの」

若干の失望がなかったかと言えば嘘になる。

「いやー作りたいけどね。将来のことと本気で向き合ってみるとこれがまた、やりたいことが多すぎて定まんないんだよね。だから大学行くよ。それからじっくりまた考える」

「そっか」

まあそういう進路もあるか。というかそれが一般的だろう。

「だからまあ、進路バラバラだな」

「そうだね」

気づくと聡子は俯いていて、声は消え入りそうになっていた。

「なんか寂しいよな」

自分で何気なく適当に言っておいてから、拓也は猛烈に寂しくなってきた。

「進路もクラスも違うもんね。もう会わないかもね…」

聡子の声が震えている。涙を堪えているのが拓也にも分かった。

「それは駄目だ。っーか嫌だ」

自分の心臓がバクバクと激しく脈打つ音を拓也は聴いた。ここまで言ってしまったらもうこの先は一言しかない。聡子は黙っている。

「付き合おう」

俯いて黙っていた聡子の制服に、涙が落ちた。

「なんで？」

いや、なんでって言われても。これ以外に答えようがない。

「好きだから」

あああ逃げ出したい。今おそらく自分の耳は真っ赤に染まっているだろう。拓也はあまりの緊迫した状況に寒気すら感じてきた。暑くて寒い。頼むから「どこが？」とか聞くなよ。

「どこが？」

わああ！叫びたい。暴れたい。どこだっていいだろそんなもん。拓也がどう答えたものかとしばらく思索していると、急に腕をはたかれた。

「うそ。ごめんちよっとイジメた。…よろしくお願いします」

聡子は正面のブランコに向かってお辞儀をした。拓也もそれを真似する。二人で顔をあげて、ようやくお互いの顔を確認する。聡子の目には涙が溢れていた。

「本当にいいの？」

確かに拓也は少なからず脈ありの方向で読んではいたが、上手く事が運んでしまうとそれはそれで不安になる。

「いいよ。アタシも好きだったから」

これは拓也には意外だった。聡子からすれば、気づけよバカ、という話なのだが。

「マジか！いつから？」

「知らないよそんなの！」

そう言っただ聡子は再び拓也の腕をはたいた。

「あのさあ」

しばらくの無言の後、聡子が言い出しにくそうに切り出した。

「さっきもらったピンバッジさあ」

「ん、これか」

拓也はブレザーのポケットから先ほど後輩にもらったテューバのピンバッジを取り出した。

「被った」

聡子は全く同じものを拓也の目の前に掲げた。

「ん？」

「上条に聞いてさあ。ピンバッジ。でも被っちゃった。いらぬなら別にいいけど」

聡子は被ったのが余程気まずいのか、顔は正面を向いたままで拓也と視線を合わせようともしない。

「ありがとう。もううよ」

拓也は聡子の手からピンバッジをもぎとり、後輩からもらった方を再びポケットにしまし込んだ。

「でもどっちからもらったか分からなくなるらない？」

「平気だよ」

そう言っただ拓也はカバンからマジックを取り出し、聡子からもらったバッジの裏に小さく「聡子」と書いた。

「ちよつと何！せっかく買ったのにマジックで！しかも聡子って！」

拓也は聡子の抗議には答えず、ブレザーに付けていた校章をピンバッジと取り換えた。

「これで間違わない」

こいつテューバのピンバッジ付けて受験生やるつもりか、と思わず聡子は心の中で突っ込んでみたが、まあ嬉しくないこともない。

少し強い風が吹いた。拓也が腕の時計を見ると、もう十時を過ぎていた。

「そろそろ帰らないとヤバくね？」

「何時？」

聡子は拓也の腕時計を覗き込む。

「十時くらい」

「あーちよっとヤバイね。打ち上げあるから遅くなるっては言ってるけど」

「じゃあ行くか」

拓也が先に立ち上がった。聡子も急いで立ち上がる。先程強く吹いた風の名残か、柔らかな風が二人を包む。

「春だねー」

空を見上げながら、拓也が呟いた。

「春だね」

拓也の横顔を見ながら、聡子も返した。

どちらからともなく手をつなぎ、二人は並んで駅までの道を再び歩き出した。

了